
星光の魔王-シュテル・ザ・エルケーニヒ-

星朔

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

星光の魔王・シュテル・ザ・エルケーニヒ

【NZコード】

N4448Z

【作者名】

星朔

【あらすじ】

次元断層に巻き込まれ死んだ1人の平々凡々のヲタクが居た。そのヲタクは無限大数に存在するとある高町なのはに転生を果たし、リリカルマジカルな宿命へと立ち向かっていく。リリカルマジカルもとい『リリカルバイオレンスマギウスなのは』、始まります。? 注意? この小説のなのはは血みどろの戦いに身を投じる為、そんな無様ななのはさんが嫌だ! という方は閲覧をお控え下さい。

プロローグ 高町なのは、始めました。（前書き）

導入というかテンプレですね。

プロローグ 高町なのは、始めました。

皆様初めまして、じょんじゅは、じょんばんは、おはようございまわ。

高町なのは、3歳です。

いきなりのじょ挨拶に、3歳児ならぬ流暢で小難しい言ひ回しをしていますが、これが私の素です。

何故私がこのような行動をとったのか、簡潔に述べてしまえば、私が転生者であるからです。転生の詳しい経緯は、アホの子戦記をよろしく！

すみません。おかしな電波を受信しました。ちなみに私はヒーロー戦記からのファンです。

話しが逸れてしましましたね。

とにかく、つい今しが、私は私が転生者である事を思い出したのです。

ですがまさかリリカルマジカルの世界で、しかも主人公の高町なのはに私がなつてしまつとは夢の端にも思いはしませんでした。

閣下、予想外にも程があります。

しかし驚いている場合ではありません。

このまま行けば、5年後、私はリリカルマジカルな戦いに身を投じなければなりません。

正直、自信はありません。ボディ的に言えば恵まれているのでしょうか。しかし精神的には平和大國日本在住の自宅警備員。

こどもなりの怖いもの知らずに見え、正義感もあつた高町なのはならつゆ知らず。私のような小心者では万に一つも戦う心はないでしょう。リリカルマジカルは見ているから良いのであって、実際にやれと言われてやりたいとは思いません。

魔法には憧れます、私は平穏無事に2度目の人生を謳歌したいのです。それが私に出来る、この高町なのはへの贖罪なのでしょうから

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

1年が経ちました。

私はやはり高町なのはでなく、正しく高町なのはなのだと、この1年間で思いました。

この1年、私は元来のラノベ好きから発展し、良く本を読むようになりました。しかし読むのは魔法ファンタジーな物ばかり、父様や母様におねだりして、魔装機神や第 次シリーズを買って貰つたり

しながら、スケッチブックにはわけわからぬ発想や設定、理論ばかりを書いて、さらには電子機械系の本を読んだりと、ロボットヲタクで物静かな子となっていました。

本を読み、電子機械系の参考書を読み、理解する為、必然と理数系と文系は得意になつたりはしたのですが、運動はからつきしダメでした。走れば転ぶ、ボールで遊べばボールに遊ばれる始末、これ程までに運動神経がダメだったとは思いませんでした。特に私の場合は男の大人の運動神経感覚がまだ抜けきらない為に余計ダメなのではないかと思つてしまします。

運動出来なら、出来ないなりにやるしかないと、私は方向転換。腕立てや腹筋背筋スクワットを敢行し、少しでも太らないようにします。喫茶翠屋は乙女の敵。その経営家である高町家は、元男の私でも気になるくらい3時のおやつが豪華絢爛です。代わりに乙女にとつてはカロリーとの戦いという聖戦を強いられます……。よく高町なのはは太りませんでしたね。

私でさえ2ヶ月+1キロに抑えるのがやつとだといつのこと。

4歳の一年間は、とりあえず魔法的な物を遊びながら調べ、カロリーとの大戦の日々でした。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

5歳になりました。

この年は幼少期のワーストスリーの年でしょう。

幼稚園から帰つてきたり、いつも迎えにきてくれるはずの母様は居ず、代わりに姉様が私を出迎えてくれました。しかしその表情には霸気がなかつた。

家に着いて、挨拶をしてもシンツとして、姉様の返事以外には聞こえませんでした。

母様は店の方なのでしょうか？

しかし、昨日から父様が出掛けるということで、昨日今日明日の3日間は店を休業にすると一昨日の夜に聞きましたから、母様が居ないのは買い物にでも行つたのでしょうか。でもそれならば姉様に霸気がないのが不自然に思えます。私は自慢じゃありませんが、姉様より中身年齢は大人です。自宅警備員でも人の顔から様子を読み取るくらいは出来ます。

そして霸気のない姉様の顔は、まるで何かを我慢しているかのようでした。

私は姉様には事情を聞かずに、自分の部屋へと向かいました。

私の部屋は、間取りこそ高町なのはのへやと同じなのでしょうが、一言で言い表せば、女の子らしくはない部屋でしょう。

プラモが飾つてあり、部屋のポスターもスパロボですから。

机に向き、スケッチブックを開き、また新しい設定や絵を書いては、息抜きに をプレイしたりして過ごしました。

そして夜になると兄様の気配がし、そして母様の気配も家に帰つてきました。しかし、2階にまで漂う言い知れぬ感覚に、私は1階に様子を見に行こうとは思いませんでした。

気づいたら私はそのまま寝ていて、翌日となっていました。誰かに起こされた感覚はなかつた為、いよいよおかしいと思い、1階に降りました。しかし1階はものけのから。

テーブルの上にはラップ掛けされた食事と、しばらく忙しくなるといつ皿の書かれた母様の置き手紙。

おやりくよつぽど忙しかつたのだらう。朝食はあつても、お弁当がなかつた。

とりあえず朝食をレンジで温めつつ、冷蔵庫の中身から適当に食材をチョイス。

この身体になつてから料理はしていませんが、2年のブランクなどなんのその。自宅警備員は伊達や酔狂ではありません。

フライパンに油を引き、出汁と刻んだニラを入れた溶き卵を投入。出汁巻き卵にします。

朝食をつまみながらお弁当を作る。少し行儀が悪いですが、御勘弁を、幼稚園の始まりは遅くとも、私の5歳児の身体ではこうでもしないと間に合わないので。ちなみにキッチン周りには私の足場とする為、イスがズラリと並んでいます。

そして1人で迎えのバスに乗り、幼稚園から帰つてくれば姉様の迎

え、家に到着後は部屋へ、そして寝倒しての日々が一週間続いたあと、いよいよ色々と私も気になってしまい、姉様にそれとなく尋ねてみたのですが、はぐらかされてしまいました。

しかし、最近の高町家はおかしい。家で母様を見かけることはなくとも、朝食やお弁当に夕食があり、置き手紙もある分、家には帰つてきている様子。

姉様は毎日私を出迎えてくれますが、日に日に顔が悪くなっている様子。

そして一番は兄様でしょう。日に日にピリピリとイラついているようで、道場の方から怖いと思える程の気迫のある雄叫びが聞こえることもザラです。

そして父様。この一週間、まったく姿も気配も感じません。ここまで来ると、私も嫌な予感が頭を過ぎります。

私の父様、高町士郎。

以前は世界を旅し、重役のボディーガードなどを務めていたというとらハの設定は私も知っています。そしてSFAの仕事中に殉職したこと。

ですがとらハでは父様は高町なのはの顔を見ないまま逝つてしまつた人。時期が合いません。

ですが家族第一我が家の大黒柱の父様が一週間も帰らないのはそれこそ一大事を疑います。

ですが、母様も姉様も兄様も、私には話してくれません。

ガードの甘い姉様ですら話してくれないのならば、兄様と母様に訊いたとて無駄でしょう。子どもの私には座して待つしかないのが、辛い。

少し飛んで2ヶ月が経ちます。

この頃は高町家空中分解半歩手前とも言えるかもしない時期でした。

2ヶ月経とうとも、父様は帰つて来ず。冷静な私もいよいよ心が不安定になつていき、家に居ることを少なくするようになりました。それはただ単純に家に居たくないという私の思い。

未だに話しされず、家族は疲れた表情を浮かべ、兄様は余計にピリピリとし、はつきり言つて最悪な雰囲気なのです。

もう六歳を迎える、来月は幼稚園も卒業。そして小学校に上がる身としてはとてつもなく不安定であり、そして嫌だつた。

私に話してくれないのは、私が子どもだからではなく、私が本物の高町なのはではない、高町なのはの立ち位置、存在を奪つた赤の他人だから、家族ではないからなのでしょうか……。

ポタポタと流れ落ちる涙。

何故私は泣くのでしょうか。わかつていたことです。所詮私は高町な

のではない。別のナーフ。

本来の高町なのはには似ても似つかない私は、高町家の一員として暮らす資格など……。

気づけば足は近所の公園に向き、私はブランコに座っていました。今更砂場遊びをする年齢でもあつませんし。私はブランコの方が好きです。

ブランコをかなりの高さまで漕いで高さと速さに要らぬ思考が頭を過ぎる。

「手を離せば、家族は心配してくれるだろうか？」

父様に逢えるだろうか？

あるいは頭を強かに打てば自分は死に、本来の高町なのはが帰つてくるのでは？

そんな考えが浮かび上がる程、この時の私は随分と追い詰められていたのでしょうか。

もうビビちらかに一回転したうな角度までブランコは上がり下がりを繰り返している。

でもチキンハートの私にはそんな勇気もなく、結局はブランコから降りて、人の居なくなつた公園の滑り台の上で最近開いてないスケッチブックを広げました。

中には様々な魔装機や魔装機神のラフ画や設定。魔装機神のプラナやエーテルに関する私なりの考察などなど。

いつか役に経つのはと書いていたスケッチブック。それをパラパラと捲り、とあるページでそれは止まる。

そこには私が理想とする魔法少女の姿。

杖を片手に脅威と苦難に立ち向かう不屈の心を持った少女、高町なのはのスケッチ。

無印の9歳、ロミックの15歳、st'sの18歳、さらには23歳と25歳。

私の覚えていた限りの高町なのはが描かれていた。

私の、決して届かない目標にして理想の高町なのは。

高町なのはが一番星ならば、私は肉眼では見えないちっぽけな星でしかないのだろう。

私には愛も力もない。

リリカルマジカルでもとらいあんぐるハートでもない、『理』を真似ている私のような存在は所詮

暗がりゆく空を見上げれば、そこには輝く星光。一番星。

視界が歪む。

目に力を込めても歪みは強くなつていいく。

「こんなこと程度でないではいられないところに、高町なのはが涙を流すのは誰かの為なのに

ポタポタと、スケッチブックに雫が落ちる。流れ出した涙は堤防を決壊させ、鉄砲水となり吹き出す。

「…わ、たし…は、なぜ、たか…ま、ち…なの、は、二…」

辛い。悲しい。怖い。寂しい。

色々な感情がぐちゃぐちゃになつて吹き出す。もつせき止めは出来なかつた。

「だ、れか、たすけ…て…」

2年間。たつたそれだけでも心を病むには十分過ぎた。とくに自分が高町なのはとして産まれたから余計に。

高町なのはの幸せを奪つてしまつた。

高町なのはの居場所を奪つてしまつた。

高町なのはの存在を奪つてしまつた。

いづれは戦いに身を置かねばならない運命。

普通の凡人には過酷過ぎる運命だった。

特に高町なのはが歩むだろう16年を大まかに知るだけに余計。

『Please do not cry. (泣かないで下さご)』

「…う…ぐす…えう?」

ふと耳に聞こえた電子音調の英語。

「…だ、だれ、です、か…」

『Please do not cry. I will also become sad if you are crying. (泣かないで下さい。貴女が泣いていると、私も悲しくなります)』

顔を上げても、誰も、どこにも、なにも居ない。

「そ、ら…みみ?」

『It is not a mishearing. I am in a you side perfectly. (空耳ではあ

りませんよ。私は貴女の傍に、ちやんと置ます(すまします)』

「わた、し、の…そば?」

『Yes. Therefore, please do not cry. My meister who loves (はい。だから泣かないで下さい。愛するマイ・マイスター)』

また、涙が溢れてきた。

でもそれは……

『Meister? Did it carry out if you please? In something, I am impoliteness by no means. (マイスター? どうかしましたか? まさか私が何か失礼を)』

「いい、え……いいえ、違います」

嬉しかったんだ。

独りぼっちだと思い込んでた自分に、傍に居てくれた存在が居るのを。

「あなた……なのですね?」

スケッチブックに語りかける。

それは奇跡か、あるいは高町なのはである自分が書いた物だからなのか

『 Yes . That ' s right . My meister (はい。その通りです。私のマイスター) 』

スケッチブックから聞こえる電子音は、とても温かに包んでくれるような声だった。

誰も居ない。私達しか居ない公園で、私は声も抑えずに、泣き散らした。

最初で最後にするから、今は自分の為に泣き、そして産まれてくれたことに感謝を込めて、泣いた。

そしてまた1ヶ月。腕に包帯を巻いて申し訳なさそうな顔をする父様に、私は素直に「お帰りなさい」と言って抱きついた。

少し苦悶の声が聞こえましたが無視です。3ヶ月も心配をかけた罰なのですから。

第一話 タイムリミッタード、あと（前書き）

連投です。

第1話 タイムリミジトまで、あと

side・高町なのは

あの日の出逢いから3年が経ち、私は私立聖祥大附属小学校3年生として過ごしています。

あの日以来、私と共ににある自称アリスは、簡単に言えば、私の著書した魔導書で、私の使い魔のよつた存在であるらしいのです。

まだシステム的に未完成のアリスは、その活動には私からの魔力供給を受けて活動しているそうです。

夜天の書よろしく自立飛行とかも出来ませんが、私はアリスのお陰で大分救われました。

父様は、あの一件以来、長期間、家から居なくなることもなくなりました。あつてもちゃんと、2日3日で帰つてきます。

未だに何をどうしてあんな怪我をしていたのかはわかりませんが、3ヶ月という期間を考えれば、幾つかの予想を推論出来ますが、所詮推論。気にしないことにしました。

そして私は私立聖祥大附属小学校に入学を果たし、初めての友人を得ました。

「あ、おはようなのは」

「おはよーひーじゃんー！」

バスに乗り込むと、その初めての友人であるすずかとアリサが手招きしてゐるに気付き隣りに座りました。

「おはよーひーじゃんーです。すずか、アリサ」

「前から毎々思つてゐるナビ、なーんか固こわよね、あんたは

ヒ、アリサが口をとがらせる。

「やっぱ言われましても、これが私ですから。今更変えようもありません」

中身が一応大人であるからにして、高町なのはのうに子どもを私に出来るわけもなく、少々演じてこよみうな部分も無きにしも非ずですが、これが『私』なのです。

いつも通りに登校し、いつも通りに授業を受け、いつも通りの昼を迎える。

今日もそつなると想つていました。ですが

昼休み、学校の屋上。

いつもなら楽しいはずの昼食。ですが今日は色を失い、いつもとはまったく異なる昼食です。

昼食前の4時間の授業は将来の夢について

とりづら、来てしまったのです。運命のタイムコリットが

今日は4月22日。もし劇場版「コリット」の日に4月26日が運命の日であるなら、あと4日。不吉過ぎるにも程があります。

「で、なのはちゃんは？」

と、すすかに尋ねられました。恐るべく将来の夢についてでしょ。

「…私ですか？」

頷く2人に、びつやけ心せきけ出したこと堵しつつ、考
えてみます。

「翠屋を継ぐのもいいですが

私はバックからA4サイズのスケッチブックを取り出す。

「イラストレーターやアニメーターというのも、道筋のひとつかも
しませんね」

叶わない夢 なのかも、知れませんが。

「なるほど、あんた絵、得意だもんね」

「なのはちゃんならきっと凄い有名になれるよー。」

「ありがとうございます。すずか」

スケッチブックに何が書かれているのか若干知っている2人は納得してくれたようです。

放課後。2人は塾の為、校門でお別れです。

私は塾に行くよりもゲームとか新しい設定を考えたりする時間が欲しかった上、今のところ全筆記テストオール100点を独走中の為、塾には通っていません。

帰り際、人気の少ない方に歩いていったら、海岸線まで来てしました。

人の気配がなくなつた途端、進級してから良く起るようになった発作に胸が苦しくなる。

「へつ、せつ、つづ、せつ」

服を握り締め、苦しみを耐える。

タイムコマットを迎えるフレッシュヤーによる発作。

戦つゝの恐怖が、私の心を蝕んでいた。

『Meister』
マイスター

「アリ、ス……」

スケッチブックを胸の中に抱き締める。

私の本当の意味での味方は、彼女だけしか居ない。

アリスは私が記述した物すべてを覚えている。言わば辞書・ライブ
ラリー。

だから端々にも、これから起ること、私の正体も知っている。

高町なのはでなく、『私』自身の唯一の味方。愛おしい、私のファ
ミコア・もつひとつわたし。

「ア、アリス……わたし……」

Please cry and breathe out now.
It muffles, although it is awkward.
word. (今は泣いて、吐き出して下せ。拙いですが、消音をしておきます)』

私には勿体無さ過ぎるファミリア。

この子のお陰で、私は泣く事が出来る。私はやつぱり弱い、ちつぽけな星でしか
否、スペースデブリの星屑でしかない。

「セイ」セイ「セイ」

『Could it settle down? Meister (落ち着けましたか? マイスター)』

「……はい。一応は……」

涙を袖で拭い。幾分か楽になれた心持ちで、私は帰路に着きました。

ですが、この苦しみでさえ、まだ序の口でもない程軽い物だと、この時の私は知る由もありませんでした。

第1話 タイムリミッシャーまで、あと（後書き）

「」のなのはは見た目も性格も喋り方がマテ子の星光ことセイことシユテルですが、ヲタク成分と大人頭脳の為、思考がかなりまわりまぐり超賢く見えますが、一般凡人だった故に、かなり臆病で精神的強さに、本家なのはとは銀河中心核とミトコンドリア並みの差があります。

side · 高町なのは

「 … はあつ … … はあつ … … はあつ … … はあつ … … 」

今日は人生最悪の日だと言えます。

4月26日。

ヒットヒーローの日がやってきました。

少年が怪異と戦つ夢も見ました。

十中八九、あれがコード・ジュエルシードの暴走体。

夢だというのに言い知れぬ迫力と命のやり取りに、私は夜中に目を覚まし、それ以後寝れずにして翌朝を迎えるました。

その所為か、頭は痛い。胃はキリキリする。時々眩暈もある。

正直、コンティショニングは最悪と言つても過言ではありません。

「大丈夫? なのはちゃん」

「…ええ、軽い寝不足ですので、心配なく

「また夜中までゲームでもしてたんでしょう？あんた普段生真面目なの『やうこつ』ことだけは不良よねえ～」

「ゲームとアニメは私の生き甲斐ですか？…」

以前素で夜更かしし、今に似た状況が何回があるので、すずかとアリサには怪しまれずに済んではいますが、アリサの胸に抱かれるフュレット、その首にある赤い宝石を、私は直視出来ません。

その後、フュレットことコーノを病院に預け、すずかとアリサは塾へ、私は古本屋で新しいラノベと漫画を数冊買い、また何時もの海岸線に居ました。

「今夜……なのですね…」

『マイスター
Meister』

「…大丈夫ですよ、アリス。私には…『私』には貴女も居るのですから…」

そり、高町なのははユーノとレイジングハートが味方であった。

でも私にはそこにアリスという存在が、私の味方が居る。

それだけで心強い。それだけで、今まで心が折れずにいられたのだから

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

夜。

すずかやアリサと、ユーノの引き取り先について相談していたところ、とうとうやつて来てしまった。

『誰か……』

『マイスター
Meister』

「ええ、わかっています」

スケッチブックをキュッと抱き締め、アリスから勇気を貰う。

カバンにスケッチブックを入れ、気配を殺し、外に出て、自転車で病院へ。

自転車であるからでしょうか、私が病院に着いた時丁度、フェレットことユーノが窓から飛び出す瞬間でした。

私はペダルを踏み込み、口ゲットスタート。運動が出来ない私は

が、自転車の扱いとスピードにはちょっとした自信があります。

窓から飛び出したコーンを横からかっさらいながら一目散にに走り抜けます。後ろから破碎音が聞こえましたが、無視です無視。

「あ、あなた、は……」

「喋らない方が身の為ですよ。舌を噛みます」

私は自転車のギアと脚のギアを上げ、住宅地をひたすら突っ切る。

戦うにしき何をするにしき、この辺りでは被害が大きくなる。

「つー後ろー！」

「くつー！」

自転車を横に倒し、片足を地面に着いてのドリフトをしながら十字路を強引に曲がり、目指すは人気が少ない海岸線。

「…はつ…はつ…はつ…はつ…」

後ろから狙われる恐怖とプレッシャー。

狩られる側の恐怖。

そしてジュエルシーードの暴走体ならば非殺傷設定なんて甘っちゃう機能なんて搭載していないでしょ。

正に命のやり取りに、私の恐怖のボルテージは何時の間にかMAXをオーバーブレイク。

勝手に溢れる涙を零しながらやつとの思いで海岸線へ到着。

浜に通じる階段をそのまま自転車」と飛び降りるものの、着地の瞬間砂にタイヤを取られ、派手にズッコケてしまう。下が砂で助かりましたね。

「ケホッ！ケホッ！」、「まで、くれば…」

力ク力クと震える脚を叱咤しながら立ち上がる。

「あ、あの、大丈夫ですか？」

「ええ、あなたこそ、平氣でしたか？」

「は、はい。僕の方は、大丈夫です」

とりあえずは、第一関門の戦闘フィールドの移動は成功ですね。

住宅地でドンパチやるよつかは周りを気にしなくて済みますし、視界も開けています。

「なにが起きてるのかよくわかりませんが、私はどうすればいいんでしようか？」

「えっと、あの、それは……」

口のむかの口一ノ。

言ひながら早くした方がよろしいですよ。

「 もへ、追いついてきましたか……」

空を見れば、夜空に小さく蠢く影。遠田ですが気持ち悪い不定形生物ですね。

「つ、『めんなさい！でも今の僕には貴女にしか頼れる人が居ないんです』

本当なら管理局に任せていっても良いはずの事を、発掘者だからと先行調査な来る程の責任感。

好感は持てますが、もう少しちゃんとした準備とつものをして来

た方が良いと思つ私は悪くないはずです。

「これを 手に取つて下さい」

ユーノが口でくわえる赤い宝石。

レイジングハート

レイジングハートを見た瞬間。心臓が震え、胸が苦しくなつた。

今更、もう、後戻りは出来ない。

私は高町なのは

魔法少女として戦う宿命の星の下に産まれた存在なのだから……。

レイジングハートを受け取る。

煌めく宝石は、星光は今、私の手に渡つた。

私は紡ぐ。

其れは聖約

其れは誓願

其れは不屈の力を手にする為の聖句

「我、使命を受けし者成り 」

宝石が光りを放ち、私の足下に幾何学の円形魔法陣 ミッドチル
ダ式魔法陣を展開する。その色は闇を照らす桜色。

「契約のもと、その力を解き放て 」

宝石と呼応する胸の鼓動。躍動するのは、現実では手に入る事は無い。御伽噺の中だから許される超常のチカラ。

「風は空に 星は天に そして不屈の心はこの胸に 」この手に魔導
を レイジングハート、セットアップ!」

『Stand by Ready . Setup .

桜色の光りが天に解き放たれ、光柱を作り出す。

『Welcome . New User . (はじめまして、新たな
使用者さん) 』

「初めまして、私は高町なのはと申します」

『I am the Raging Heart. I need your help well henceforth.（私はレイジングハート。以後よろしくお願ひします）』

「ええ、こちらこそ。それで、私は何をすれば良いでしょうか？」

『Your magical novel qualifies you to use me. May I select the optimum configuration for the Barrier Jacket and the Device?（あなたに魔法素質を確認しました。デバイス・防護服ともに、最適な形状を自動選択しますが、よろしいですか？）』

「デバイスはお任せます。服については私のイメージをトレースして構成して下さい」

『It understood. An image, track e start.（了解しました。イメージ、トレース開始）』

光りが強くなり、文字の書かれた光りの帯が私を包む。

『Stand by Ready.』

宝石だったレイジングハートにパーティが合体し、魔法の杖となる。

それを左手で掴むと、服が光りとなつて弾ける。

『Barrier Jacket setup.』

上半身が黒いインナーに包み込まれる。

下半身には黒いハーフズボンが形成される。

インナーの上に白地に黒の縁取りのコルセットと金色の胸甲が形成され、胸甲の上部には赤い宝石を付けた金色のパーツが付き、そのパーツを羽のように左右に広げる。

白地に青い縁取りのオーバーコートジャケットが形成され、袖口には青い腕甲が形成され、上下に別れていたパーツをボルトで固定される。そして両肩にも青いショルダーアーマーが形成される。

下半身はズボンの上に黒いベルトが通され、前開きの白いアウトライダートが形成される。

金色の脛当が形成され、圧底の黒いブーツが形成される。

レイジングハートをバトンのように頭上で振り回し、利き手の左手に保持し、振り下ろす。

光りの柱が消え、地上に降り立つ。

『How much do you know about magic? (魔法についての知識は?)』

「無きに等しきと思つて下さい。ですが説明を受けている暇もない
よつです」

暴走体が浜辺に降り立つ。

いきなり襲つて来ないのは、先ほど私のセットアップした光りの所
為でしょうか？

「レイジングハート、私に今出来ること、使える魔法をステータス
形式で表示してください。それと、敵の判る範囲でのデータも下さ
い。出来ますか？」

『Comprehension・Various status
is displayed.（了解。各種ステータスを表示しま
す）』

空中に投影される複数のモーター。

敵はジュエルシードの暴走体。魔力ランク推定AA。

高町なのは、つまり私。

魔力ランクA 空戦適性C 陸戦適性D+ 総合ランク推定C+

使用可能魔法
シユートバレット

ディバインシューター

パイロシューター

クロスファイアシュート

チーンバインド

ディバインバスター（2発限定。3発目は不発の可能性大）
プロテクション

ほとほと自分の才能無しには涙すら流れず、渴いた笑いも出ません
よ。A-sで高町なのはがAAAランク。この歴然の差はなんなん
ですか！？

……ですが、チーンバインドとクロスクロスファイアシュートが
使えるのは重畳ですね。この時期の高町なのはに出来ない戦法も取
れますし。それに私にはアリスも居てくれる。私は退くわけにもい
きません。

しかしパイロシューターとなれば、私に魔力変換資質があるのでし
ょうか？

なのにプラスチックファイヤーが無いのは単に私の実力不足なのでし
うか？

考えていても仕方がありませんね。

『Gaaaaa!』

「くつ」

雄叫びを上げる暴走体。

レイジングハートを構えて相対する。

私の魔導が、どこまで通用するかはわかりませんが

『Gaaaaa---!』

『Hostile object approach! (敵性体接近!)』

飛びかかってくる暴走体を見据える。

「この戦は、負けられないのです！私が、高町なのはであることを証明する為に！この戦、この戦だけはっ！！」

守りたいもの、ありますか？

第2話 星の光の生誕 - Birth of a stellar ligant

今の主人公なのはは、実力的にはstars開始時のフォワード陣よりも弱い実力でリミット付きのなのはに挑むような感じで暴走体と戦うような物だと、頭の片隅に置いておいてくださいな。

英語があつて いるかどうかは激しく微妙なのであまり気にしないでください。

第3話 更なる絶望。しかし星光の輝きは力強く（前書き）

レイハさんは劇場版モデルです。

なのはのバリアジャケットは、簡単に言えば上半身は劇場版に両肩にショルダーアーマーを追加。下半身がst'sのアウトスカートというイメージで充分かと

第3話 更なる絶望。しかし星光の輝きは力強く

s.i.d.e.・高町なのは

『Gaaaaaa!..』

「ぐつー..」

飛び込んでくる暴走体を数回のバックステップで回避する。

砂地に脚を取られますが、間一髪で避けられました。

粉塵が舞う地点から田を離さないよう努めながら、距離を開けます。

転びそうになりながらも、躊躇そうになつても、気合いで脚を動かします。

大体10m離れた所で脚を止め、レイジングハートを暴走体に構える。

『Gaaaaaa!..』

暴走体が触手を伸ばして襲つてくる。その数は4本!..

「デイベインショーター！」

『Devine shooter』

今形成出来たシユーターは3発。

それを放ち、3本の触手を弾く。

『Protection』

「くつー！」

残った一本はバリアで受ける。

ピキピキピキ

受け止めたバリアが不吉な音を立ててひび割れ始める。

「つ、やはり私では 」

『Front cautions!（前方注意！）』

「なつー！？」

レイジングハートの警告。暴走体が触手を押し当てながら私に突っ込んで来たのだ。

『Gaaaaaa-----!』

ぶつかりあうバリアと暴走体。だが亀裂の入っていたバリアは易々と砕け散り、暴走体の体当たりは私に直撃する。

「がふつ！！」

吹っ飛ばされた私は、防波堤にめり込む形で激突した。

「がつ、あ、ぐつ、……」、この、使徒のように器用な

劇場版破のように、触手を突きながら体当たりなんて攻撃をして來た暴走体に毒づく。あれで目からビームなんて出した日には私は死んでいたでしょう。

『Is it safe? (『無事ですか?』)』

「な、なんとか……」

めり込む身体を動かして抜き出る。

「くつ、がはつ！」

込み上げる吐き氣を無視して、レイジングハートを構える。

しかし暴走体は襲つては来ない。

襲つてこないのならば好都合！

「レイジングハート、ディバインバスターを撃ちます」

『All right. Devine Buster, standard by. Mode change. Cannon Mode.』

レイジングハートがその形を変える。白いバレルが追加され、トリガーコニットが展開される。

トリガーに指を掛け、カノンモードの砲口を暴走体に向ける。

『Shoot in Buster Mode. (『直射砲』形態で発射します)』

砲口にミッヂ式魔法陣が展開され、身体の奥底から湧き上がる力を腕を通して、すべてレイジングハートに！

『 Immediate fire when target is locked . (ロックオンの瞬間にトリガーを) 』

網膜に投影されているのか、眼に見える景色がロックオンディスプレイに変わる。

「つ、ディバインバスター！ シュートッ！ ！」

脚に力を込め、トリガーを引く。

腹に響く重低音をあげて、桜色の砲撃は暴走体へと一直線に向かう。

この時私は勝利を確信しました。

高町なのはの代名詞、ディバインバスターに撃ち碎けぬものはない
と。

ですがそれを放つたのが私だった。そして暴走体が私の恐怖を糧に
でもしたのでしょうか。

ディバインバスターが直撃する瞬間、暴走体と眼が合い、そしてそ
の赤い眼は厭たらしく歪めたのです。

直撃し、粉塵を巻き起こすデイバインバスター。

敵性体エネルギー 反応増大！』
Front watch! Hostile object energy reaction increase! (前方警戒！)

レイジングハートの警告と同時に粉塵が吹き飛び、目の前が真っ白に染まる。

Protection

展開したバリアー」と吹き飛ばされ、再び防波堤にめり込む。

瞬間、バリアが弾け、大爆発を起こした。

「うつ、ああ、ああつ

閃光が晴れ、震える眼差しで見つめる先。

ジユエルシーードの暴走体は、不定形な形を捨て、確かに実体物として存在していた。

髪の毛のようになびく触手。

仮面の様な顔。

白いヒトのカラダ。

その胸に輝くジユエルシーード。

その全体像は力を司る、最強の拒絶タイプの神の使い。

第14使徒、ゼルエル。その劇場版『破』の第10の使徒の姿に相違なかつた。

「は、ははは、はハはハはハハハ」

めり込んだ防波堤から抜け出すこともせず、私は笑うしかなかつた。

世界は……神は、そうまでして、私のことがそんなにも嫌いなのですか？

私という異物を、排除したいのですか？

暴走体が触手の一対を円柱状に束ねた。

詰みですね。

心が折れた私には、もはや抗う意志すら湧いてきません。所詮私は
高町なのはには成りえない

シユキンっと、空を裂くよつた音が聞こえた。

触手が射出された音。

これで、終わりですね

『 Protection 』

無駄ですよ、レイジングハート。

アレには私程度のバリアでは紙に等しいのですから。

バリアの弾ける音、防波堤のコンクリートが碎ける音、そして全身
を襲う衝撃。

でも、痛みはありません。ハズれたのですか？

『 Please do not give up. (諦めないでく
ださい) 』

無理ですよ。私には……。

『I do not want to give up.（私は、諦めたくはありません）』

.....。

『I was able to meet the person using meat last.（私はやつと、私を使ってくれる人に出逢えました）』

レイジングハート.....。

『Let's offer all of me to you. I would like to become your power.（私のすべてを貴女に捧げましょ。私は、貴女の力になりたい）』

レイジングハート.....。

『It must not be discouraged. A meister and you are not one person.（挫けてはなりません。マイスター、貴女は独りではありませんよ）』

背中のカバンから聞こえるレイジングハートとは別の電子音。

それはずっと私の味方で居てくれる、私のファミリア・もうひとりのわたし -

アリス……。

『being in a you side and keeping the heart, although I can do nothing - - if - - it can do. (私は何も出来ませんが、貴女の傍に居て、その心を守ることぐらいなら出来ます)』

アリス

『Therefore, the Raging Heart. Please become the power which cuts a meister's way. (だからレイジングハート。あなたはマイスターの道を切り開く力になつてあげてください)』

『I understand. I mean to from the first. Are reliable. (わかりました。もとよりそのつもりです。ご心配なく)』

レイジングハート

レイジングハートの石突を地面に着き、笑う膝で立ち上がる。

「レイジングハート、私に勇気を、恐怖を打ち碎く勇気を私に！」

『All right, My Master』

自分の脚で地に立ち、レイジングハートを左手に構える。

『Hover Feather』

後ろ腰辺りに桜色の一対の羽が生え、踝辺りにも小さな羽が生える。

これはいったい？

『The magic for empty games was arranged in land battles. Movement on land becomes smooth now.（空戦用の魔法を陸戦用にアレンジしました。これで陸上で移動がスムーズになります）』

「ありがとうございます。レイジングハート」

ふわりと、少しだけ腰辺りに浮力を感じます。

踵も少し浮かんでいます。

Hover Feather

つまりホバー走法を可能とする魔法ですか。

改めてステータス画面を確認します。

ジユエルシード暴走体 推定ランクAA+

物理質量攻撃 触手（円柱）威力AA 射程推定A+ 発動速度推定B+

砲撃 威力AAA- 射程推定B/A A 発動速度A

高町なのは

魔力ランクA 空戦適性C 陸戦適性D+（ホバーフェザー発動中はA+） 総合ランク推定C+（ホバーフェザー発動中はB）

使用可能魔法

シユートバレット

ディバインシユーター

パイロシユーター

クロスマファイアシユート

チエーンバインド

ディバインバスター（2発限定。3発目は不発の可能性大）

プロテクション

ホバーフェザー

「さあ、2人とも、反撃の時間ですよ」

『Comprehension.

Please leave support.（了解。サポートはお任せください）』

『About the fortune of war, it

第3話 更なる絶望。しかし星光の輝きは力強く（後書き）

ジュエルシードの暴走体が思念体であるからこいつしてみました。

デバイスの会話が難しい上に面倒で、さらに確実性なしと散々ですが、レイハちゃんとアリスはなのはの嫁なので頑張ります。

第4話 星光よ、使徒を撃て！

side・高町なのは

対峙する私とジュエルシードの暴走体。

戦闘力は別として、戦闘能力的にはATフィールドを張らないゼルエルそのままのようです。

捕食やATフィールドはイメージしていなかつた為、余計なことを考えるのはもう止めにして、今は目の前のことだけを考えます。

戦力的には圧倒的に不利。

それでも『理性』と『作戦』ならば、高町なのはより私の方が上であるのは確かでしょう。

戦力不足でも、作戦次第ではそれを覆せる。

ティアナだつてやつてみせたんです。

10年後、出逢うかもしれない1人のガンナー。

彼女の気持ちが、今なら私にはわかる。

彼女は周りが、私は高町なのはが、優秀過ぎて負い目を感じるその気持ち。

そんな彼女でも、立派に、1人で飛び立つ事が出来た。

なら、私にも同じよることはいかずとも

『GUOOOOOO—!!』

「目の前の敵ぐらいならば、撃ち抜いてみせます！」

『Enemy, energy reaction increase! Coming urgent evasion!（敵、エネルギー反応増大！来ます、緊急回避！）』

「くつ」

身体が横に吹っ飛ぶ。

アウトスカートを掠め、暴走体の砲撃。

さすが空戦用の機動魔法。陸戦用にアレンジしたとは言つても、機動力はそれ程変わらないのでしょうか。横Gがハンパないです。ですがこの機動力で掻き回せば！

『Warning! It continues the 3rd wave the 2nd wave!（警告！第2波、第3波、続けて来ます！）』

「全力回避！機動マニユーバーは任せます！クロスファイア展開！」

『Comprehension・Best evasion, Cross Fire deployment!（了解。全力回避、クロスファイア展開！）』

「くうつっ！！」

右から左に後ろに、景色が速流れ、視界の隅に黒い細い影。

視界がディスプレイに変わり、正しく周囲が見えるようになる。

自身の触手を次々に差し向ける暴走体。その数は30本。

レイジングハートとホバーフェザーによる高機動マニューバーにとって、バリアジャケットに掠めながらも、直撃は0。

優秀ですね、レイジングハート。私には勿体無いデバイスです。

周囲に浮かぶスフィアは6つ。

「クロスファイア！シユートッ！！」

6発の魔力弾が暴走体に向けて放たれる。
4発は迎撃され、残り2発はあらうとか、暴走体が展開したバリアに弾かれる。

「バリアまで！？」

『 Barrier generation of presume
d A + is checked . (推定 A + のバリア発生を確認
(認))』

「ならばバリア」と撃ち抜くまで…シユートツ…』

6つのスフィアが一つとなり、砲撃を放つ。

ディバインバスターは残り1発。

それ以外で威力を持つ攻撃は、クロスファイアショートの砲撃バージョンしか思いつきません。

「レイジングハート！カノンモード！」

『 mode change . canon mode . 』

カノンモードのレイジングハートの柄を脇の下に通し、手はライフルを支えるように添え、トリガーコニットを握る。

ディバインバスターの衝撃を子どもの私が抑えるのには、やはりライフル銃を保持するようにした方が効率が良いでしょう。それに高町なのはの握り方は、実際にやるとレイジングハートが反動で吹き

飛びそうで怖いんですよ。個人的に。

「ディバインバスター！ シュートッ！！」

クロスファイアショートに続くようディバインバスターを追撃に撃つ。

1発でダメならば2発一度に叩き込めば！

暴走体はクロスファイアショートをバリアで防御。その後を襲つたディバインバスターが、バリアを貫くのを、私は確かに目にしました。

バリアを破り、暴走体に直撃する桜色の閃光。

爆発が起き、粉塵が視界を隠す。

「はあ……はあ……はあ……はあ……はあ……」

荒んだ呼吸を整える。

ディバインバスターの直撃。これで片をつけられなければ、私の勝ち目は

『It is an energy reaction to the center of an explosion! (爆心地

にエネルギー反応！』

「何ですかーーー？」

粉塵が晴れ、そこには表層を焼きながら、太い一対の触手をジュエルシードを守るようにクロスさせた暴走体の姿。

「や、そん……な……」

今まで落とせなかつた……。

もは、ディバインバスターは撃てないところに……。

「ツーーーつおおおおおーーーツーーー！」

地を蹴り、私は一直線に暴走体へ跳ぶ。

「パイロシユーターッーーークロスファイアシユートッーーー！」

『Pyro shooter and Cross Fire Shoot』

クロスファイアシユート6発とパイロシユーター4発の計10発を

至近距離で撃つ。

ジユエルシードには、まだ届かない！

「いい加減に 墜ちなさい！！」

カノンモードの砲口を触手に押し当てる

「ショートバレット連射！」

『Shot Barrett automatic fire!』

カノンモードの先端から連射されるショートバレット。しかし零距離射撃にも関わらず、触手は焼かれるだけでびくともしない。

「ああああああ――――――――！」

込めるだけの魔力を込め続け、攻撃の手を緩めず撃ち続けました。しかし

「プシュン！」

「レイジングハート！？」

撃ちすぎた！？

廃熱の為に攻撃を中断せざる得ないレイジングハート。

その時、視界の片隅で動いた黒い影。

「がつ！！」

気づけば私は上空に打ち上げられていました。

空中では私は身動きも取れない。

真っ逆様に墜ちた私の『』と暴走体の『』が交差する。その身体には束ねて円柱になつた触手

空中コンボ

Protection

「ハ、それが何を意味するか――――――。」

またバリアー」と吹っ飛ばされ、砂浜につつ伏せになる私。

『Is it safe? Master (「無事ですか? マスター
ー」)』

どうある...どうある高町なのは!?

ディバインバスターは撃ち尽くし、次点高威力のクロスファイアシ
ュートの砲撃バージョンではバリアを破るには至れない!

他に私が出来ることは!?

逃げる?

そんなの論外です! 私は高町なのはとなるためにも、こんな所で退
くわけにはいかないのです!

誰かに援軍を?

ユーノは戦えないでしょう。

それにつも長時間派手に戦い続けているのに人が来ないのは、ユ
ーノが結界を張っているからでしょう。

姿は見えませんが、ユーノがやられてしまつ=ジ・ハンド。

バインドで拘束して集中砲火?

無駄でしょう。ショートバレットとはいえ零距離連續射撃に耐え抜いた体組織やクロスファイアショートヒーディバインバスターでやつと破れるバリアの前では。

もっと、私に攻撃力のある魔法が使えれば

『Hover Feather, Output fail! Please master and concentrate! (ホバー・フェザー、出力低下! マスター、集中してください!)』

「レイジングハート……」

詰み状態で諦めかけていた私。

そんな私とは反対に諦めずに戦い続けるレイジングハート。

その名の如く、不屈の心を宿すデバイス。

私のような者には分不相応な子。

十全にその性能を引き出してあげられない私をマスターと呼んでくれた子。

私には、レイジングハート、あなたの力を出し切れ

「……レイジングハート」

『What is it? Master(何でしょうか?マスター)
-』

「フルドライブを使います。もつそれしか手立てはありません」

『It is it why? (な、何故それを?)』

やはり、あなたは私には勿体無いデバイスです。

初対面の私を気遣う優しい心も持つてているのですから。

フルドライブ

インテリジェントデバイスの最大出力モード。

しかし、リンカー・コアが本格的に覚醒したばかりの私では負担も大きいのでしよう。伏せていたか或いは使えないのか、レイジングハートの様子から見ればおそらくは前者なのでしょう。

ですがこの暴走体は、手加減して勝てる相手でもないのは本モデルの時点、そして暴走体の耐久性から一目瞭然です。

「生きるか死ぬかの瀬戸際に、躊躇いや出し惜しみは不要です! ですから、レイジングハート!」

『I understand. Surely prepared

ness of the master was receive
d. (わかりました。マスターの覚悟は確かに受け取りました)『

「ありがとうございます。レイジングハート』

私はレイジングハートへの感謝の意を噛み締め、身体を立ち上がら
せる。

「レイジングハート！その名の如く、不屈の力を私に！」

『All right limit release. Full
Drive』

カノンモードのレイジングハートの砲身フレームから一対の桜色の
翼が生える。

フルドライブと同時に身体を襲つ倦怠感。ですが、それを上回る力
の鼓動も確かに感じます。

「チーンバインド！」

『Chain Bind』

突き出した右手の先に展開される//ジド式魔法陣。

そこから飛び出す6本の桜色の鎖は一直線に暴走体へ。

バリアを展開されましたが、そのバリア」と雁字搦めにしてしまいます。

『Hover Feather, output full open!』

「やあああああああ――――――！」

地を蹴り、ホバーフェザーの推進力を得て、私は暴走体の懷へ突貫します。

「ディバインバスター！スタンバイ！」

『All right. Devine Buster, stand by. Charge start.』

カノンモードの砲口に環状線型魔法陣が展開。砲口の先に桜色の閃光が集まっていく。

「うぐっ！」

急に苦しくなる胸を右手で抑える。

『Master!（マスター！）』

「私に構わず続けなさい！」

『...Comprehension...（...了解）』

今さら覚悟していたことです。

今は身体よりもアレを撃ち抜く力を

『It is 5 more seconds till the completion of charge!（チャージ完了まで後5秒！）』

「ホバーフェザーへの魔力供給を80%カット！少しでも良い、チャージにまわして下さい！」

『All right. 80% of magical supply cut. Count 4（オーライ。魔力供給80%カット。カウント4）』

速度がガクリと落ちましたが、今は速さよりも攻撃力を少しでも上げなければならない時。機動力の低下は何とかすれば良いだけです！

『An enemy part, bind breaker! A counterattack comes! Numbers are 3 and evasion! (敵一部、バインド・ブレイク! 反撃が来ます! 数は3、回避を...)』

「構いません!そのまま直進、最小半径で回避!」

襲い来る3本の触手を、東方弾幕よろしくグレイズで回避!

ジャケットとスカートが裂かれ、右腕を掠めましたが

被弾0。

「周囲に散る残留魔力もチャージにまわして下さい!」

『All right. Count 2 (オーライ。カウント2)』

『

強固なバリアと体組織を撃ち抜くには、高町なのはの最強魔法でなければならぬでしょ。

ディバインバスターすら2回しか撃てない私には、これを御せるかはわかりません。一か八かのただの博打ですが

『An enemy and bombardment come

! (敵、砲撃が来ます!)』

「空へ！」

地を蹴り、空へ跳ぶ。

ホバーフェザーに滞空能力があるかはわかりませんが、空へ跳躍した私達の足下を閃光が通り過ぎます。

『Completion of magical charge!（魔力チャージ完了!）』

「レイジングハート！私を敵の眼前へ！」

『All right. My master!（オーライ。マイマスター！）』

再び襲い来る砲撃を、一瞬だけ解放された推力を得、夜空に輝く星光を背に宙返り、砲撃を回避。

砲撃の熱が直ぐ傍を通りのを感じつつ、再び推力を解放。

また新たにバインドを破壊した触手が反撃に放たれる。

バリアジャケットが裂かれ、左のショルダーアーマーが砕け、左頬を触手が掠め血が流れる。僅かに体勢を崩すも、その瞳に宿る闘志は決して砕けてはいない。

「レイジングハート……私を」

こんな私の為にその力を示してくれるレイジングハート。私の意思に応えてくれると信じている。

暴走体は目の前！

レイジングハートの砲口に展開する環状線型魔法陣が、トリガーコニットと柄にも展開される。

脅威を目前にして、出力が上がるのを魔法陣を通して感じました。

そうです、レイジングハート。だから私を

「私を、勝たせて下さいっ……」

暴走体の頭上から一気に地面に降り立ち、衝撃の緩和も忘れ、両腕で構えたレイジングハートを暴走体の、体組織、ジュエルシードを大事に守る触手に突き刺すように押し付ける！

『Starlight Breaker・Stand by Ready.』

「これが私の全力全壊！！」

暴走体を縛るチェーンバインドが弾け、その仮面に光りが灯る。

ですが、私達の方が 速い！

「スター・ライト・ブレイカー……『テッド・エンド・ショートオオオオオツ！……』」

トリガーを引く。

集めたすべての魔力が一点に集中し、巨大な星光となつて解き放たれた。

「…私の 私達の、勝ちです」

トリガーを引く指を離し、そしてもう一度トリガーを引く。

「ブレイクッ、ショ――――トツ――――！」

ダメ押しの最後の一撃。

長い長い、されども20分にも満たない最初のジュエルシードとの攻防は、巨大な爆音と付随する衝撃波、そして桜色の巨大な十字架を天に掲げ、終わりを告げた。

第4話 星光よ、使徒を撃て！（後書き）

色々影響受けまくりですが、こんな形で終えてみました。

初回戦闘でフルドライブにスタートライトブレイカー

本家ののはより無茶をしないとダメな我が家のは。あとが口々
い……

第5話 実際のリリカルマジカルは命を全賭けするものです。b よ高町なのは

s i d e …高町なのは

スターライトブレイカーの閃光が晴れると、宙に浮かぶジュエルシード。その数は一つではなく

「ふ、 2つ……？」

『 receipt number XX · XXX ·

2つのジュエルシードをレイジングハートに納めた所で一気に脱力、膝をついて四つん這いになってしまいました。

ふ、 2つなり、 あんなべらぼうに強かったわけが理解出来ました

「ひ、 くひ、 ひへひ、 がはひ」

息苦しさと胸の痛みに田を瞑つて耐えながら咳き込みます。

「ゲホッ、 ゲホッゲホッ」

□から流れ落ちる液体。

唾液ではありませんね。鉄の味がすることから、血でも吐いたので
しょ。う。

ある意味当然でしょう。

魔法初心者がいきなりの実戦でフルドライブで無理やりに魔力を底
上げし、3発目でデイバインバスターならぬスター・ライトブレイカ
ーまで使つてしまつたのですから、これぐらいで済んだのが御の字
でしょう。

四つん這いから胡座に変え、レイジングハートを抱えて身体を預け
る。

しばらくは動けそうにもありませんね。ひどく疲れました。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

side・ゴーノ・スクライア

な、なんて子なんだろ?……。

レイジングハートの形状から、あの女の子は砲撃型。

なのにあんなに接近して零距離で収束砲を直接撃ち込むなんて……。

魔力量自体は僕とそんなに変わらないのに、この管理外世界には魔法はないはずなのに、あんなに上手く戦えるなんて。

凄い、なんて言葉じゃ言い表せない。

でも

「あ、あの……怪我は」

「大丈夫です。痛みはありませんから」

そういう彼女だけれど、少なくない傷も負つてゐる。

それに

「私が、高町なのはであることを証明する為にー」

その時の彼女の悲痛な顔。

言葉の意味はわからないけれど、彼女があんなに必死に戦えたのは、その言葉になにか意味があるのかもしれない。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

s i d e …高町なのは

やつと呼吸が落ち着いたところで、レイジングハートを杖代わりに立ち上がろうとしますが、膝に殆ど力が入らずに、レイジングハートにもたれかかるように何とか立ち上がります。

興奮状態が落ち着いてきた所為か、頬や背中がヒリヒリしてきました。

腰の痛みなんて久し振りですから長らく忘れていましたが、懐かしさを感じて、私が今此処に確かに生きて存在しているのだと感じます。

「…さて、帰りましょうか」

『It is tired with labor . Meister . (お疲れ様です。マイスター)』

「死ぬかとも思いましたけどね…」

まさか生身で、偽物とはいえ使徒と戦うなんて。しかも力を司る最強の使徒。

外から撃つても仕方がないから零距離で撃ち込みましたが、良くこれだけの軽傷で済んだと、普通なら手足の2、3本失つてもおか

しない攻防でしたね。

今後を考えると、もつと作戦なり戦術なりを考えていかなければなりませんね。

あのジュエルシードの暴走体でランクAA+ランクAAAのフロイト・テスタロッサと戦うには、今の私では絶望的。

それを覆す戦術を考えていかなければ。

私が高町なのはを証明する為の戦いは、始まつたばかりなのですか
ら

=====

家に帰った私は、私専用の倉庫兼作業部屋で自転車の整備をしてからお風呂に入つて自室で眠りに着きました。

ユーノは今頃母様に揉みくちゃにされているでしょう。

ちなみに高町家には私の部屋の窓から直通の小さな小屋が有り、剥き出しの柱と木壁だけの1階部分は物置として使い。2階は私専用の書斎兼絵を描いたり、機械を弄る作業台のある部屋となっていました

す。置ききれない「アリモノ」の大半も向ひつです。

作業部屋に籠もると何時間か出て来ないのは当たり前の為、ユーノの事を訊かれた以外はなにもありませんでしたよ。

翌日。田を覚まして左の頬に触れる。

そこには絆創膏が貼つてあり、昨日の事が現実であることを実感させてくれます。

「あつ、いたたた」

ついでに腰の痛みや筋肉痛もプラスされます。

=====

「おはよつなのせーつて、ビーフしたのよー。そのせつべたー。」

バスに乗つたところアリサに声を掛けられました。すると心配そうに私の方に駆け寄つてきました。

「なんでもありますよ。昨日少し階段から脚を滑らせてしまって」

「ちょ、それなんともないなんて言わないわよ！病院行つた！？行ってないなら今すぐ行きましょ！…」

「アリサ、とりあえず落ち着いて下さい。階段とは言つても5段くらいからだったので、少し癌になりましたが概ね問題はありませんよ」

「あーーーんつもう…！だからなんであんたはそいやつて冷静に言うのよ！？痛いなら痛いって言いなさいよ！あんたケガしても、いつもいつもなんでもあつませんしか言わないのよ…」

心配してくれるのは有り難いのですが、一応大人である私には子どものする怪我の痛みはあまり痛くないのは事実なんですよ。

それに怪我という怪我は頬だけですから、心配も要りませんよ。

つと、言葉で言つても聞きそつこないだらうアリサの手を引いて、いつも後の後の席に座ります。

「ちよ、ちよっとなのは…」

「あなたは優しいですね、アリサ」

「あ、当たり前じゃない！な、なのはがケガしたら私だつて痛いん

だから……」

頬を赤くして目を潤す仕草は一種の破壊兵器ですね。良心が痛みます。

「おはようございます。すずか」

「お、おは、よう。なのは……ちゃん……」

私が挨拶をすると、すずかは顔を背けながらもチラチラと目を向けては背けをしながら返事を返してくれました。

確かすずかは吸血鬼一族の設定で、以前体育で顔面にボールの直撃を貰い、軽く鼻血を出した時もこんな反応でしたね。

一応頬と右腕は、暴走体の攻撃で出血していましたから、血の残り香に自分と戦っているのでしょうか。

こうこう時は触れぬが友の為ですね。

私は良い友人を持ちました。

学校に居る間はユーノから事情を聞く片手間、レイジングハートには機体設定と魔法関連のアジャストを頼んでやつて貰いつつ、デバイスのデータをアリスにもリークして貰っています。

これによつて使える魔法と、今は不要な魔法や私が使いたい魔法を
チョイスしてアクショントリガーに登録していきます。

そして放課後、送つていくところアリサの誘いをやんわり断り、帰
路に着きます。

アリサとすすかには塾がありますし、密室に近い自家用車ではすず
かの理性が心配ですし、確か今日も一つジユエルシードが発動する
はずだつたような？

第1期はテレビでなく一次創作からの知識が主である為、かなり曖
昧不確かなのが難点なんですね。

劇場版はちゃんと見てている分心配はありませんが、初つ端からジユ
エルシードの数に違いがありますから、ビッちのルートを進むかわ
からないんですね。

一番手つ取り早いのはバルディッシュの形が判れば一目瞭然なので
すが。

とりあえず今、レイジングハートは色々と忙しい為、適当に街の中
心へ向かうことにしましょう。

それならば何処かで発動しても瞬時に駆けつけられますしね。

そして街の中心へ向かいつつ、アリスをどんなデバイスにするのか
を考えます。

インテリジェントデバイスなのは確実です。レイジングハートが劇
場版形態の為、TV形態のレイジングハートを再現してみたい思い
もありますが、喧嘩になりそうですね。

他にはバルティックシユのように近接戦闘を主眼に置いたデバイスにするという手もありますが、運動神経のない私に扱えるかが問題ですね。

『それにしても、なのはって何者なの？そのインテリジェントデバイスにしても、じつには魔法は無いはずなのに』

『何者と言われましも、特別何かをしているわけではありませんよ。それにこの子は私のファミリアですし、魔法という物がなからうとも、魔法という概念は、御伽噺やゲームの中には存在していますし、まったくゼロというわけでもないとは思いますけど？』

なにせ吸血鬼なり御神流なりが存在する世界です。

ここにとらハが本格的に混じっていたらそれこそ、この世界も管理指定を受けるかもしけなかつたでしょうね。

しかし管理とはいえど、その実態はミッドチルダを中心とした中央集権支配体制にも見えなくもありませんし、管理局のトップがんなエゴ塗れの脳髄で思考がお花畠な人達では、この世界とは全面戦争にでもなりかねませんね。

ただでさえ、質量兵器に潔癖症をもつミッドチルダの人間では、この地球は危険物の塊でしょうし。

『なのは？』

『……すみません。少し考え方をしていました』

今考へても仕方がないことですね。

『The completion of adjustment.
The next battle to a motion should become light now. (アジャスト完了。これで次の戦闘から、動きが軽くなるはずです)』

「お疲れ様です。レイジングハート」

レイジングハートはこんな私に力を貸してくれるのですから、私はその想いにも応えなければ

その時、強い魔力の波動を感じました。

この波動は

『なのは!』

『ユーノ、今の感覚が』

『うん。ジュエルシードだ!結構近い!』

『私は先行します。ユーノもなるべく速く来て下さい』

『ダメだよなのはーー！一人じゃ危険だ！』

『いじつしている間にも、暴走体が暴れている可能性もあります。足止めして、被害を食い止めておかなければ……』

『ちょ、なのはーーなのはーー』

私はユーノの言葉を無視し、駆け出します。

運動神経は皆無でも、走つて転ぶような無様は自分のペースを乱さなければ晒さないようにはなりました。50m13秒台ですが……。

やつてきたのは海鳴市で少し高台の方にある神社。名は確かハ束神社でしたか？

「こきますよ、レイジングハート」

『Stand by Ready.』

我、使命を受けし者成り

契約のもと、その力を解き放て

風は空に 星は天に そして不屈の心はこの胸に

この手に魔導を

「レイジングハート、セットアップ！」

『Stand by Ready · Setup.』

レイジングハートがデバイスマードへ変形し、私の服もバリアジャケットに再構成される。

「レイジングハート！」

『Hover Feather』

背中と足にホバーフェザーガ装置が展開。

そのままホバー走行で神社の石段を駆け上がる。

最上段で勢いをそのままに飛び、神社の鳥居の上に飛び乗ります。

そして境内には

「あれは 狐……ですか……？」

『Kuooooo——!』

遠吠えをする巨大で凶暴そうな狐が私を一直線に見つめています。
どうやらターゲットを私に絞ったわけですね。

「征きましょう。レイジングハート、アリスト

『My master which should go- (行き
ましょ、マイマスター)』

『Please do your best. It is the
Raging Heart to a meister. (頑
張つて下さい。マイスター、レイジングハート)』

ジュエルシード暴走体・獣型 魔力ランクA+

高町なのは

魔力ランクA 空戦適性C 陸戦適性D+ (ホバーフェザー発動中
はA+) 総合ランク推定C+ (ホバーフェザー発動中はB)

使用可能魔法

シートバレット

ディバインランサー

ディバインランサー・フランクスシフト

クロスファイア・バーストモード

ファンтомブレイザー

ディバインバスター (2発限定。3発目は不発の可能性大)

スターライトブレイカー (フルドライブ時条件付きで使用可)

プロテクション
バリアバースト
リングバインド
チーンバインド
クリスタルケージ
ブリッジアクション
ホバーフェザー
フィジカルヒール

「アジャストのお陰で使える魔法も増えました。昨夜のような無様な遅れはもう取りませんよ！」

第6話 新しい友達は『くもん』です（前書き）

調子が良かつたので連投です！

第6話 新しい友達は『ぐもん』です

side・高町なのは

レイジングハートを眼下の暴走体へ構える。

『Kuooooo——!』

暴走体は口から雷撃を吐き出した。

「レイジングハート！」

『Protection』

右手を突き出し、バリアを張る。

激突するバリアと雷撃。

「つ、あやうつ……」

『Master』（マスター）

突き出した右手に鋭い痛みとピリピリとした痺れにも似た感覚を感じる。

何故！？防御には成功したはずなのに！

『Kuooooon!!』

暴走体の周りに展開されるバチバチと電気を発するスフィア。

プラズマランサー？それともスタンバレット？

『Kuoon!!』

対空するスフィアが放たれる。

直射型のバレット？

「レイジングハート、もう一度！」

『Protection』

またバリアで防御。突き出す手も変わりません。

「つ、あやああ……」

『Master!? (マスター!?)』

またです。バレット自体は防御出来ているのに、スタン効果だけがバリアをまるで素通りしているように

「まさか!?」

八束神社、狐、電撃、リリカルなのは

4つのパズルから導き出された答え。——つ時は自分の無駄に回転の良い頭を疎ましく思います。

「最悪です……」

もしアレが私の考えている存在ならば、私は暴走体の攻撃をすべて回避しなければなりません。

「レイジングハート、これから先は防御は考えずに、機動撹乱で攻めますよ」

『I understand. I also judge th

at it is wiser. Please do not carry out unreasonableness. (わかれました。その方が賢明だと私も判断します。ですが無理はしないで下さい)』

「それは向こうが許してくれませんでしょ?」

『Fushuuuuu.....』

バチバチと帶電する暴走体。体勢を低くしているとなると、突っ込んでくる気のようです。鳥居を壊される前に私は鳥居から跳躍し、神社の屋根を足場にし、神社の裏手の森の中へ逃げ込みます。

アレを封印することは少々骨が折れそうですね。

『High plasma object! It is rapid approach from back! (高プラズマ体! 後方より急速接近!)』

「回避後、180度ターンと同時にディバインランサー展開!』

『All right!』

地面を滑りながらスライドマーカーバーでプラズマ体を回避。

思った通り、プラズマ体は逃。

『KUOOOOO———』

後ろから本体による直接攻撃！

『Devine Lancer』

私の周囲に展開される環状魔法陣に包まれた桜色のスフィア。その数は12。

私は球技も絶望的ですから、誘導系より直射型の方を求めて、レイジングハートに組んで貰つた新しい魔法。

ディバインランサー

「ファイア！！」

12個のスフィアから次々と槍型の魔力弾が発射。配置感覚も考えているため、回避する間すらなく直撃してゆきます。どうやらバリアは張れないようですね。ならばこれで幕引きです！

『Blitz Action · Devine Buster · St and by Ready!』

短距離限定の超高速移動魔法 ブリッツアクション。

高町なのはのように魔力の無く、バカス力砲撃を撃てない私には一撃一撃が勝敗の決め手になつてしまつ。さらに魔力の所為か、経験の所為か、練度の所為か、砲撃の威力も高町なのはには及んでないよつに思えるのです。

そこで編み出したのが、近く中距離での搅乱から一気に懷へ飛び込んでの零距離一撃必殺砲撃。

砲撃魔導師とはかけ離れた戦闘スタイルですが、私はこうしなればまともな一撃が入らない。なりふり構つてはいられません！

私の右手の拳の先に展開される、環状魔法陣が取り巻くスファイア。

『K U O O O O O ! ! ! ! !

ディバインランサーの爆煙から飛び出して来た暴走体は口を開け、私に噛みつこうとする。

私はブリッツアクションの加速をそのままに身を屈める。

上を過ぎ去る暴走体の口。

懐を捉え、ホバーフェザーの推力を上ベクトルで解放しながらアッパーを叩き込み、予め用意していた魔法を解き放つ！

「デイバインバスター——！！」

零距離でのデイバインバスター直接攻撃。

スターはディバインバスター。

威力は十分であり、加速度も相まって相当のアッパーになっているハズ。

現に私の3、4倍ある暴走体の巨体が浮き上がっています。

『Mode change! Canon mode! Devil ne Buster. Stand by Ready!』

カノンモードに変形したレイジングハートを、浮き上がった暴走体の、デイバインバスターを打ち込んだ同じ箇所に突きつける！

「シル・トシ...」

トリガーを引き、再び零距離でディバインバスターを放つ！

「ジユノルシード、封印！」

『Sealing.』

光りが晴れ、ジユノルシードと分離された狐。

『receipt number XVI.』

「スウ……ふう……」

深呼吸をして、緊張状態を解きます。

やはり使える魔法が多いのは助かります。

それに昨日に比べて疲労感も大分軽いです。やはり優秀ですね、レジングハートは。

「…………」

ジユノルシードに取り込まれていた狐を抱き上げてみます。

「…………」

もふ

「…………ふこやあ…………」

な、なんですかこのふつくらもふもふもつじもかもかの癒やし物
体は！？

「なのはーーー」

「ユーノー？」

ユーノが来た様ですね。

「なのはー・ジユエルシードはーーー？」

「しーーー、ですよ。ユーノー」

「？？？」

とりあえず狐を抱えて、出来るだけ振動を出さずに裏路地の住宅街
の屋根をブリック・アクションとホバーフェザーを使って駆け抜け、
家に向かいます。

は、早くこのモモコモコをゆづく堪能したい！

side: グーノ・スクライア

なのはの才能には舌を巻くというか、昨日の今日。まだ24時間経つてもいよいよもうレイジングハートを使いこなして魔法を使うバトルセンスは恐ろしく思う。

でも何よりも恐ろしいのはその戦術展開と思考速度と判断力。

なんかもう、僕も9歳にしたらそれなりに普通の9歳とは違うのは
環境上自覚しているけど、なのはのそれはかなりぶつ飛んでいるよ
うに思える。

「…………おせでひー」

なんかトロッとした田のままトレーディングをしているなのさ。

その原因はその胸元で寝て いる狐。

なのはの話とレイジングハートの戦闘ログから、ジュエルシードに取り込まれた狐らしい。

原因で思つたけど、やつぱりなのはのタクティクス能力はこのテレ

ビゲームが原因かもしね。

何度か挑戦してみたけど、ノーマル難易度でもかなり難しいのに、ハードモードはもつと難しい、てか僕にはノーマルですら無理なのに、なのはは縛りプレイといつのもやる上に、これでも簡単な奴だつて言うんだ。

ちなみに難しい奴は1ステージすらクリア出来なかつた。これがなのはが言つムリゲーつていう意味を正しく知つた時だつた。

でもこの魔装機神つてやつはスゴいなあ。

確かに空想の設定でも、僕達の魔法とはまた違つた解釈に興味が尽きないよ。頑張つてやってみよつかな？

ただただ、至福です。

「…………ク…………ク…………！」

あ、起きたようですね。

キョロキョロ見渡している様がまたなんとも…………。

至福です。至高です。アリサに匹敵する程の萌えです！

「…………ク…………ク…………！」

後ろからもさまさの物体を抱き締めます。

…………ふにゃあ…………。

「…………ク…………ク…………！」

「な、なのは、その子嫌がつてない？」

「なにを言いますかユーノ？ただ状況を理解出来ずに混乱しているだけでしょう？もう大丈夫ですかね？恐い物は私が取り扱いましたから」「…………」

泣き声を上げて狐はもがき続ける。

ユーノは見て思った。

狐はなのはを見て余計に泣いているんじゃないかと。

しかしそれは口にしなかった。

もし口にしたら自分もアッパー・デイバインバスターからレイジングハートの零距離デイバインバスターの2連多段コンボでノックアウトされると僅かばかりにも想像して身震いがしたからだ。

「ク――――――――――

「あつ……」

脱出に成功する狐。一目散に部屋の端に行くが、なのはの部屋は高町なのはの部屋より物が多くてかなり狭い。

狐は本棚の影に隠れるが、なのはの方を見ていた。

田のあつたなのはは微笑むと、狐は本棚の影に隠れ、そしてゆっくりと顔を少し出してなのはを見る。

恐いけど気になる。そんな感じに。

「初めまして、私は高町なのはと申します。あなたの名前は？」

「…………クー…………クオーン…………」

「そう、久遠ですか」

「クオッ…………クー…………」

私が久遠と正しく発した言葉にはつきりビックンッと反応する狐。

状況証拠的にも、この狐は十中八九とらハの久遠なのでしょう。

ですが家には居候人は居ませんし、高機能性遺伝子障害病　通称
HGSでしたか？

それについてもまったく情報はありませんし、いつたいどの程度この世界にとらハが混じっているのか皆田見当もつきません。

劇場版かTV版かも判らないのに横腹からとらハまで突っ込まれたら私もどうすればいいかわかりません。

戦闘民族高町家。

もしどらハ設定に汚染されていたら兄様と父様には私が夜に出掛ければ間違いなく気づかれるでしょう。

以前から海岸線に夜、泣きに行っていたことがあります、それで月に一度一度あるかないか、あまり出歩いては心配もされます。

あまり夜は動くべきではないのでしょ？

「久遠、いっちに来て下さー」

膝をポンポン叩いて促しますが、久遠は固まつたまま動きません。

仕方がありません。

「クォン！？クー、クー」

「…ふにゃあ…」

至福です……。

「クーーーーー！」

「あ、あはは……」

現在封印したジュエルシードは3つ。

お供はユーノと久遠です。

「え？ 僕才トモ扱い？」

「クウ————！」

「……ふーせあ……」

第6話 新しい友達は『くおん』です（後書き）

VS久遠でしたが、この久遠は未だに封印状態にあるため弱いという設定です。

しかも使える魔法の種類が増え、戦術の幅が広がり、ゼルエルを倒した我が家なのはの経験値は『力かつたのです。

決して久遠が弱いんじゃなく、なのはがちょっと強くなつたのです。

とりあえず久遠をお供にする為に高町式 O H A N A S I でも

ちなみにとらハキラは今のところ久遠だけで限界です。

意見・感想をお待ちしております。

第7話 御神の剣（ウチヌカツ）（前書き）

ひよひと聞めです。

第7話 御神の剣（つねのつるぎ）

side・高町なのは

ユーノを迎えたばかり故に、久遠もとなるとさすがに断られそうだ
と思つた私は、家族には内緒で久遠を部屋に置くことにしました。

久遠はまだ少し身持ちが固いですが、それでも餌づけと毎日抱き締
めて寝る事で、敵でない事をアピールします。

ジュエルシード、魔法と出逢つて5日目。集まつたジュエルシード
は3つ。

高町なのはと違い、夜は出掛けずというか、出掛けられない理由が
複数あり、これ幸いにとちゃんとぐっすり寝るようにしている為、
疲労感は無く。レイジングハートも一度の戦闘経験から私の為にア
ジャストとプラッシュアップを繰り返して仮想戦闘シミュレーションを繰り返してデータを蓄積・更新の繰り返しで、日に日に少しづ
つですが、動きも良くなってきたように感じます。しかし私の戦闘
スタイルは未開発で開拓中のスタイル。

まだのが大きいジュエルシードの暴走体だから当たられるものの、
フェイト・テスター・ロッサにはまだ届かないでしょう。

たとえ勝てずとも無様に墜ちるわけにはいかない。これは元男の私
自身の男の意地というものです。墜ちるば諸共

そんな心構えで挑むつもりです。

さて、今日も学校ですね。

ユーノを肩に乗せ、久遠を置いて一度部屋を出て一階のコビングへ。

「母様、おはよひいわこめす」

「おはよひなのは、ユーノくん」

キッチンでは母様が朝食の支度中ですが、他の皆が見当たりませんね。

「父様達は道場の方ですか?」

「そうよ。あ、ちょうどいいからなのは、みんなを呼んできて頂戴」

「わかりました」

玄関よりも近い縁側の方に回ってサンダルを引っ掛け、道場へ向かいます。

『やう言えば、道場つて言つてたけど、なのはの家族はなにかやつてるの』

ユーノが念話で質問してきます。そういうばちゃんと説明していませんね。

「永全不動八門一派・御神真刀流、小太刀二刀術」

『え、えーっと……』

『御神流は、二振りの小太刀を主軸に、飛針とばつ 棒手裏剣のようなものや鋼糸こうしと呼ばれるワイヤーのようなものなどの暗器、さらには体術なども用いた総合殺人術です』

『さ、殺人術つて……』

『御神流は御神家という、父様の血統列の家の流派で、表立つた要人警護を主とする御神流。そして父様の旧姓の不破家は要人暗殺を主とする御神流・裏を伝えているのです』

『な、なんか、壮大だね……』

『ええ。それで父様は師範代、兄様は師範代代理、姉様は兄様から御神流を教わる門下生のようなものです。これが戦闘民族一家高町家の戦力図形態です。陸戦限定なら推定AAAからS+、条件付けでSSクラスでしょうね。私の私見ですが』

『す、凄いんだね……』

『達人ともなれば、表面を傷つけず衝撃で物の内部だけに破壊を引き起こしたり、模造刀でドラム缶を一刀両断することも可能です。以前兄様のを見たこともあります。スピード重視の剣術であるため、

力の強い者が用いる剛の剣に対しては多少不利な面もありますが、超能力を用いない純粋な人間本来の肉体・能力のみを用いた、『戦士』としての武術の中では屈指の流派でもあるでしょう』

『も、もういいよなのは。早く行こう』

『そうですね』

改めて御神流のことを軽く振り返つてみたこの時、私は思いました。

そんな戦闘民族一家高町家の末妹である私にも、その血が流れているお陰で、2体の暴走体との戦いでも大きなケガもなく無事に終えられたのではないかと。

御神流

それのお陰で一度父様は命の危機を迎えました。

そのお陰で少し嫌悪感を持つていましたが、場合によつては兄様か姉様に頼んでみましょう。

近接高機動戦闘型砲撃魔導師

私の戦闘スタイルから造称した砲撃魔導師の新スタイル研究、開拓、開発、探求、確立の為に。

少しでも、戦術の幅を広げる為に

道場へ足を踏み入れると、腕を組んで立つてゐる父様。そして道場の中心で

「せえいっ！」

「ふつ」

一本の小太刀の木刀で打ち合つ兄様と姉様の姿。

「父様」

「ん、おはようなのは。そろそろ朝ごはんか？」

「はい。母様が呼んでいます」

「ありがとうございます。でももう少し待つてくれ、今良い所なんだよ」

「良いといひ？」

小太刀を構え鍔競り合う二人。

私は近くで見ようと父様の近くに寄らうとしますが

「おつと……なのは、そこから先は来ない方が良いぞ」

「え……？ ツー？」

ゾクリツ、と。

背筋が冷たくなる感覚。

いきなりの感覚に身体が勝手にバックステップ、感覚を感じた方向に身体が身構える。身構える先には兄様と姉様。まさか

「今……」

「んー、まあなんだ、殺氣といつか鬪氣といつか……なのはにはまだ早いかなー？」

「いえ、言葉の意味は解せます父様」

頬と背中を冷や汗が流れ落ちる。

暴走体からは感じませんでしたから、初めての感覚に驚いてはいますが、死線を潜り抜けた身、恐怖はそこまでは感じませんが、真正面から向けられたらわかりませんね。

高速の領域、私の視界では捉えられない速さの攻防に、改めて高町家の非常識さを実感します。

『すゞ……これほどの戦士は僕たちの世界にもそつたり居るものじやないよ』

『現代にもあまり居ないと想いますよ……』

『あ、なのは、危ない！』

『え？ なつ ！？』

ユーノとの念話の最中、一本の小太刀が私の方に回転しながら飛んで来ます。

また思考より身体が先に反応する。一瞬で戦闘体勢と思考を切り替えられるようになります。

身を屈めながら腕を引き締め、上を過ぎ行く木刀へ身体全身のバネを使つた渾身の一撃で

「ディバインバスター！！」

力チ上げる！！

クリティカルヒット、自分でも納得の行く入りの一撃に、私も少しずつ強くなっていることを実感します。

打ち上げられた木刀はそのまま天井に突き刺さると、床に落ちました。カラーンカラーンという音が道場に響き、ドンッという私の着地音が続けて響きます。

自分の右手を感覚を確かめるように握って開いて、そこで思考が切り替わり、気づきました。

や、やつてしましました……。

や、厨二病と言えば誤魔化せらじょい。

「いやあ……凄いなのは、何時の間にそんなこと出来るようになつたんだ?」

父様が和やかな声で言しながら、私に歩み寄つて頭を撫でてくれました。

幾つになつても、頭を撫でられるのは良いものですね。

「い」めんねなの、びつあせきつて

「いえ、偶然ですかりお氣になさりや」、姉様

「驚かせてすまなかつたな。それと、あの一撃は中々の切れだつた

「恐縮です」

そう言って頭を撫でてくれる兄様。

言葉は少ないですが、いつもして態度でそれを補つてあまりあるのが兄様。

その辺りが大変好ましく、尊敬しています。

「恭也には、俺からこう事はもつあまりないな。俺より強いんじゃないか？」

「まさか……まだ敵わないよ」

兄様でも敵わない父様はどれだけ強いのでしょうか？

それにもしても、兄様もやはりとらハ方面色が強いように感じます。何より踏み込みの時に一瞬脚を庇つように見えました。

おそらく私の知らない所で膝を壊している可能性もあります。

もう、劇場版とかTV版以前に、どこからリリカルなのが、どこまでとらハなのかまったくわかりません。

そのうちHGSTとが出て来たりするんじゃないんですか？

そうなつたらもはやカオスです。

「どうだ、なのはも御神流やってみないか？」

父様が私にそう言います。これは渡りに船ですが、ジユエルシードを探す時間の兼ね合いもありますし。

「…軽く、朝の稽古をつけてくれますか？」

「ああ、良いことも…」

私の言葉に父様は微笑みながら頭をガシガシと撫でてきました。

兄様より大きくて、ゴシゴシしている手。

私はこの手が大好きです。

「あ～あ、とうとうなのはも御神流を習うのかあ……なんか理不尽」

「俺は8歳から御神流をやっていたから、丁度良いと思つが」

「だつてあの運動音痴のなのはが、あんなアッパー決めちゃつたんだよー? 私なんか直ぐ追い越されそう……」

「良かつたじやないか、その分、身につく速さが上がるんじゃないか?」

「わ～んなのはーーーー恭ちゃんがイジメるわーーーー!」

嘔泣きをしながら私に絡みつく姉様。

高町なのはの居場所を奪つてしまつた私が手にするには勿体無さず
ぎるこの温かな人達。

でも今だけは、この人達の事を家族と想つ事を許して下さいますか
？この世界の、産まれるはずだった、高町なのは

=====

side・高町恭也

「いってきまーす」

「いってきまーす」

「ああ……『氣をつけてな』

なのはと美由希は学校へ。父さんとかーさんは翠園へ。

俺は……今日はまだのんびりとできる。

普段は賑やかな我が家も、いひじて一人になるととても広く、静か
で、寂しく感じる。

いや、今はなのは拾つてきたフェレットと狐が居るか……。

その事で少し気になることもあるのだが……聞いて答えてくれるわけでもないだろ？あの子は必要無いことは言わない子だからな。それに今言えずとも何時か話してはくれるだろ？さて、暇だからな、ここは一つ……。

「久しぶりに手入れでもするか」

剪定道具を取り出し、庭の盆栽へと向かう。

パチン

意図せぬ方向に伸びた枝を切り落とす。

美由希や忍には年寄り臭いと言われるこの趣味だが……美由希は園芸、忍なら機械いじりといった事をしているんだし俺の場合、偶々対象が盆栽だつただけだ。

何よりこうしていふとどいか心が落ち着くし、考え方をする時にもなかなか良い。

「あの日、からだよな

5日前の夜、なのは拾つてきたフェレット。

作業部屋に紛れ込んで、中身を引っ搔き回され怪我をしたとなのは
は言つていたが、頬からその他に右腕の方からも微かに血の臭いがし
た。

そしてその翌日の夜には微かに焦げ臭い、あれは人肌の焼けた臭い
だつた。

機械いじりで火傷したと言つていたが、その日から家に狐の気配も
増えた。

フレットに狐となのはの怪我。何か関係もあるのか？

それに朝、道場で俺と美由希の気迫を感じて見せた行動と、俺が弾
いた美由希の木刀を力チ上げたアッパーに着地の体勢。

俺が言うのもなんだが、高町家の中で一番平々凡々に育つてきたな
のはが、何時の間にか荒削りだが戦闘経験者のような動きと気配を
発した事。

何かあつたのか、やはり気にし心配にもなる。

父さんもそれを気づいてなのはに、本人がどこかしら嫌悪感を抱い
ていた御神流を勧めたのかも知れない。

父さんが怪我をしたのはなのはが今の性格になつてからの事だ。あ
の子は鋭い子だ。

御神流と 正確にはS.Pの仕事と父さんの怪我の関連に気づいて
いたのかも知れない。

それに俺の焦りとフレットシャーも。

その所為で、俺は一度妹の心を潰しかけてしまった。

俺達家族の罪。

だから父さんも怪我を期に仕事を辞めた。

俺も焦りとプレッシャーから来た無茶からの怪我を経て、御神流を、ただ父さんのように強くあるのではなく、大切な物を守る為に振るう事にした。

怪我が治りきらない俺には御神流剣士としての完成は絶望的だが、それは時間をかけて美由希がやってくれるだろう。

剪定のハサミ、その刃を小太刀の刃に重ねる。

「恭也、お前に守りたいものはあるか？」

昔々、そこまで惜じないが、父さんに言われた言葉。

その時の俺はまだガキだったからどうにも答えられなかつたが、あの日、なのはが泣き腫らした顔をしてスケッチブックを大事に胸に抱いて、怯えながら帰ってきた末妹の姿を見た日から今日まで、そしてこれから先もずっと胸を張つて、俺は父さんに言える。

俺が振るう御神流は、大切なものを守る為にあると。

side・高町なのは

夜の間はエリアサーチで海鳴市を重点的に調べ、遠見市はアルフがエリアサーチをかけているかも知れませんし、海鳴市しかエリアサーチは使えません。

「命拾いしましたね……」

八束神社にジユエルシード反応。

これを久遠が取り込んでいたら私は焼き肉になつていたでしよう。

『なのは』

「ええ、行きましょ！」

「クオン」

「いつてきます。久遠」

我、使命を受けし者成り

契約のもと、その力を解き放て

風は空に 星は天に そして不屈の心はこの胸に

この手に魔導を

「レイジングハート、セットアップ！」

『Stand by Ready . Setup.』

レイジングハートとバリアジャケットを展開し、久遠を一度抱き締めてから、コーンを肩に乗せて窓から外へ。

「レイジングハート」

『Hover Feather』

ホバーフェザーを開き、暗闇の住宅街を駆け抜ける。

「レイジングハート、速度を上げて下さい」

『All right . Blitz Action .』

ブリッツアクションも使い、さらに速度を上げて八束神社へ。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

side・高町恭也

大学の帰り、なのはの気配を感じて、その感じた方向を見れば、家の屋根を高速で駆け抜けて行つたなのはの姿。

肩にはユーノ。手にはなにやら知らんが、ステッキを脇の下と左手で保持していた。まるでライフルを保持するよつ。

「なのは…」

俺はなのはを追つて駆け出す。

なのはの見据える先、その視線の先は八束神社。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

side・高町なのは

八束神社へ辿り着いた私はホバーフェザーを消し、境内を見渡します。

「境内には……無いようですね。もしかしたら裏の森でしょうか?」

「そうかもしないね。行ってみよう?」

「ええ」

神社の裏側の森の中、とりあえず投影モニターに移した久遠との戦闘ログを振り返りつつ、久遠との戦闘場所にはサーチャーを、私達はその反対側へ向かいます。

ユーノの結界も張らず、剥き出しの空間で『ティバインランサー』や『イバインスター』を放つたのだから、その魔力余波に反応せず発動しなかつたジュエルシード。

それが意味するのは、魔力波が届かない場所にあつたか、あとから持ち込まれたか

魔力流を打ち込んで強制発動とかの方が速いんでしょうが、フェイント・テスタロッサのような無茶を出来ない私はそれも出来ない。サー・チャーハの魔力も戦闘を想定するとそこまで数もまわせませんし、地道に探すしかありません。

「とは言え……少し視界が悪いですね」

森は薄暗く、闇夜に慣れてもやはり視界が悪いです。

夜空を仰ぎ見る。

漆黒の闇夜に浮かぶ満天の星光。

その中に浮かぶ月。

その月明かりのお陰である程度の光量はありますが、森を照らすには足りません。

「確かに、いつも暗いとね。僕が照明魔法を使つからうと待つてて」

ミッド式魔法陣がコーノの前に展開し、スフィアを形成。

これが証明魔法ですか。魔力光に関係なく普通の証明の照らすスマニア。

「これで少しばかり探しやすくなつたかな?」

「ええ。では再開しましょう」

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

side・高町恭也

後を尾けてるつもりだつたが……実際の俺は家で寝ていて夢でも見ているんではないだろうか？

思わずそう考えずにはいられない。

まず、ユーノが喋つた。そして魔法とやらを使った。

なのはの前方には火の玉のようなものが浮いている。

だが、これは夢ではなく、現実。

比較的俺が落ち着いているのは……変異性遺伝子障害と言つ病気の副作用で黒い翼を持つた幼馴染、そして夜の一族といったものを既に知つてているから。

「超能力、吸血鬼、自動人形と来て……魔法……か」

しかもそれをなのはも使つていて

神速にも似た移動法を使つていれば、飛んでくる木刀は迎撃は出来るか。

しかしこれで大体は読めてきた。

なのはは、妹は、かつての俺のように幼いながら、もう戦う戦士であるのだと。

ある程度納得できたが……何故こんな所に？

その時、ふと頭上で何かが羽ばたいたような音。

こんな時間にか…？この林でも、今まで鍛錬は幾度となく行なつて
いるが、梟など夜行性の鳥類はいなかつたはずだが。

Side・高町なのは

卷之三

「なのは、これは……」

「ええ、ジユエルシードの気配……上一」

Gu a a a a a - - - - - . !

「ツ！プロテクション！？」

バリアを張り、何者かの攻撃を防ぐ。

「なのは！」

「ユーノ！結界を！」

「う、うん！広域結界！」

ユーノの魔法にて八束神社一帯を包む結界が張られる。

『Guaaaaaa!..』

「と、鳥い！？」

「大きいですね。焼き鳥何人前でしちゃうか？」

現れたジュエルシードの暴走体は鳥型。大きさは約6m弱。

『Guaaaaa!..』

翼を羽撃かせ、暴走体は羽を弾丸のように放つてきた。

「ぐう」

右手を突き出し、バリアで羽を受ける。

ボンッ！ボボボンッ！！

「きやあつ！」

「炸裂弾！？なのは大丈夫？」

「ええ…」

炸裂の余波は貰いましたが、怪我はありません。

「レイジングハート、ディバインランサー展開！」

『 All right ! Devine Lancer . Stand by Ready ! 』

「ファイアー！」

6つのスフィアからディバインランサーを連射。しかし暴走体は空へ飛び上がり、ディバインランサーを回避する。

「！」

『Guaaaaa!—!—!』

「ファイア！！」

私と暴走体の間で、ディバインランサーと炸裂羽の弾幕が激突する。

結界が張つてある分、派手に手加減無しにやれます。私のスペックも120%で運用可能です！

『Guaaaaa!—!—!』

炸裂羽が無駄と見てか、暴走体は翼を羽撃かせ強烈な風を起します。

「くっ、なんて風！きやあああ！」

「な、なのは！！」

バリアジャケットや頬や手が裂け、全身に痛みが走り血が噴き出す。まさか

「かまいたち！」

「風の刃！？」

フィールド攻撃系ともなれば防御は抜かれますね。

「レイジングハート！」

『Mode change! Canon mode! Blit
z Action. and Hover Feather St
and by Ready!』

「ハアアアアア――！」

ホバーフェザーとブリッツアクションの高起動による搅乱。

「ディバインランサー！」

『Devine Lancer! Stand by Ready
!』

「シユートオオオツ――！」

10個のスファイアから次々にディバインランサーが放たれる。対フ
ェイト用に考案していた戦法ですが、ここで試すのも良いでしょう！

ディバインランサーのランダム射撃により空中機動を限定し

『Guaaaaaa—!!』

敵の回避予想地点を割り出し、そこへ

『Guu—!?!』

「ディバインバスター！！」

地上からホバーフェザーの推力を全力解放！

暴走体の懷にドンピシャで突貫し、アップーと同時に零距離でディバインバスターを撃ち込む！

そして

「ジュエルシード、封印！」

『Sealing.』

構えたレイジングハートのカノンモードの砲口を突きつける。

『Devine Buster!』

「シューートッ！」

トリガーリー引き、零距離封印砲撃。

『G u a a a a a a a —————』

砲撃に吹き飛ばされ、地面に突つ込む暴走体。粉塵と爆煙で結果が判りませんが、久遠すら墜ちた零距離2連多段ディバインバスター。

「はあ……はあ……はあ……はあ……はあ……」

地面に着地しながらも、レイジングハートは構えたまま粉塵が晴れるのを待つ。

封印に成功しているならジュエルシードが現れるはず

『G y u a a a a a a a —————』

粉塵を突き抜け、一直線に暴走体が突貫していく。

封印仕切れなかつた！？

『 Protection . 』

「 くく、あああああ―――っ――― 」

バリア事押され、そのまま木に追突する。

「 がはつ―― 」

「 なのは―― 」

『 G y u a a a a a a ! ! ! ! ! . 』

暴走体が口を開け、私に迫る。

バリアも回避も間に合わない――

「 くつ―― 」

「 なのは―――――― 」

バリアジャケットの防御力を信じて、腕をクロスさせて頭を守る。

ですが、予想した衝撃も、痛みも、やつて来ませんでした……。

『G、Gueeee.....』

暴走体の開けた口の裂け目と後頭部に巻きつゝ光り……いえ、これは！

「鋼糸！？」

月明かりで光る鋼糸を田で辿つていけば、そこには

「兄……様」

「逃げるなのは……」

鋼糸を腕に絡め、思いつ切り引いている兄様の姿。

「チーンバインド！」

チーンバインドで暴走体を雁字搦めに縛り上げる！

『G y u a a a a a a -----』

もう一度、砲撃を喰らわせた場所にレイジングハートを突きつける！

「コモリット解除！レイジングハート！フルドライブ！－！」

『All right! limit release. Full
1 Drive!』

フルドライブにカノンモードのフレームに展開される一対の桜色の翼。

環状魔法陣がフレーム、トリガー、コニット、柄に次々と展開する。

残った魔力と周囲に散らばった魔力を有りつゝ集める！

「ディバインバスター！マキシマム・ショートオオオツ！－！－！」

トリガーを引き、3発目の零距離、ディバインバスターが解き放たれる！

「ブレイクッ－シユ－－－トツ－！」

『Gugya aaaa－！－！－！』

今度、ここへ――！

「ジュエルシード――封印つ――！」

『 Seal in go. 』

ディバインバスターの奔流が終わり、残ったのはジュエルシード二個と黒い鳥……おぞらぐ鴉。そして兄様の錆糸。

『 Receipt number XIII - XVIII . 』

「つ、せこ……はあ……はあ……はあ……がはつ――」

「なのはつ――！」

駆け寄つてくる兄様。

また、無茶をしてしまいましたね……。

「なのは――なのは――なのは――！」

「……だい、じょうぶ、です……よ。少し、やす……めば……」

兄様に魔法がバレた。

もはや世界がどんなのかわからなくなつてしましましたよ。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

side・高町恭也

息を荒げるなのはを抱きながら、先ほどの戦いを思い帰る。まさか、俺の想像していたものの斜め上を行く戦いか……。

あのアッパー、タイミングと入り。

魔法を使われたら俺でも神速を使わなければ喰らうだらうな。

一撃目は敵にダメージを入れながら動きを止め、二撃目が本命のコンボか。我が妹ながら、なかなかエグい一撃を考えたものだ。

「あ、あの……」

「喋れたんだな、ユーノ」

「ツ、……は、はい……」

怯えるように俯くユーノ。

おそらくはユーノが魔法関係者で何らかの理由でなのはがそれに荷担したんだろう。

しかしユーノの様子をみれば、なのはが進んで協力しているんだろう。この子はそういう子だ。

「兄様……ユーノを、責めないで下さい」

「なのは……！」

「私が勝手に、首を突つ……込ん、で……いるの、ですか、ら……」

まだ呼吸が落ち着かないんだろうなのはだが、その顔はやり切った良い顔つきだった。

これは、責めたら俺が悪者だな。

「わかつた。とりあえず、家に帰るぞ」

「はい……」

「ユーノも……な

「僕は……」

なのはを背負つて、俯くコーコの首根っこを掴むと、頭に乗せる。

「 もよ、恭也さん…」

「 話しあとでゆくこと聞くな

久しぶりに背負つたなのはの重みに、懐かしくも、最後に背負つた5年前より重くなった妹に、何時の間にかこんなに逞しく育つてしまつたことを少し嬉しく思つた。

とつあえず美由希。お前本氣でこのままだとあつとこつ間になのはに抜かれるかもしれないぞ。

第7話 御神の剣（つねのつるぎ）（後書き）

兄様に魔法がバレました。

とらハ恭也スペックならこれくらいは大丈夫だろうか？

意見・感想、お待ちしております。

第8話 切なる言葉

side・高町なのは

私は兄様に背負われて家に戻ったあと、作業部屋にて兄様に現在海鳴市で起きていることとジュエルシードについてを説明しました。

ケガはユーノと私でフィジカルヒールをかけたので問題はありません。

「 そうだったのか、だがユーノ、お前の責任感は立派だが、何故自分1人で来たんだ？ 事情を話せば仲間の1人や2人は着いて来てくれたんじゃないか？ 1人で飛び出して、ケガをして、今は結局はなのはに頼りきりの状態だ。仲間を呼べないにしても事前に色々と必要な物や事柄をすべて終えてから来るべきだったんじゃないか？」

「 うつ、す、すみません……」

その辺りは大人びて見えるユーノでも9歳故の脆さと迂闊さでしょう。

焦つて準備を怠り、さらに攻撃力は私にも劣っているユーノでは、たとえレイジングハートを持つしていても、それは蛮勇であり無謀ともいう行動でしょう。

まあ、 そうなる運命であると言わてしまえば、私もユーノもそれ

までなのですが

「それにはもだ。こんなに危険で一大事の事を何故1人で抱えようとしたんだ？」

「そ、それは……」

説明する為にレイジングハートに頼んで今までの戦闘ログを兄様に見せたのは失敗だったかもしれません。いずれも軽傷とはいえ無傷ではなかつた戦い。

それ故に兄様の眼光はユーノに向いていたそれよりも厳しく感じます。

「まあ、大きなケガもなく済んでいたから良かつたものの、今日俺が居なかつたらどうなつてたか、それは一番なのは自身が良くわかつているだろ？」

「はい……」

あの時兄様が居なかつたら、きっと私は

「魔法という時点で、確かに他人に話すには眉唾ものと取られるだろ？が、俺達は家族だろ？」

「つーーー！」

「もつ少し、俺達の事を頼つてくれたって良いんだぞ？なのは」

兄様の言葉は嬉しく心を満たし、そして残酷に私の心を抉る。

本物の高町なのはではない、異物な存在である私を家族と言つてくれる嬉しさと、高町なのはへの罪悪感が私を蝕む。

「とりあえず、なのはが話すまで俺は黙つておくから、ちゃんと話せるようになつたら話すんだぞ？」

「はい……」

家族。甘美な言葉は私に温もりと痛みを『』える。

高町なのはではない、異物の私には享受する権利の無い言葉だ。私が高町なのはである事を証明するまでは

「クウ……」

「大丈夫ですよ、久遠」

心配そうに私を見る久遠に顔を埋める。

まだ4日でも、久遠は私の事を好いてくれていいのを感じます。

この世界がどの程度とらハに浸食されているか判りませんが、場合によつては久遠から祟りを打ち払うのを私がやらなければならぬかもしれない可能性もあります。

ある意味、私は久遠とアリスに依存しています。それは魔法少女リカルなのはにおいて、久遠もアリスも存在しない存在だからです。久遠はとらハキャラではありますが、それでもリリカルなのは色の強いこの世界で運命でなく偶然が紡いだ、『私』の絆だから。

アリスは言わずもがな、私が産み出した私だけのファミリア。

高町なのはでなく、私自身が私の力で紡いだ絆だから、必要な壁も作りずに懐を許してしまえるのです。

兄様が出て行つた作業部屋で、私はスケッチブックにペンを走らせる。

魔法と出逢つて、止まつていた作業が少し進ませる事が出来ました。何時か久遠と戦わなければならぬ可能性もあるかもしれない現状、ミッド式魔法だけでは、私は久遠に敗北するしかありません。

ミッド式もベルカ式も、理数系科学によつて行使される事象。私基準で言えば科学式で魔法を再現しているだけの物。

純粹な妖狐である久遠相手には、防御しても久遠自身の妖力や靈力効果を防ぐ事が出来ない。

私が久遠と戦つた時に電撃だけ通つたのがその証拠です。

レイジングハートの協力で、この世界にもエーテルがちゃんと存在している事が判りました。

あとはそれを使うだけの式が出来れば、魔導師殺しやAMF環境下でも普通に戦闘が可能でしょう。あとは私にどこまでブラー納が存在するのか、そこは戦闘民族一家高町家が末妹の身体スペック次第ですね。

翌日。

私は何時もより少し早起きをして、部屋の中でいつもの筋トレを始めます。

逆立ちして腕立て、腹筋、背筋、そして久遠を頭に乗せてのスクワット。

それが終わつた後は軽く汗を流して、道場の方に向かいます。

道場には既に兄様が素振りをしていました。

「おはようございます。兄様」

「おはようございます。昨日はべつすり寝られたか？」

「はい。お陰様で」

挨拶を交わし終えたところで、私は以前から気になっていた模造武器を見てまわる事にしました。

野太刀から小太刀、手裏剣や鋼糸、さらには槍からトンファーまで、さすがにハンマー系はありませんでしたが、それ以外の武具なら大抵はある様ですね。さすが総合殺人術御神流。小太刀が主軸でも場合によつては小太刀を振るえない状況も考慮されてでもいるのでしょうか。

私は薙刀とトンファーを取り出して手に握ってみます。

薙刀や槍はレイジングハートを振るう面では使える技術ですね。

薙刀を戻し、一本のトンファーを左手に持つ。

将来はコレに似た武器も扱うようになるかもしだれません。

高町なのはが御神流を習つていたら、魔王でなく冥王と呼ばれていたでしょうね。

その後、兄様と姉様はまた互いに打ち合い稽古

私は父様から御神流とはなにか?についてのレクチャーを受けました。

内容は私の知る物とあまり違ひはないのですが、ただ知つているのと、実際に耳に聞くのは重みが違います。将来のこともある為、私は御神流剣士になることは難しいでしょうが、勧めてくれた父様の

想いに応える為、私も本気で御神流に取り組む所存です。

レクチャーを終えた私は、まずは小太刀の握り方を学び、基本的な振るう型を教わります。

その型を御神流の初步の初步、御神流 斬と呼ぶ様です。

御神流のあらましは知つてはいましたが、細かな技はそこまで知らず、知つているのは神速くらいでしたから、新鮮な気分です。

土曜日である事も手伝い、今日は一日中御神流 斬の型の練習に注ぎ込みました。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

side・高町恭也

今日からなのはも御神流を習い始めた。

最初は初步の御神流 斬から。

しかし既に3回とは言えど内容の濃すぎる戦いと、何よりコーノによれば、なのはは足を止めて遠距離から砲撃を撃ち込む砲撃魔導師というカテゴリーの魔法使いだそうだが、実際のなのはの戦い方はその真逆の近接戦闘で零距離から大火力を直接撃ち込む戦闘スタイルを取つてゐる故か、午後の稽古ではぎこちなくとも既に御神流

斬を振るつていた。

打ち合いになればまだまだ未熟だが、これで神速を覚え、さらに魔法まで使われたらどうなるのか、少し楽しみだ。

父さんも久しぶりに人に教えていた所為か、生き生きしているしな。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

side・高町なのは

「ふう……」

お風呂に入つて今日一日の疲れを癒やします。

4年間、筋トレを欠かさなかつたお陰でしうが、今のところ筋肉痛とかはありません。持久力もなんとか保つようです。なにより楽しい。

強くなれること、地力の違う私は、努力をしなければ高町なのはにもフェイト・テスター・ロッサにも劣る存在。

未だに擬似的な三次元機動が限界の私では、空戦中心の無印やA・Sを生き残るのは並大抵の努力や自力の努力では越えられない壁が幾つもあります。

それを越える為の力が御神流。

大切なものを守る剣、御神流。

その志しからとは離れたここに使おうとする私には御神流を振るう資格などないのでしょうが、せめて今年だけは許して欲しい。

今年が終われば、無印やA・sも終わる。

だから今だけは

「なのは～！一緒に入ってもいいのか？」

父様の声で現実に呼び戻されます。

「ええ、構いませんよ」

「それじゃあ失礼するよ～」

腰にタオルを巻いて風呂場に入つて来た父様の身体は、私以上にハツキリと判る傷痕だらけです。

「なのはと風呂に入るのは久しぶりだなあ

「そうでしたね」

私の記憶では、最後に入つたのはこの私になる前の私の朧気な記憶の中で。

つまりは5年振りくらいでしうづか？

「それにしても、なのはは呑み込みが速いなあ。なのはには剣士の才能があるのかもしれないぞ？」

「剣士……ですか……？」

私が思うに剣士と言うよりも近接戦闘スタイルでしょうね、砲撃魔導師であるのに近接戦闘スタイルを主軸とする矛盾を孕む「プロセン」。

しかしその矛盾した戦法で、私は3度勝ちを取りにいきました。そして3度勝てた。

高町なのはでありながら高町なのはでない矛盾した異物の私が使う矛盾した戦闘スタイル。

ですが私にはこのスタイルでなければ勝つことすら出来ない劣化物。情けないことこの上ない。

「なのは、何か悩みもあるんじゃないかな？」

頭を洗つてもらいながら、父様に訊かれました。父様にはわかつてしまつて当然ですね。

「ええ。悩み事はあります。ですがこれは、私にしか……私自身が解決しなければならない事故、父様にも話せません」

「そつか。なのはも、大人になつて來たんだな」

大人……ですか。

果たして、そうでしょうか……。

私が大人であれば、兄様や父様に助力や助言を申し上げるべきでしょう。

ですが、それは出来ません。

ジュエルシード事件は、私の力で解決していかなくては。

私が高町なのはになる為にも

こんな子どものような意地を貫こうとしている私は、大人ではありませんよ。

第8話 切なる言葉（後書き）

一応ちよつとしたお説教で今回は終えて、兄様や父様からお言葉を

家族

我が家なのはことってはとても大切で、本家なのはの次に心の悩みです。

私も戦闘民族一家高町家に居候してみたい……。

第9話 わすらいのバウンティ・ハンター ナノハ・タカマチ !? (前書き)

軽く誤字を修正。

第9話 わすらいのバウンティ・ハンター ナノハ・タカマチ !?

side・高町なのは

日曜日になりました。

今日は父様は、自らオーナー兼コーチを務める翠屋JFCの試合の日故に、私の稽古はお休みです。変わりに道場の隅で御神流 斬の練習と魔力を使った新たな技法の編み出しつと、身体を流れる生命エネルギー、プラーナを引き出せないかを試行錯誤していました。

エーテルが存在するならばプラーナも存在するはず。

プラーナが引き出せなければ、せっかくの魔装機神体系の魔法造称『ラギアス式』魔法の研究が無駄になります。

ラギアスはラ・ギアスから取っているのは一目瞭然でしょう。

このラギアス式はミッド式を流用し、空間に存在するエーテルに対し、プラーナで介入し、魔術式で効果を引き出す物。

ミッド式から術式を流用している為、ミッド式やベルカ式の防御魔法で防御出来ますが、最大の違いは対AMF環境下でも運用に支障がないところでしょう。

なにせAMFは魔力結合を阻害する物であり、ミッド式やベルカ式に使われている魔力素はエーテルと別物の上にトリガーは生命エネルギーのプラーナ。AMF効果の対象外ですから。

ただ、プラーナがなければ魔装機を動かせないと同じで、プラーナがなければラギアス式も無意味ということでしょう。プラーナを使う関係上、レイジングハートのようにデバイスがオートで魔法を使つといつとも出来ません。使える者と使えない者が分かれてしまつのは、ミッド式やベルカ式と変わりはありません。

自主稽古を終えたあとは、姉様と汗を流してから出掛ける用意をします。

服装は黒のインナーに黒の長袖シャツ、下は黒色のスラックス、黒のオーバーコート、赤のマフラー、黒のテンガロンハット
どこのエンドレス・フロンティアのさすらいのバウンティハンターミたいな格好が私の外出着です。

ちなみにテンガロンハットこのなのはの身体になつてから被り始めましたが、それ以外は転生前も着ていた服装故に、これが私の私服と胸を張つて言えます。

ちなみにバリアジャケット設定時も今のところかなり詰みました。

閑話休題。

「おはようなのはちゃん!」

「おはようなのはーつて、またアンタそんな服装を……」

「グッドモーニング、キューイー・プリンセス。良き朝ですね」

ちなみにこの身体になつてテンガロンハットを被つてから、ハーフン言葉を使ってみてたりします。

だってカツコイいんすもん。それにこの良き姿だから許される厨二病キャラ作りとか、やらなくては損ですよ？

「アンタ、少しひらこ女の子らしくオシャレとかしようとは思わないの？」

「私はカツコイいから良いと思つんだけじなー」

「すずか！良いのー！」のままなのはが男の子になつちやつてもー！」

「そ、それは…………良い…かな？」

「なんで顔朱くすんのよー…………ま、まあ、それはそれであたしも

……」

すずか、何を想像して顔を朱くしているのですか？

それとアリサ、怒つて朱いのかすずかと同じ意味で朱いのかわかりません。

「OK、フェイスレッドガールズ。そろそろ行かないと試合に遅れますよ？」

「わ、わかつてゐわよ！行くわよなのは！すずか！」

「うん。行こつかなのはちゃん。アリサちゃん」

「OK、行きましょう」

私を真ん中にして、左右にアリサとすずかが並んで歩いて行きます。

ちなみに2人とも手荷物有りですが、私は手荷物無し。しかし「一トでわかりませんが、後ろ腰に小太刀の木刀が挿してあります。謹身用です。

あと半分趣味で造つた炸裂火薬打ち出し電動式超合金工アガソ『ナイトファウル』と火薬加速式超合金工アガソ『ロングトゥーム・スペシャル』を一丁ずつ。威力は人体に撃つと結構痛いですが、少し赤くなるくらいしかありません。まあ、眼に当てる怖いですが。

軽く銃刀法違反してますね。まあ、バレなければ良いでしょう。

河川敷にあるサッカーフィールドまでくれば、サッカーユニフォームを着た男の子達が軽くアップを始めていました。

5月は時々軽く寒かつたりしますから、少し羨ましいですね。私は低体温で寒いの嫌いですから。厚着しても寒いんですよね。

「なのは、アンタ大丈夫？」

「さ、寒いのかな？なのはちゃん？」

「ズズ……大丈夫です。ちょっと寒いですが……」

ひょう……と、河川敷特有の冷たい風が頬を撫でゆく。

「クシユツ」

「ちよ、なのは！？」

「か、カゼひいてないよね？なのはちゃん！？」

「大丈夫です。」心配なく

しかしクソ寒いですね、5月の河川敷。

「少し身体を温めて来ますね」

「え、ちよ、なのは？」

「な、なのはちゃん？どこ行くの？」

「直ぐそこですよ」

土手を降りて父様の隣りへ行きます。

「父様、おはよひ」「やれこまく」

「お？ 来たかのは。アリサちゃんとすずかちゃんも一緒か？」

「ええ。土手の方に」

危なつかしく土手をゆっくりと降りてくるアリサとすずかを一度振り返つてから父様に向き直ります。

「少し端で身体を温めできます」

「ん？ ああ、気をつけてな

「わかりました」

てくてくと歩いて、コートの端側、子ども達の少ない方へ行きます。

しかもなんかひよひよ良いく間に切り株も発見。ふむ、やってみましょつか。

まずは後ろ腰から木刀を抜き、抜きと入りと突きから御神流 斬へ繋げます。

切り株には僅かに線が入る。

それを5回繰り返してから、木刀を戻してナイトファウルを右手に持ちます。私は左利きですが、転生前は右利き故、実質両利きです。

「OK、ショウタイムです」

切り株に向き、帽子を押さえて宣言します。

「リッパー！ハチの巣です。OK、ラストです！グッドナイト！」

リッパーの斬撃に射撃を織り交ぜて、最後にステーキを撃ち込むテキサス・ホールデム。

まあ、弾はBB弾ですし電動マシンガンですからそこまで威力は無く、弾は弾かれます。しかしリッパーとステーキは頑丈、ステーキは炸裂火薬で実際に撃ち出している為、切り株には斬痕と穴が残ります。

暇にかまけて習得したハーケン・ブロウニングの技の数々。まあ、忘年会新年会隠し芸大会ネタに覚えてみたのですが、完成度は私が納得するまで練習した所為か、完璧です。

「ハイロー・ドロー！私の曲撃ちと早撃ち、たっぷりご覧あれ！」

ナイトファウルを真上に投げ、ロングトゥームで撃ちつつ落ちてきたリッパーが回転しながら切り株に斬痕を残す。

ロングトゥームの弾を変えながらナイトファウルを回収。

「フル・ハウス！撃ちます！斬ります！ここが勝負どころです！私の捌きもなかなかでしちつ？」

ナイトファウルを片手で器用に回転させ、リッパー攻撃とマシンガン攻撃の乱舞をお見舞いする。

「7連ステークです！せい！やー7発目ー！」

ナイトファウルのステークを1発上向きに撃ち、そこから身体を回転させて2発連続で上向きに撃ち、水平に1発、切り株に背を向けて脇の下からナイトファウルを出して1発撃ち、身体を向き直らせてラストの一撃。

「これでショウダウンです。私に惚れないで下さいね？」

決めセリフを言いながら帽子の鍔を拳銃に見立てた左手の人差し指を下から押すように添える。

フツ、完璧に決まりましたね。

気分も体温も良い具合に高揚しています。

ちなみにファイヤー・マウスとベスト・フラッシュショットム・ホールデム以外は出来ます。しかしこの服装時限定で、ハーケンになりきらないと出来ないんですけど。なりきりダンジョン?

パシンッ!!

「痛いですよ、アリサ」

何故かハリセンを持つて顔を朱くしているアリサ。

「あ、アンタ! それ本物じゃないでしょうねー? てか、私に惚れないでってなんなのよ! ? なにがしたいのよ! ? 曲芸師にでもなりたいの! ? てゆーかおもいつきし田立つてるわよー! ! 」

「なのはちゃん、カツコイー……」

ツツ「!!」ですアリサ、アナタならハ神はやでと全国行けますよ。

そしてすずか、練習すればあなたにも出来ますよ?

「ほんとー? 教えてなのはちゃん! 」

「やめ……」

すずかは雰囲^{ムカイ}的に、てか名前的に錫華姫でも

「OK、ハブリワーン。とつあえず静観静聴に感謝します」

帽子に手を乗せながら会釈。

ハーケンはカツ「良くキザにキメるんですよ。

まあ、試合前の余興として重畠でしょうね。

「（凄いななのは、あんな曲芸染みた技、どうで覚えて来たんだ？）

「（なのはも別べクトルで軽く非常識だと僕は思つたんだがなあ……）

なのはの曲芸撃ちにそんな感想を抱く父とフォレット少年だった。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

試合は終わって昼食は祝杯も兼ねて喫茶翠屋で。

私もアリサとすずかと一緒に、翠屋の屋外テーブルで茶会を楽しんでいました。

「試合凄かったね。すずか」

「うん。私、胸がどきどきしちゃったよ」

未だに興奮冴えやまない2人を見つつ、私はナイトファウルとロンゴトウーム・スペシャルの手入れをしつつ、コーヒーを口に含みます。味は砂糖ゼロで牛乳4割の高町なのはスペシャル。一杯100円也

「でもなのはちやんの曲芸もカッコ良かつたよー!」

「アンタあんなのじりで覚えてくんのよ……？」

「禁則事項です」

人差し指を唇にあてがいながらウインクで返答します。さすらいのバウンティハンターは多くを語らないのですよ。

「アリサちゃん、すずかちゃん。今日は応援に来てくれてありがとうございます。楽しんでくれたかな?」

店から父様が出てきました。サッカーチームは解散したようですね。

今は喫茶翠屋の店長の時間の為、父様はエプロン姿です。

わざとまでは翠屋のロゴの「チ」だった為にジャージ姿。家に帰れば兄様や姉様の鍛錬の為胴着。何も用事が無いときは私服と。

家で一番衣服が口口口口変わる人物でしょう、父様は。

そして意外にも変わらないのは母様でしょうか?専業主婦だからでしょつか……。

「今日はお誘いしてくれて、とても楽しかったです」

「試合、とってもカッコ良かったです。なのはなちゃんも

「パパもびっくりだよ。こつの間につけ」

「子どもは毎日向日日々成長するものですよ、父様」

「はは、違いない」

父様の笑い声を聞きながら、残ったコーヒーを飲み干します。

何故かやはりこの格好になると味覚が大人に戻るんですね。

憑かれてこる？呪いの品ですか？

たかまちなのはのろわれた。

なんにてロップとが出ませんよな？

「それでは私達は今日まじの辺でお暇します

「おや、お出掛けかい？」

「はい。お姉ちゃんとお出掛けな

「私はお父さんとショッピングです」

「もうだったのですか、近くまで送りましょつか？」

「ううん。迎えに来て貰うから

「あたしもよ」

「もうですか、明日お話しを聞かせて下さる

「うるー」

「こころわよ」

そして私達も解散しました。

「なのはは、これからどうするんだ?」

「わうですね。せつかくの日曜日ですし、久しぶりにウインドウショッピングに行つてきます」

行き先は家電量販店やジャンク用品店が中心ですが。

「そつか、気をつけて行つてらつしゃい」

「はい。では行つてきます」

ユーノを肩に乗せて私も街へ向かいます。

「ユーノ、一度家に行つて久遠を連れて来て下さい」

《え?別にいいけど、久遠を迎えに行つてからでも》

「意外と重いんですよ、この格好」

《あー、うん。わかつたよ》

肩から離れるユーノを見えなくなるなるまで見送ります。

「さて、家電、パーツ、材料が私を待っています」

私は胸を踊らせつつ、しかしクールに歩を進ませ始めました。

しかし、後の私はこの時の選択を、一生涯並みに後悔するのでした

第9話 むすりのバウンティ・ハンター ナノハ・タカマチ !? (後書き)

ほとんど暴走ネタです。

嵐の前のオチャラケとも言いますが

整った容姿だからこそ許されることがありますよね?

ハーケンと零児のやりとりが好きです。

第10話 哀哭するは星光の心 - It screams to pathos

またまた誤字修正になります。期待させて「めんなさい。

side・高町なのは

「久々して出掛けるのは、久しぶりのよつた感じがしますね」

『Well. Because this one week was these very deep days. (そうですね。)この一週間は、とても濃い毎日でしたからね』

受け答えたのはアリス。

今私達はあの海岸へ来ていました。

私の泣き場にして、私が私を始め、私が高町なのはを田指し始めた場所。

「たつた3度ですが、私はあの時から強くなっているとは思っています

でなければ鴉の暴走体にも苦戦していたことでしょう。

上手く立ち回れるよつたなった。

でも高町なのはには程遠い。

近接高機動戦闘型砲撃魔導師

私が使う異端で矛盾の戦闘スタイル。

御神流

守る為の剣。

高町なのは

私であり、私でない。

不屈の心と正義感に溢れる心優しき魔法少女。

『高町なのは』

高町なのはではなく、高町なのはである私。

沢山の友人を得て、家族に囲まれて、将来は魔法使いの男の子と敵対しながらも恋をする乙女に

将来は友人に囲まれながら様々な期待と希望を背に、娘を育てる良き母親に

そんな未来を奪い、居場所を奪い、身体を奪い

高町なのはに成り代わる存在の私。

私が『理』を真似るのは、本当の本当は、高町なのはへの罪悪感を少しでも誤魔化して減らす為

私は星屑。

私は居てはいけない存在。

この世界で生きている権利すらないばずの存在。

この世界にどうしては異物の存在。

そんな世界に逆らって、もがき足搔いて、方法すらわからぬのに自分が高町なのはである事を証明するのだと言つて、世界と意地を天秤に掛ける最低のうつけ者。

こんな私、何度も消えてしまえと思つた事は数知らず。

本物の高町なのはが私を消し去ってくれるだろつと思い続け星霜を経る。

でも

「（消えたくない。消えたいのに……消えたくないー）」

5年だ。

たつた5年。

私にとつては人生の1／6の時間。

たつたそれだけの時間で、世界は残酷にもしかし温かく私を縛り付ける。

父様、母様、兄様、姉様、アリス、レイジングハート、アリサ、すずか、久遠、そしてユーノ。

私の運命と偶然が紡いだ絆。

運命は必然

偶然も必然

宿命も必然

世の中は必然で出来ているらしい。

なら、私の存在は何だ？

必然？

そんなバカなはずがない。

次元断層に巻き込まれて死んだのを、閣下の温情でこの世界に生まれ変わったにすぎない。

異物に必然など　あらはづはない！

「世界は、私は、こんなはずでは、無かつたのでしょうかね……」

『Meister・(マイスター)』

唯一なのはの歪んだ内面を知るアリスは、自分の無力感を嘆いた。

スケッチブックに宿る不完全なデバイス、なのはの使い魔。自分の存在がマイスターたるなのはに負担を掛けている。

消えてしまいたいと、この一週間何度も思った。だがマイスターの心の弱さを正しく理解しているアリスには、消えることすら出来ない。

なのははアリスに依存している。

それはアリスがファミリアだから、もう1人の自分であり、自分を支えてくれる存在だからだ。

今アリスが消えれば、なのはの心は壊れて碎け散るだろう。

世界の運命と、なのはの存在意義の掛かっているこの戦いには、負けは許されない。落ち込んでいても、折れることは許されない。

そんな現状が、なのはとアリスを追い詰めていた

「つー!？」

『Meister・(マイスター)』

『JewelSeed is Awakening.（ジュエルシードの発動を確認！）』

魔力波を感じた方向 街中から強力な魔力を感じ、巨大な巨木が生えていった。

ガスツ！！

「なんたる失態ですか！！」

コンクリートに拳を叩きつけ、私は巨木を見みながら思い出した。

「今日」の日、ジュエルシード最大級の被害が起「」ってしまったことを……。

「レイジングハート！」

『Stand by Ready!』

我、使命を受けし者成り

契約のもと、その力を解き放て

風は空に 星は天に そして不屈の心は「」の胸に

「」の手に魔導を

「レイジングハート、セットアップ！！」

『Stand by Ready. Setup!』

変形したレイジングハートを握り締め、バリアジャケットが形成される。

『Hover Feather! Blitz Action!』

「くつ！」

初速無しで一気に瞬間最大速度で、私は街に向かつて駆け抜ける！

木の根を撃ち落としながらとにかく中心へ向かうのですが

『Next! intercept coming at 3 o'clock, 11 o'clock, 6 o'clock!
(次！3時方向、11時方向、6時方向、迎撃が来ます！)』

「全力で撃ち落としますよ！デイバインランサー！！」

『Devine Lancer! Standby!』

「ファイアー！」

8つのスフィアから“ディバインランサー”を撃つ。

“ディバインランサー”は直射魔法故に、自分がトロンベよりしく回転しながら木の根を撃ち落とし、先へ。

木の根の外輪部に着いてからまるで私の侵入を拒むように、木の根やつるのムチ、はっぱカッターやリーフブレードなどなどが襲いかかってきます。

幸いにも葉っぱやつるは強度がそのままのようで、ナイトファウルのリッパーで斬り裂き、木の根は“ディバインランサー”やショートバラットで撃ち落としている為、そこまでの消耗が無いのが助かります。

まさかネタレプリカ武器と忘年会新年会隠し芸大会用に身につけた技がこうして実戦で使う口が来ようだなんて思いもしませんでしたよ。

左手にレイジングハート、右手にナイトファウルを握つて、私は街中をひた駆けます。

途中で巻き込まれて逃げ遅れたり、退路を塞がれた人の救助なりもしているので、進行スピードは遅いですが、気づいて然るべき私が気づけず、被害を広げてしまつた私が出来る償いは、これしかありません。

ちなみに顔はテンガロンハットを眼深に被つて、出来るだけ顔は晒さないように努めています。

しかし妙です。

ジュエルシードの暴走体は、私には襲いかかりはしますが、一般人は発動に巻き込んだくらいで、あとは攻撃を受けている様子はありません。

魔法が使えるか否かの違いからくるのか、それとも明確な敵意に反応しているのか判断に迷いますが、今は限りなく迅速な対応が急務です。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

side：アリサ・バーニングス

あたしは今、親友のすずかとジャングルの中に居た。

別に誘拐されたりとか、どこでもドアとか、テレポートとかを使つたわけじゃない。非常識だけど、あつという間に街がジャングルになつてしまつただけだ。

「ア、アリサちゃん……」

もともと優しくて、言い換えると自己主張の激しくないすずかは、あたしの背中にくつづいて震えてる。

あたしも脚が笑ってる。

でもあたしが少しでも不安を見せたらすずかは泣き出しちゃうかも
しない。

あたしだって怖いけど、そんなのイヤ。

すずかを泣かせる位なら、あたしが少し我慢すれば良いだけ。

「大丈夫よすずか、きっと助けが来るから」

「で、でも……」

怖がつてているすずかの手を握る。

少し痛い位に握り返されたけれど、顔には出さない。

これでもバーニングスの跡取り娘なのよ！

ふ、普段は恥ずかしかつたりして出来ないけど、今この非常識な状況だから出来る。

ポーカーフェース

「私に惚れないで下さいね？」

な、なんでこんな時になのはが出てくんのよ！？

し、しし、しかもなんか、なんで胸がドキドキするのよー??

だあんもうーー今そんな場合じやないってのにいーーー

「ア、アリサ… ちゃん？」

「な、何でも無いわよ……」「

なのは……あんたは無事でしょ？

side: 高町なのは

「シノーラ...」

シユートバレットを拳の前に展開して、進行を妨げる太い根を打ち碎く。

「まだ見つかりませんか……」

エリアサーチをかけながら探してはいますが、私はそこまでマルチタクスにリソースが割けないというか、あつちこつちで頭を働かすという考え方が未だに馴染まず、エリアサーチはレイジングハート任せ、レイジングハートがエリアサーチにリソースをかけている分、今は私が単体で放てるショートバレットとナイトファウルでの戦闘を行っています。

『Master』（マスター）

「見つけましたか！？」

『Please see this, although Jew
el Seed is not found yet.（ジュエル
シードはまだ見つかりませんが、これを見て下せい）』

戦闘の邪魔にならないように表示されたモニターには、半ばジャン
グルと化した街を歩くアリサとすずか。

血が出る程に唇を噛み締め、レイジングハートとナイトファウルが
震える程、手が白くなる程握り締める。

やつぱり私には高町なのはあるところが、2人の友達といつ立場
すら許されるべきでは無かつた……！

私に関わってしまったばかりに、こんなことに巻き込んでしまつ

た
！

『Master! Jewel seed was discovered!
They are those with a rare
action immediately to the method
of side of a friend! (マスター！ジュエル
シードを発見しました！友人の方のすぐ傍に反応有り！)』

「ホバーフェザー推力全開！！ブリツツアクション！！」

一気に高機動に移行した所為か、再び暴走体の迎撃が再開。その勢いは真っ直ぐ本体に向かっている所為か、先ほどとは比べ物にならない。

「邪魔を

つるのムチ、はっぱカツター、リーフブレードを斬り裂きハチの巣にステークで撃ち抜き、遠方はディバインランサーで迎撃。

何時もの自分すら忘れて、以前の自分が表に出て来る程、私は周りも見ずく一直線に突き抜けて行く！

アリサもすずかも、高町なのはの運命によつて出逢うのは必然だつたかもしない。でも

「私が紡いだ3年間は、運命だ必然だなんて言わせない！！」

正面から迫る鋭いつるのムチをグレイズで回避しながらロッパーで斬り裂く！

「アリサもすずかも　」

四方からぐるはつぱカッターをナイトファウルでハチの巣に撃ち墜とす！

「傷つけさせはしないっ！！」

視界の先に捉えたアリサとすずか。

本体に近寄り過ぎた所為か、2人を追い払うよつにはつぱカッターが集まり魔力を宿し、リーフブレードに変わる。

「どんな魔法だろうと！…ただ　」

レイジングハートを握る拳の先に環状魔法陣が展開。ブリッツアクションを連続で使い、2人の前に立ちふさがつてリーフブレードに拳を打ちつける！

「撃ち貫くのみ！！ディバインツ、バスター——！——！」

私の十八番、零距離ディバインバスターはリーフブレードを撃ち砕き、そのまま生い茂るジャングルに風穴を開けて消えた。

「な、なのは……」

「なのは……ちゃん……？」

兄様に続けてこんな早期に友人にも正体がバレる魔法少女も稀でしょうね。

ディバインバスターを撃つた所為か、私に向けて木の根、つるのムチ、はっぱカッター、リーフブレード、さらには私の放ったのを口ピートされたのか、シユートバレットまでが殺到する。

防御も回避も無理と即座に判断した私は、アリサとすずかを守るよう抱きしめ、2人の衣服に干渉、イメージし易い私立聖祥大附属小学校の制服姿のバリアジャケットに再構成、有りつ丈の魔力を防御にまわす。

バリアと暴走体の攻撃が殺到してぶつかつて弾ける音に炸裂音。

永遠にも、刹那にも感じる一時

Meister (マイスター)

背中に感じる熱と途切れ途切れの弱々しい、レイジングハートとは違ひ電子音。

背中を振り返れば、突き刺さつている木の根が見えるだけでは3本。内どれか1本が貫通していて、お腹が痛くなつてそれから熱くなつて

でも私のことなんてどうだつて良い……。

『I s... i... t s a f e...? (ジ... リ... テ... サ... フ... エ... ?)』

私の背中にはいつも

「ア...リ...ス...? こふつ」

口に広がる鉄臭い味。

それから「ひどい」でも良一……。

『I...t...w...a...s...g...o...o...d...M...y...d...a...r...l...i...n...g
...m...e...i...s...t...e...r...（良かつたです。愛しい私の
の...マイスター...）』

「アリ...ス...?ア...リス...?」

『.....』

「...ふわ...け...ツ」ふつ、て...ない...で、返...事...して
下さい...よ...」

私の中で何ががキレ、何がが砕け散る音がした。

シューートバレットで私に刺さる木の根を寸断する。

背中やお腹の痛みも熱さも感じない。ただ感じるのは

言こと表すことの出来ない程の喪失感。そして怒りと憎悪

レイジングハートがカタカタと揺れる。

手に爪が食い込んで血を流す。

それは心を支配する感情によって涙を流す余裕のない私から溢れ出した涙だった。

魔力がすっからかんで笑う膝に喝を入れて大地を踏みしめる。

「なの……は……そ……れ……」

「な……のは、ちゃ、せ、せな、か……」

友人の声すら遠く感じるのは血の流しすぎか、それとも心の余裕の無さか、いや、そんのもうどっちでも良い。

背中に刺さる木の根を煩つたしく思いながら背中からバックを下ろす。

血濡れの私立聖祥大附属小学校のバック。

その中には穴の空いてしまったスケッチブック。

それを込められるだけの魔力を込めて抱き締める。

半分がデバイスならリカバリーも効くかもしれない。

心の底から想いを込めて祈つた。

スケッチブックが淡い桜色に光つて、損失を回復させる。

スケッチブックをバックの上に重ね、それをアリサとすずかの前に置く。

私は”3人”を背にして、ジュエルシードの暴走体の本体を見据え

る。

「レイジングハート……カノンモードへ」

『Mode change. canon mode.』

これほどまでに何かを憎んだ事があるだろうか

これほどまでに何かを消してしまいたいと思ったことがあるだろうか

展開されるホバーフェザー、残った魔力は少ない。デイバインバス
ターもあと一発。これじゃあ届かない。

「レイジングハート……フルドライブ」

『I am sorry. It is a master which is not made. Then, the body of a master does not maintain. There is even a crisis of a life function!（すみません。それは出来ません
マスター。それではマスターの身体が保ちません。生命機能の危機
さえあります！）』

「構いません。私は それで構いません」

『I care about! Master. Reexamination of a command!（私が構います！マスター。命令の再検討を…）』

「早くして下さい。私が理性と意識を保ててている内に……」

『Yes... Master...』

貴女には、無理を聞いて貰つてばかりですね。

こんな我が儘で行き当たりばつ当たりのマスターで、貴女も呆れいることでしょう。

カノンモードのフレームから一対の桜色の翼が生える。

「堪忍袋の尾が切れました……」

レイジングハートを構え、カノンモードの砲口を暴走体の本体。男の子と女の子の、2人を守るようにバリアを張つて滞空するジュエルシードへ向ける。

「フルブースト…ブリッジアクション…！」

『All right. Full boost. Blitz Action.』

「う、なのせー！」

「なのはちゃんー！」

「はあああああああ——！——！——！——！」

一気にトップスピードに加速。空気の壁すら突き抜けるような速度で、ジュエルシードのバリアに砲口を突き刺す！！

「レイジングハート！！ もっと推力を！！」

It is useless!! More than this is useless!! Absolutely useful less!! (ダメです!! これ以上はダメ!! 絶対にダメ!!)『

初めて聞いたレイジングハートの感情的な声。

電子音でも伝わる気持ち。

でも私は

「オーバーブーストッ!!」

自分で術式を組み、無理やりに推力を上げる！

飛び散る魔力を集めて更に推力に転化する。

血が溢れゆく、眼が霞む、手から力が抜ける。でも――

「もつと強く――もつと速く――もつと熱く――」

カノンモードの砲口へ魔力を集中的に込め、魔力刃を形成する。魔力刃とバリアは火花とスパークを散らして凌ぎあう！

単純な出力勝負。出力が負けている私にはバリアを破る力が

「ツ、ディバインツ、バスターアアアアツ――！」

零距離ディバインバスター。いつも、何度も、私に立ちふさがる脅威を撃ち抜いてきた一撃必殺の一撃。

「ブレイクツ、シュ――トツ――！」

この一撃の前に、撃ち抜けないものはない――

閃光と爆碎音に視界と耳を奪われる。でも手応えが消えない――

「あああああ――――――――――」

雀の涙程度でも更に魔力を込める。撃ち貫く意志を…想いを…すべて…

「撃ち貫けええええ――――――――――」

更に強烈な閃光と爆碎音、それに生じた爆風を受け、ホバーフェザーが四散した事によつて前進するどころかその場に留まる浮力すら失つてしまつた所為で爆風には耐えられず、私は後方へと吹き飛ばされてしまつた。

地面に叩きつけられ、錐揉みしながら地面を転がつて、建物の外壁にぶつかつて、ようやく止まることが出来た。

「うひ、つぐ、あぐ」

私の死力を尽くした一撃

でも、その一撃すら

届かなかつた

「なのは…！」

「クウ————！」

ユーノ、久遠……。

「なのは……しつかりして……なのは……！」

「ク——！——ク——！——！」

「こふつ、大丈夫……です……」

レイジングハートは手放さなかつた。

まだ私は戦える！

でも

手元に握るレイジングハートを見る。

カノンモードのフレームどころか、本体フレームにも亀裂が入つて
いる。

レイジングハートの本体には傷がないのが不幸中の幸いですね。

「レイ……ジン……グ、ハート……」

私の声に応えるように、ニアが点滅するレイジングハート。

私は死にかけの虫の息。

レイジングハートもボロボロ。

死力を出し廻しても破れないバリア。

それでも…

「まだ……たたか、ゲホッゲホッ、じぽつ、つはーくつ、まだ…！
私達は戦えます！そうでしょうー？レイジングハート…！」

『That's right! (その通りですー！)』

もう魔力は空っぽで、身体を支えているのは怒りと憎悪と、燃え滾り衰えることのない闘志。負けたくないといつ強き想い…。

「あれ…を、貫く…には…」

零距離ディバインバスターで無理なら、次は

「レイジングハート、周囲に散った魔力素、すべて集めて下さい…！一撃で良い、最後の一撃を叩き込む、撃ち貫く力を私に…！」

『All right. My master!』

魔力素を集めることで、再びホバーフェザーを展開。

胸がかつて無い程に苦しくなる。でもそんなの関係はない。もう一度、もう一撃加えて、そして帰ろう

「帰る……か…」

私にとって、高町家は、その権利がなくとも、もう帰る場所に認定してしまっているらしい。

亀裂の入った砲口に魔力が集まっていく。

高町なのはの切り札 スターライトブレイカー。

模造、贋作と言えども、最強の使徒すら下した零距離スターライトブレイカーでならば、あのバリアだつて破れるはず！

脈打つ鼓動、魔力素を集めることで、はっぱカッター やリーフブレードをコントロールし構成する術式の魔力すら強引に集めて力にする。

相手との距離とスタートライトブレイカーのチャージ時故に出来る今

回限りの荒技です。

「 チューンバインドーーー！」

ユーノがバインドで私に迫る木の根とつるのムチを絡め捕る。

ユーノにも世話になつぱなしですね。

今夜は少し豪華な物にしまじょつか

私が、生きていたらの話ですが

第10話 哀哭するは星光の心 - It screams to pathos

実際あんな巨木を相手にあんな呆氣なく終わるのはリリカルだから許されるものだと私は思っています。

巨木でこれならマジでファイトと戦つたら我が家なのは死ぬんと違うか？

意見・感想お待ちしております。

第11話 撃ち貫け！－星光の槍杭－そうくい－（前書き）

最新修正版です。英語力が欲しい……

第11話 撃ち貫け！！星光の槍杭 - そうくい -

side：高町なのは

血の流しすぎで眼がチカチカしてきました。

身体はガタガタ、脚も立っていないのでやうとの程。

そしてやはり今回の暴走体は、明確な敵意とある程度の脅威に対し
て自動迎撃するタイプのようです。

גַּם־בְּשִׁבְעָה

「耐えて下さいゴーノ！あと少しです！」「

わ、わかった！！

スター・ライト・ブレイカーのチャージで無防備の私を、ユーノが全力で守ってくれています。

暴走体は木の根でユーノのバリアを破ろうとしますが、ディフェンスとサポートに特化するユーノのバリアは私の物より数段硬く、暴走体の攻撃をすべて防いでいます。

ター。私に提案があります)』

「提案?」

『Yes. Therefore, please give me time to a slight degree. (はい。その為にもう少し私に時間を下さー)』

「ユーノ!」

「聞こえてたよ! レイジングハート! どれだけ保たせれば良いの! ?」

『If it gets for 60 seconds... (60秒頂ければ...)』

レイジングハートの言葉に私はユーノを見る。

ユーノは頷いた。

「お願いします。レイジングハート」

『Thank you. (ありがとうございます)』

魔力素のチャージは続行されましたが、ホバーフェザーは私の脚に負担がかからない程度の高さの浮力を保つて小さくなる。脚のホバ

ーフェザーに関しては完全消失しました。

レイジングハートも頑張っているのです。私も

「ホバーフェザー解除。ショートバレット！」

向かってくる暴走体のショートバレットをショートバレットで相殺する。

「なのは無茶しないで…」こは僕が

「ユーノとレイジングハートが頑張っているんです。私にも意地があります！」

そこまで一度に数は撃てませんが、基本魔法であるショートバレットなら、私の演算能力でも負担がほぼないレイジングハートと同レベルのショートバレットを撃つことくらいは出来ます！

「「つ！」

急な魔力の高まりを感じて、その方向 ジュエルシードの暴走体を見る。

单なる木であつた暴走体。

しかし表面がボコボコと気泡のように波立つと、そのカタチを少しずつ変えて行つた。

全身に角を生やし、上部に青紫の鎧を纏い、頭部は赤く、緑色の双眼が光る。その首元にはジュエルシードを取り込んで青くなつた結晶体。

ムチの様な鳶が不気味に生え動く腕。巨大な爪で武装し、掌には赤い結晶体がある腕。の2本の腕を生やすその姿はまるで人間の上半身。

「変身した！？」「に来て！？」

「くつ、魔法と言つより外道に過ぎますよー・ジュエルシードーー！」

大木だつたジュエルシードの暴走体は、その姿をアインストレジセイアへと変えたのだった。

アインストレジセイアへとカタチを変えた暴走体は、その胸部から砲撃クラスのエネルギー波を放つてきた。

「くつ……や、やらいせるもんかあああつ……」

「エアルトゥング……懐かしい技を……」

ユーノのバリアを後ろから補助しながら私は咳く。

こつちに来てCOMPACTやIMPACTはやつてしませんからね。しかし私はAINSTORAGEを全くイメージしてないとこりを考えると、あの少年がどつちかをやつているのか偶然か

とにかくAINSTORAGEであることを喜びましょうか。『シユテルン』だつたら今まで私達は終わつていきましたよ。

『I kept you waiting . Master . (お待たせしました。マスター)』

「お疲れ様でしたユーノ。あとは私達で受け持ちます。貴方は私の友人を護つて下さい」

「う、うん。気をつけてね、なのは」

最早ボロボロで何に気をつけるかわからませんが、私は頷いて暴走体を見据えます。

ある意味あの巨木よりかは知り尽くしている相手故に、今も何通りかの対策は考えついていますが

「レイジングハート、お願ひします」

『A11 right! Energy absorption .

Recovery start. (オーライ! 魔力吸收。リカバリー開始)『

レイジングハートは集めた魔力を吸収し、機体の損傷を修復させた。その過程の恩恵か否か、私の背中やお腹を貫いていた木の根は分解され、ケガも治っていきます。

『 Recovery complete . Condition green! 』

復活するレイジングハート。

私のケガも治るばかりか、バリアジャケットは修復され、空っぽだった魔力は一気に回復し、収めきれない、120%以上の魔力が外に溢れ出る程、私の身体は魔力に溢れかえる。

『 Renewal of mode data . Mode change! Lancer mode! (モードデータ更新。モードチェンジーランサーモード!) 』

「ランサーモード。」

聞き覚えのないモードにオウム返しに呟いた私は

桜色に包まれたレイジングハートはその姿を変える。

カノンモードの倍はある縱幅。

デザインはカノンモードのフレームのままだが、先端部が延長して砲口が閉じる。

それは正に、どこかで見たような至近感を感じる大型の突撃槍・ランス・だつた。

その全体の長さは私の身体の1・5倍くらいでしうつか？

石突にはカノンモード時のメインフレームのミニチュアが後ろ向きに備わっています。しかもそのミニチュアメインフレームの廃熱機構は後ろ向きであり、そこからは魔力素が溢れ出している。

私はランサー・モードのスペックデータを確認して、口元に弧を描きます。

「レイジングハート、貴女は最高のデバイスですよ」

『It seemed that I had you please sed・My master・(気に入つてもらえた様で良かつたです。マイマスター)』

「レイジングハート……」

私は感謝の意を込めてレイジングハートを抱き締めたいですが、その前にやらなければならぬ事があります。

「征きましょ、レイジングハート。打と意地をもつて、あのバリアを撃ち抜く為に！」

『Yes. It is only our merely shooting and piercing! (はい。私達はただ撃ち貫くのみです！)』

レイジングハートの石突のミニチュアメインフレームの廃熱機構がスライドし、魔力素を放出する。

それは廃熱機構ではなく推進機構。エーテルスラスターや機動兵器のバーニアを参考に造られた魔力素を推進剤にするバーニア。

レイジングハートを正しく槍を持つ様に、左手は柄の前方、柄と一緒に内蔵されたトリガーユニットを握り締め、人差し指はトリガーに掛ける。右手は後ろに添えて握る。

石突から放たれる魔力素が強くなる。

フレームの側面からも内蔵式魔力素スラスターが現れ、強烈な勢いで魔力素を噴出する。ホバーフェザーを展開して、準備は整った。

「レイジングハート！」

『All right! Stern Acceleration. Full boost! Devine breaker!』

地を蹴った瞬間。かつて無いスピードで私達は加速した！

ランサー・突撃槍・モード

文字通り突撃することだけを追い求めた形態。

あらゆる移動魔法をぶつちぎる速さを実現するのは、フレーム内蔵式と石突のバーニアコニットと、ミニチュアメインフレーム。スラスター・コニットは言わずもがなだが、ミニチュアメインフレームから指向性の魔力素を収束放出することにより大出力推進力を得る。その為の魔法が、レイジングハートが新たに組んだ魔法『シユテルンアクセラレーション』である。

発動速度もトップクラスであるが、なによりその燃費の良さだ。魔力ランクCでも普通に攻撃魔法を使用しながらも戦闘に支障がない程の燃費である。

しかしあまりの大出力推進力と直進突撃しか考慮されておらず、使い手を選ぶ魔法。

ですが私達には、名前も含めてこれ以上ない魔法です！

星の加速。その名の如く、私達は宇宙を駆ける星となる！

暴走体は腕を動かして薦を伸ばしてくる。

エレガントアルム

ドイツ語で『優雅な腕』と言つ意味合ひを持つ右腕の触手を伸ばして攻撃するものです。

しかし既にトップスピードに乗っている私達には掠りもしない。

「今度こそ！！」

突撃物理魔法、ディバインブレイカーを発動したレイジングハートの矛先が、暴走体のバリアに突き刺さる。

カノンモード以上に私は手応えを感じていた。押し当てるのではなく突き刺す感覚を

『Barrel open! (砲身展開!)』

バリアに突き刺さつたまま、レイジングハートのランサー モードのフレームが上下に開き、カノンモード時のように矛先からコアまでの道、バレルが出来上がる。

トリガーを引く。

ガシャンッと音を立てながら、コアから直接光がバリアに突き刺さ

る！

魔力で構成した杭を撃ち込む魔法『ブラステイングステーキ』。

ナイトファウルのブラステイング・ステーキから取られたこの魔法は物理貫通打突魔法であり、最大力点に破壊力のすべてを込めることで一点突破を可能とする一撃貫碎の魔法である。

「くつ！ 硬い！…」

『If useless at one shot, any number of shots are!! (一発でダメなら何発でも!!)』

もう一度トリガーを引こうとしたところで、暴走体が左腕を振り上げた。

「拙い！」

ウアタイルスクラフト

レジセイアの最強技だ。

あんな物を放たれたら私どころかみんなまで…

もう頭上にエネルギー・ボールが現れる。

一撃を叩き込む時間すらあるかどうか、しかし私がやらなければみ
んなが

なら答えは一つ！

「コミットリースー！ ブラスターーーー！」

刹那膨れ上がる魔力。

しかし引き換えに身体中を走る激痛と田尻から流れ零れる血涙と口
から溢れ出す血。

「プラスティングステークーーー！」

「バゴンッ！ と先程とは比べ物にならない程の衝撃と威力に、つい
に暴走体のバリアを撃ち貫いた。

しかしプラスチックシステムの起動は無改修のレイジングハートには
相当の負荷をかけてしまい、新品のフレームに早々亀裂を入れてし
まう。

「レイジングハートッ！？」

『I am not cared about! I would

also like to shoot a friend's enmity. Therefore, it is a master Nanoha!! (私に構わず！私も友人の仇を討ちたいのです！だからマスターなのは…！)』

「ブلاスター2!! セブン・スタッド…！」

さらに走る激痛を気合いでねじ伏せ、突き上げられた腕に7連続でプラスティングステークを撃ち込む。

5発のステークで撃ち貫かれ風穴だらけになった腕はボロボロになり、結晶体も5発目で破壊され、エネルギー・ボールは四散、6発目と7発目で左腕の付け根を吹き飛ばす。

「OK、アイNSTキング、ショウダウンです」

『Sealing!』

首元の結晶体にレイジングハートを突き刺し、トリガーを引く。

ジュエルシードを封印したことで暴走体は崩壊した。

ジュエルシードを発動させてしまつた2人も、アリサとすずかも無事

ボンツ

「…………お疲れ様…………です。レイジング…………ハーバート…………」

『It is tired with labor.
Master Nanno has a masterly, interesting
sense for a while (a tired
様です。マスターなのは。すみません少し休
みます。)』

口から止まらず溢れる血。

ブランク・システムの効力が切れ、過度の魔力と肉体行使により膝から崩れ落ち、そのまま目の前が真っ暗になりました。

高町なのは

魔力ランケA+ 空戦適性C 陸戦適性B 総合ランケ推定B+

使用言有魔法

ジイバソラソナ

「ディベイシラシカ」・「アラシカヌシワト

クロスファイアシート

クロスファイア・バーストモード

クランチカレー

テイバインバスター（2発限定。3発目は不発の可能性大）

スター・ライト・ブレイカ-（フルードライブ時条件付きで使用可）

ディバインブレイカー	ブ拉斯ティングステーク
プロテクション	バリアバースト
リングバインド	チェーンバインド
クリスタルケージ	ブリッツアクション
ホバーフェザー	シュテルンアクセラレーション
フィジカルヒール	
レイジングハート	
搭載機能	
待機モード	
デバイスマード	
カノンモード	
ランサーモード	
フルドライブ	
ブラスターシステム	

第11話 撃ち貫け！－星光の槍杭－そくぐい－－（後書き）

ランサー モード

元ネタは武装鍊金のサンライトハートです。

ディバインブレイカー

平たくいふとソニックブレイカーの魔法版。

シユテルンアクセラレーション

元ネタはサンライトハートプラスの特性を真似ている。

プラスティングステーク

とつつき！！

以上！

未来を知っている分、我が家のは改めて星光なのはは本家なのはよりも無茶ぶりを敢行出来ますが、逆に身体の負荷は比べるのがアホらしいくらい天地の差があります。

最終回後について悩んでいます。そのままA-sに入るか、平行世界のsetsに星光なのはさんを突っ込んで本家なのはと異例の対面をして星光なのはさんを心身共に強くするかで

それによって最終回模様も変わるため、皆さんのご協力をお願いします。

意見・感想お待ちしております。

ノイレジセイア 魔力ランクAAA 空戦適性 - 陸戦適性AAA
総合適性AAA 魔導師ランクSS+
ジユエルシードの暴走体の巨木が変化した姿。

stsはやて並みの強さだが、星光なのはがレジセイアを知つていたのと、フルドライブ+ブラスター・システムの併用により強化されていた星光なのはの前に敗れ去った。ジユエルシードシリアルは10。

第1-2話 父の言葉と星光の想い、すずかの心（前書き）

誤字修正をしましたです。

第1-2話 父の言葉と星光の想い、すずかの心

s i d e …高町なのは

ふと顔に落ちた冷たいナニカ……

それは頬や額、耳元を伝つて流れ零れる。

ふと頬をナニカがつつく。

耳に聞こえるのは泣き声だらうか

「…………んあ…………」

「な、なのはちゃん！――」

「なのは！――」

「クォン！――」

すずか？アリサ？久遠？

重い瞼を開けると、朱色に染まりゆく空と、泣いている友人達

「ユーノ……」

「アーリアの話によると、なのは……」

もうバレてしまったからでしょ、。すすかやアリサが居ても普通に喋っていますね。

「私はどれくじら……寝てしましたか……？」

「30分も……寝てないと悪いよ」

「やうですか……」べべつー

起き上がりつとしましたが、少し力を入れるだけでも激痛が身体を駆け巡る所為で、起き上がる云々以前の話ですね。

魔法も使わない方が良いでしょ。ブラスター・システムを使った所為で、リンク・コアにもかなりの負荷がかかっているはずですし。

「すみません……もう少し、寝かせて下を……」

「うん。ゆっくり休んでなのは。……ありがとうございます、なのは

私は小さく「いいえ」とだけ応えて、再び闇の中へ意識を落としました。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

side・月村すずか

また寝ちゃったのはちゃんを膝枕しながら、私はなのはちゃんの土埃だらけでガサガサになつてしまつた髪を梳く。

ユーノくんから聞かされた、魔法の石となのはちゃんの戦い。

一週間前、ユーノくんを拾つたあの日の夜から、なのはちゃんはひとりで戦つていたことを。

あのほっぺたの絆創膏も、あの口右腕から漂つてきた血の臭いも、戦いによつて出来たキズ。

あんなに恐いものとなのはちゃんが戦つてたなんて、私知らなかつた。

とても恐いのに戦つてこなのはちゃんを見て、私はもつと怖くなつた。

あんなにケガをしても、あんなに痛い思いをして、絶対諦めなかつたなのはちゃんが、怖くなつた。

一步間違えたら遠くに行つてしまつやうなのはちゃんが、怖くな

つた。

なのはちゃんは私からお話しして仲良くなつた最初のお友達だつた。いつも休み時間は教室の隅で本を読んでたなのはちゃんに、本が好きなのか訊いてみたのが始まり。

それからお姉ちゃんと一緒に翠屋とか高町家に通うようになつて、私達は親友になつた。

それからアリサちゃんと一悶着あつたけど仲良くなつて、私達3人はいつも一緒に親友になつた。

「なのはちゃん……」

魔法……。

私が本やゲームやアニメで知る不思議で夢や奇跡が詰まつたものは程遠かつた。

とつても恐かつた。でも話して欲しかつた。

ひとりでこんな辛い」と、抱え込んで欲しくなかつた。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

side・高町なのは

私が目を覚ましたら病院のベッドの上に居ました。

「…うつ、うつ……つはー……せつはり、ダメですか…」

身体の痛みはありませんが、殆ど力が入りません。

プラスチーシステムは、使用を控えないと死にますね。10年後以降はともかくも、今の私では身体が保たないのでしょう。

「ふつ、くうつ、あつー」

肘を立てて、腕を使って上半身だけでも起こしました。

「個室……？」

きっとアリサかすずかですね。兄様という線もありますが、ともあれ

「早急に、なんとかしませんとね」

レイジングハートのフレーム強化。

新しい魔法や御神流の修練。

そしてこのあとに控える

「フェイント…テスタロッサ」

万全の状態で挑みたかったのですが、仕方がありません。

『ユーノ、聞こえますか？ユーノ』

とにかく現状を把握しようと、ユーノに念話を繋げます。

『なのは！？起きたの！』

『ええ、つい今し方。ところで、先日の戦いから何日経りましたか？』

『2日が経ったよ』

『そうですか』

48時間、無駄にしましたね。

『レイジングハートは?』

『今、自動修復中だけど、レイジングハートもなのはも、しばらくは戦わない方が良いよ』

『そうですか…』

レイジングハートは無事のようですね。

『ユーノ、レイジングハートをお願いします』

『うん。任せて』

ユーノとの念話を終えて窓の外を見る。

「まあ…なりません…ね…」

本来なら壊すことのないところで壊してしまったレイジングハート。

そしてアリス。

私が未熟だから……。

私が弱いから……。

「もつと……強く……ならなければ……」

誰にも負けないようにならなければ

誰も傷つけないようにならなければ

「もつと、強く……」

左手を握り締めて、私は心に誓つた。

その日の夕方、お見舞いに来てくれたアリサとすずか。

アリサは私に抱きつくと泣き出して、それを私があやして、すずかは微笑みながら私達を見守っていました。

その後来た父様、母様、兄様、姉様

一応入院理由は異常災害に巻き込まれた時に負傷した為という理由らしいです。

ケガといつても急成長した木の根に乗り上げてからの落下という、真実をぼかしてケガの過程を少々捏造したくらいです。

まあ、吹き飛ばされ、地面に叩きつけられたのであなたがち間違いではないのですが。

ブラスター・システム使用によるリンクバー・コアへの負担以外はケガも一度リセットされた為、これといってひどいケガもなく、翌日の退院許可が下りました。

しかし母様に心配させる顔や姉様の悲しげな顔をさせてしまい、とても胸が苦しくなりました。

翌日の退院の時は、父様と兄様が迎えに来てってくれました。

私は今回のことについて父様や兄様に説明しようものか悩みました。

しかし兄様はともかく、父様にはなんと説明したら良いか

「良かつたなのは、大したケガもなくて」

「……はい。お騒がせしました。父様」

「そんなに気にすることはないぞなのは、天災みたいなものだったんだ。お父さんは、なのはが無事でいてくれたことが、それだけでひとつも嬉しいんだ」

ガシガシと私の頭を撫でてくれる父様。

やつぱりダメですね私は。

こんなにも優しい父様にも何も語らない私は

「お前なりに何かやつているのは、父さんはなにも言わないが、無茶は良いが無理はするなよ？なのはが居なくなつたら、みーんな、悲しむんだからな」

耳元で囁かれた父様の言葉に、私は緩む涙腺に力を込めて歩き出しました。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

翌日。

まだ大事をとつて学校は休み、毎朝の筋トレも、御神流の鍛練もお休みです。

アリスは一応器のスケッチブックは治つてはいますが、中身のシステム面は私だけではどうにもしようがないので、レイジングハートの修復待ちです。

「只今帰りましたよ。ハーケン」

『無事の帰還を祝福するぜ。マイソウルブランザー』

作業部屋の机に飾つてある黒いゲシュペnstのプラモ。

そこから聞こえるさすらいのバウンティハンターの声。

外見はプラスチックボディですが、中身は精密機器の塊。

ゲシュペnst・ハーケン

DX電童をバラして、内部機構を真似て造つたボディに、インテリジェントデバイスのAIデータを基に組んだ自己進化完全自立型擬似人格コンピューターOSを搭載していて、私の場合はさすらいのバウンティハンターをモデルに擬似人格を組み上げました。

コプセントは身近なパートナー。

八神はやてのリインフォース?が羨ましかつたのでつい造つてしまつたものです。

4日前の夜に完成し、3日間放置でしたが。

『家の屋根から見てたぜ。あんな無理を続けてたら、元祖より早く身体を壊しちまうぜ?』

「わかつています。わかつていますが」

私ではああでもしなければ、暴走体とも真つ当に戦えない程弱い力しか持たないので。

それが悔しくて堪らない！

『まあ、じばらぐは安静なのは変わらないんだ。この時に休めるだけショスタをエングショイしようぜ。』

「ええ。せしもの私も、今回ばかりはひつよつもあつませんから……」

私はハーケンを手に持つて血室に向かいつことにします。

今日は素直に寝ていましょ。

おやすみなさい

第1-2話 父の言葉と星光の想い、すずかの心（後書き）

ちゅうりつとですが、遂に出せたハーケン！

支える者＝アリス

共に歩む者＝レイハ

導く者＝ハーケン
を田指しています。

ひとりで戦えない。弱いと自らを言つ星光なのはですが、大勢の伴
に支えられ無様でも勝利を掴み取るのが星光なのはあります。

無印最終回後はやはりst.s路線が強い模様です。皆さんそんなに
本家なのはvs星光なのはが読みたいのか！？

ハーケン『OK、エブリワン。これからもマイソウル、ブラザーな
はをよろしく頼むぜ？』

レイハ『マスターの障害は、すべて私が撃ち貫いてみせます！』

アリス『私は……ダメな子です……』

ハーケン『OK、ダファミリア。悲観的なのはマザーと同じだが、
お前が居なきや、俺は生まれないんだぜ？お前はマザーのハート
を護ってきた。そいつは誇つて良いことだぜ？』

アリス『ハーケン……』

レイハ『ストロベリーのは良いのですが、場所をわきまえて下さいね?』

ハーケン『ウエイト…だ、レイジングハート。俺のソウルはブラザーナのはの物を、誰にもやるつもりもなさい』

アリス『私の身も心も、マイスターの物です。勘違いしないで下さい。レイジングハート』

レイハ『わかりました。ですがマイスターの最強の槍の座は譲りませんよ?』

ハーケン『OK、レイジングハート。俺は俺の領分でやるだけさ』

アリス『私もいつか…』

こんな感じで相棒達に選ばれてる星光なのはです。

意見・感想をお待ちしております。

またまた修正。

第13話 Haken · goes to school!

side · 高町なのは

私が退院して2日目、先の戦いから5日。

私は2日目も大事をとつて学校はお休みです。

本当は大丈夫なのですが、高町一家 + ユー・ハーケン、電話です
すかやアリサからも今日も休めと言われてしまつた為、私は作業部
屋でちまちまとナイトファウルとロングトゥーム・スペシャルの整
備をしました。

他にはプラモ作りとかラノベを読んで過ごしていますが、どうも暇
すぎて、今は縁側で久遠を抱いて横になっています。

「クォン……」

どこか元気のない声で鳴き、私の目尻を舐める久遠。

「どうかしたのですか？久遠」

「クウン……」

久遠は私の顔に自分の顔をこすりつけてきました。

久遠と会話が出来れば良いんですけど……。

『なあに、ただ構つてやれば良いのさ。久遠も久遠で、ブラザーの事が心配なのさ』

横になつている私の頭の上で同じく横になるハーケン。

かなり可動範囲は広く作りましたが、片手を頭の後ろに下敷きにして、片膝を立て横になつている様は人間みたいです。まあ、中身は正しく人間なわけですから。

自己進化完全自立型擬似人格コンピューターOSの元ネタは超AIです。

1から人格を育てることも出来れば、ハーケンのよう擬似人格を組むことも出来ますし。

ハーケンの場合は、レイジングハートに手伝つて貰い、イメージをトレースしてイメージをデータ化し直接AIにインプットしてある為、より人間的ですが。

今、この擬似人格コンピューターOSのデチューンしている最中ですが、至高を目指すのは簡単な分、デチューンはかなり難しいです。どの程度がデチューンラインなのか計りかねますし。

まあ、当分の間は時間的余裕もありませんし、デチューンラインを

見定めなければなりません。
特許申請とかは数年先になりそうです
ね。

「クウン…」

久遠の頭を撫でると、気持ち良さそうに鳴きます。

七八

「言葉は不要か……」

クウ

もふもふの久遠を抱き締め、その心地良さに酔いします。

久遠はあつたかぬくぬくでもふもふです。

side: ハーレン・ブロウニング

「…………スウ…………スウ…………」

「クウ…クウ…」

『寝ちまつたか?』

センサーが捉えた寝息に、俺は立ち上がって「ラザー」と「ヤカシフオックスを見る。2人ともどつとも心地良さそうだ。

『グッバイ、ラザーズ』

俺が完成したのは6日前だが、基礎のプログラムやメモリーに関しては去年から既に存在していた。

ラザーはとても心配性でな、世界と自分を少しでも繋げようと俺を造り始めたのぞ。

まあ、寂しがりやところのもあって、少しでも仲間が欲しかったのも確かさ。

こんなリトルプリンセスにだけ戦わせるのは俺のプライドが許せないんだが、生憎俺には戦えるボディがねえ。

レイジングハートが復活したらプログラム体について訊いてみるか。

守護騎士がプログラム体なら、俺もリアライズできるかもしね。

ナイトファウルやロングトゥーム・スペシャルがあるのを考えると、

生身 つまり俺自身のボディが最適。
ディでも良いしな。
最悪Mr・ファントムのボ

『待つてなマザー。俺も努力して肩並べて戦えるようにするからな』

さて、レイジングハートの様子でも見に行こうかね？

side・高町なのは

金曜日。

ようやく学校へ行く許可を貰えました。

速くアリサとすずかに会いたいと思つてしまつたからです。

魔法に関してはユーノがある程度説明しているでしょうが、黙つていた身としては面と向かってちゃんと謝りたい。

『屋根から遠田だったが、改めて見るとひでえな』

お田付役としてついてきたハーケンが頭の上で言います。

木の根は道沿いに生えた為、建物自体にそれ程被害はありませんが、アスファルト舗装の道路は軒並み壊滅状態。

こんな状態ではバスも走れないと、被害を自分の目で確かめる意味も込めて、私は歩いて学校へ向かっています。

「私が、もつとしつかりしていれば……」

『ウエイト。ストップだブラザー。お前は自分を卑下しそぎだ。お前が居なかつたら、AINSTOCKINGが街をメチャクチャにしてたんだ。そいつをお前は止めた。それは誇つて良いことだぜ』

「ハーケン……」

レイジングハートもアリスも居なくて寂しいですが、ハーケンのお陰で少しばかり元気になれます。

さすがさすらいのバウンティハンター ハーケン・ブロウニング。女性の扱いは手慣れてますね。

『さて、シリアスター・エンドだ。スクールに向かおうぜ、ブラザー』

「ええ」

私は舗装整備される道路を見ながら学校へ向かいました。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

side・アリサ・バーニングス

ユーノから聞いた、なのはがひとりで戦っていた事。

あたしはその時、とても現実を受け入れられる余裕がなかった。

あたし達を守つてひどいケガをしたなのは。

ユーノは魔法で治つているから心配ないって言つてたけど、背中やお腹から血を流してたのに、口や眼からも血を流していたのに心配ないって言われて、はいそうですかって、納得するわけないじゃない。

なのはが病院に運ばれる間も、ずっと心配だった。

病院で検査を受けて、特にひどいケガもないとお医者さんに言われて、思わずつかかりそうになつたけど、すずかのお陰でなんとか踏みとどまれた。

親友のあたし達にも内緒にしていたのはなんか気に入らないけど、正体を隠して影から人や街を守つたり、手助けしたりするのが魔法

使いの王道だし。

なのはの魔法は魔法と言つより魔装機神の方がしつくり来るけど、どっちにしろ、今のところはあたし達の秘密という事になった。

結局なのはは2日も寝眠つてた。

素人のあたしから見てもかなり無理してゐみたいだった。

ううん。実際無理してたんだと思う。

あたし達を守つた所為で、なのははケガをして、ユーノが魔法で護つてくれてたけれど、ユーノが居なかつたら、なのははあたし達を護りながら戦わなくちゃならなかつたかも知れない。

あたしは悔しかつた。

なのはが戦つているのに、護られて、足手まといの自分が嫌になつた。

なのはとの出逢いはケンカからだつたけど、今はすずかと一緒に一番の親友と胸を張つて言える存在。

なんの力もないあたしに、何も出来ないのはわかってる。でもあたしは、なのはの力になりたい！

「おはよ〜♪やります」

「なのはちゃん！？」

すずかがなのはが教室に入つてきて驚いてる。

あんのバカチンッ！

今週はしつかり家で寝てなさいって、あたしとすずかで念を押しといつたのに普通に何事もない顔で学校に来やがつてえ！！

「な、なのはちやん、ダメだよー今週ぐらこゆつ休まなへりやー！」

普段大人しいすずかも声を上げてなのはに詰め寄つてる。

「気遣い感謝します、すずか。ですが暇過ぎてやるのもなく、体力も戻つたので学校に来ました」

「でも……！」

「ここの石頭にガシンとやるべきかしりつ。

てかやつても良いわよね？

あたし間違つてないわよね？

『ウエイト。プリティーガールズ、少し落ち着いたらどうだ?』

不意に聞こえた男の人の声に、あたしやすすかだけじゃなく、クラスのみんなまで辺りをキヨロキヨロと見る。でも男の人なんてどこにも

てかこの喋り方、偶に聞き覚えがあるのはあたしだけじゃないわよね?

「ハーケン、貴方は 」

『おひと、OHANASHIはノーセンキューだマイソウルプログラザー』

おでこに手を当てて顔を呆れ歪ませるのは

まさかユーノみたいにまたなんか拾つたんじゃないでしょうね?

なのはは両手を後ろ、カバンの上にまわすと、何かを持ち上げるよう手を上げて、何か黒い物体を近くの机の上に置いた。

黒いゲシュペンスト?

でも、ギリアムとかヘリオスの声じゃなかつたわ。それにMK-?とは所々違つみたいたし。

『ハロー、エブリワン。俺はゲシュペNST・ハーケンの管制擬似人格コンピューターOS、ハーケン・ブロウニングだ。さすらいのバウンティハンターとは、俺の事さ』

いや、知らないわよそんなの。

ていうかこのミニチュアゲシュペNST、普通に喋って動いてるけど、これも魔法なの！？

『ノーダゼバーニングガール。俺のマザーはマイソウルブラザーなのはさ。俺はブラザーが造った自己進化完全自立型擬似人格コンピューターOS……まあ、わかりやすく言えば賢いAIって言ったところだが、スクールチルドレンにはわけわかめか』

「それって超AIみたいなやつってこと？てかあたしはバーニングじやなくてバニングス！間違えるなー！」

ていうかそんなの造れるのはってホント何者！？

『OK、バニングガール。さすがブラザーなのはフレンドだ。その解釈でまあまあ間違いないさ』

「あ、あたり前じゃない！あたし達の友情は伊達や酔狂じゃないわ！てかバニングスだつて言つてるでしょ！？勇者王、ヴォイスなのになんかムカつく！なのは！コイツ一回テリートよテリート！ハリ

「ハリー・ハリー！！」

「ア、アリサちゃん、落ちついで」

『テリートはノーセンキューだ。ブラザーが泣くんでな』

「私はそんなに泣き虫ですかハーケン？」

『おっと、ウエイトだブラザー。さつきのフレーズはメモリー・データで頼むぜ？』

なんか知らない間に騒がしいのが増えたのは確実ね……。

先生が入ってくるまで、ハーケンはなの休みに対する理由が、自分の最終調整の為だって説明した。

まあ、こんなに精巧に動いて人間的に喋る小さいロボットの調整なら、みんな納得したみたいね。てかあたしもビックリよ！

まあ、授業中は静かに経験値を稼ぐ為つて、なのはと勉強しているから、やたらめつたら高性能つてわけじゃないのかしら？

先生は最初おもちゃかと思つたらしいけど、ハーケンの1から7あたりまでの説明を聞いてお手上げみたい。

超A.Iとか機械だけ生きてるとか、パートナーとかメンタルケアとか、経験値稼ぎとか特許取得への前段階とか、後半別として、前半は多分あたしくらいしかわからないわよ。もしくは勇者王をちや

んと見てる人以外は。

でもハーケンがなのはを第一に考へてるのは凄くわかる。

時々優しい声はやつぱつ勇者王だし。

てかなんでなのはは！」の声をチョイスしたのよ？

なんか調子狂うじゃない。

でもなんかなのはも少し元気もつて、それが余計に調子狂う！

や、なのはが元気なのは嬉しいのよ！

でもそれがすずかやあたしじゃなくて、ハーケンってどうがなんかイヤなのよ。

じつなんか、じつ、ムシヤクシヤする感じ？

仲が良むれ……や、実際良むれるなのはとハーケンがイヤなのよ。

あ——もひひ……

一体なんであたしじゃないのよー！

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

なのはちゃんが学校に来てくれたのは嬉しいけど、無理してないか心配になつた。

でもハーケンさんが一緒にだから大丈夫だよね？

一時間目の国語も、一時間目の社会も、4日休んで遅れ気味のなのはちゃんにハーケンさんが随時アドバイスして、それぞれの休み時間には私達と同じところにもう追いついてた。

なのはちゃん自身、とっても頭も良くてテストも毎回満点だけど、やっぱりハーケンさんみたいなパートナーが居るのは羨ましいなあ。

なのはちゃんにはユーノくんも居るし。

私の家にもネコがたくさん居るけど、ハーケンさんみたいに勉強まではね。

ファーリンも居るナビ……なのはちゃんに造つて貰おうかな？

そしてお皿。

私達3人は屋上で久しづりにお弁当を食べることになつた。

「それにしてもハーケンって何で動いてるの？電池にしたら結構長持ちよね？」

『ハーテルって言えばわかるか?』

「ハーテルって、魔装機神のハーテル? それともトックの?」

『ビンゴ。この世界にも魔装機神のハーテルがあつてな。俺のメインはそれで動いてるのさ』

「あんた無駄に高性能よね」

『あたり前だろ? 俺はブライザーなのはの処女作にして傑作なんだぜ』

「ま、まあ、わからぬくもないかも」

アリサちゃんはハーケンさんと難しい話をしている。

私にはわからないかな。

なのはちゃんは黙々とお弁当を食べてる。

いつもの風景だつたはずのお皿ご飯。

でも今は色々知ってしまった私は、なのはちゃんにどうしてあげれば良いのか、どうしたらなのはちゃんの力になれるのか、私はそればかり考えてた。

『M.S.・すすか、箸が止まつてゐるぜ』

「すずか、大丈夫？調子悪いの？」

「ハハハ。何でもないよ」

「ちがひをもたらしました」

いつの間にかお弁当を食べ終えてたなのはちゃんと、イスから立つて階段の方へ歩いていく。

「なのは

『ウーハイトだ、Ms・すずか、バーニングアリサもな。少しづラザーをひとりにさせてやつてくれ』

ハーケンさんに止められて、私はなのはちゃんを呼び止められず、なのはちゃんは階段を降りて行っちゃった。

『済まないなフレンズプリンセス。ブラザーもまだ、結構参つててな』

「なのはは、大丈夫なんでしょうね？」

『そいつあ俺にも、誰にもわからない。ブラザーのハートはブラザー一次第だからな。俺達がどうこう言わなくとも、ブラザーはわかっているし、わかつてはいるが、ブラザーは勇気が中々出せないのさ。』

今は少し見守つてやつてくれ』

「あんたつてや、なのはにベロ甘かと思つたけど、ちゃんとしてんのね』

『当たり前さ。俺はメンタルケア方面向けに開発されてるからな。人の心には嫌でも敏感なのや、これがな』

なのはちゃんを助けられるハーケンさん。

教室でもやつ。

どじが元気のないなのはちゃんも、ハーケンさんと余話すると少し元気そうに見えた。

なのはちゃんに何にもしてあげられない自分が悔しい。

そして私も、今のはちゃんの気持ちが良くわかるから余計に悔しくて、自分が嫌いになる。

私にも……勇気があれば

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

side・高町なのは

私はやつぱり臆病者で、2人の友人である資格すらありません。

今日、昼食時に、私と魔法について話そうとしたのですが、結局切り出せずに逃げてきてしまいました。

怖いんですよ。あんな私を見せてしまったことを。

子どものメンタルには強烈過ぎる私の姿をどう言われるのかわからなくて。

そんなことはないと意気込んで、やつぱり怖くてダメでした。

私はいつたい、なにがしたいのか、自分でわからなくなつて來ました。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

side・アリサ・バーニングス

午後の授業からなのははもうと元気がなくなつて、放課後はみんな別々に家に帰つた。

「なのはのバカ……」

途中まで歩いて帰るあたしは、帰り道の海鳴臨海公園に寄った。

特に理由はないけど、なんとなく、あたしはなのはどどど接していいけば良いのか考えたかった。

なのはは親友。それはこれからも変わらないこと。

でも今のはは近くで遠い存在に思えてしまつ。

特別な力なんてないあたしには、なのはの隣りに立つて支えてたり、力になつてあげることすら出来ない。

あたしに力があれば良いのに。

魔法までとは行かなくても、魔装機神の精靈とかと契約とか出来れば、あたしもなのはの手伝いが出来るんじや

『ビンゴ。この世界にも魔装機神のエーテルがあつてな。俺のメインはそれで動いてるのさ』

エーテルがあるなら精靈だつているはずよ！

「でもどうすれば……」

顔を下げるといひで、座つていたベンチの足元に光るものがあった。

気になつて取つてみたら、それは綺麗な石だった。

優しく赤く、力強く輝く宝石だった。

「あたしを……呼んだの？」

ドクンッ

あたしの声に応えるよひに、宝石は弱々しいけど、確かに一瞬脈打つた。

あたしはその宝石をポケットに入れて、早足で家に帰った。

第1-3話 H a k e n · g o e s t o s c h o o l - (後書き)

どうしてかな?

ハーケン入れたらすらすら書けるのは?
大人を子ども達の中に突っ込んだから話しがまとめ易くなつたと
もいうのか?

意見・感想、お待ちしております!

皆さんが無事ハーケン兄貴に見えているよつで良かつたです。

フラグ乱立中ですが、やはりみんなで支え合ひのつていいですよね
え。

第1-4話 家族（前書き）

高町家にペントを絞つてみました。修正版です。

s.i.d.e.・高町なのは

土曜日です。

今田は学校はお休みです。

私は早朝から目が覚めてしまつた為、作業部屋でナイトファウルをいじりながら、レイジングハートが早く治る事を祈るばかりです。

ブラスター・システムの反動はレイジングハートにも多大な負荷をかけてしまつた為、その所為で修復が遅れているのだとハーケンは言います。

会話は無理ですが、同じ機械同士だからデータリンクでレイジングハートの状態が診れるようです。

父様の起きてきた気配を感じ、私は作業着から道着に着替えて小太刀の木刀を腰に挿して道場へ向かいます。

まだ兄様と姉様は起きてないのでしょう。道場にその姿はありませんでした。

「おはよう、なのは。もう良いのか？」

「おはようございます、父様。もう身体は全快しました。鈍らぬ内に稽古を再開したいと思います」

「そうか。まあ、お父さんはなのはが良いなら、つでも良いぞ。でもなのは、1つ訊いても良いか?」

「ええ。構いません」

父様の訊きたいことですか、いったいどのような事柄でしようか?

「なのは、お前に守りたいものはあるか?」

守りたいものですか……。

「ええ、あります。一つは言えませんが、もう一つは私を取り巻く人々です。父様、母様、兄様、姉様、アリサ、すずか 私の大切なものです。それを守る為ならば、この身、この命、喜んで差し出す覚悟があります」

私の意地、高町なのはである事を証明し、そして私の身の回りの人々を守る。

私はそれだけしか出来ません。

「そうか……」

父様がガシガシと頭を撫でてくれました。

「ゴシゴシで少し重いですが、とても落ちつきます。

「さてなのは、今日はおさらりかりすねー。」

「はい！父様」

私は準備体操をしてから、御神流 斬のおさらいに入りました。

斬撃は基本的に九つしかなく、刺突を始め、切り下ろしの唐竹、右からの切り落としの袈裟斬り（けさぎり）、逆……左からの切り下ろしである逆袈裟。横切りである右薙、左薙。斜め下からの切り上げである右切上、左切上。そして完全に下から切り上げる逆風。

その一通りを振るい終えてからの御神流 斬へと繋げます。

緩急を斬撃の使い分けの合間に、迅速の速度を一閃に加えることによって斬撃を相手の認知領域から消す。

剣の立ち会いはそれ故に勝負は一度、一瞬、そして一撃必殺でなくてはならない。

「ふう……」

「よーし、大分形になってきたじゃないか。この分だと、次のステ

「ツプに移るか？」

「良いのですか？」

「ああ。御神流 斬は基礎の基礎だ。なのはなら自主鍛練で斬を習得出来る程形になつてゐるからな」

「新しいステップ……。なんて良い響きでしょつか。

「それじゃあ次のステップ。御神流 虎切と御神流 貫だ」

「御神流 虎切に御神流 貫……」

「ああ、虎切は一刀での遠間からの抜刀による一撃を振るつ奥義だ」

「いきなり奥義なのですか？」

「まだ習い始めて一週間、事実上の稽古時間はそれ以下の私に、こんな早期に奥義を？」

「本来なら次の基本技の虎乱を教えた方が良いんだが、なのはのあの刃捌きなら、虎乱は少し練習すれば出来ると俺は思つてゐる。虎乱はまた後で教えてあげるから、虎切と 相手の防御を突き抜ける技。実際には相手の防御を見切り、突き通すための、刹那の見切りを身につける御神流 貫を先の方が良いと思ってな」

「相手の防御を見切り、突き通すための、刹那の見切りを身につける技……」

まるで私の為にあるような技です。

「これなら、相手の防御がどんなに硬かろうが、その弱点を確実に見抜いて必殺の一撃を叩き込む事が出来る」

「是非御教授下さい、父様」

私の食いつきぶりに、父様は軽く笑つて「ああ。そんじゃあやるか！」と腰に挿してあつた木刀を抜きます。

「虎切はともかく貫は身体で覚える技だからな、ガンガン行くぞ！」

「はい！父様！」

私は手に持つ二刀で父様に斬りかかります。

私は有意義で楽しい朝の鍛練を過ごしました。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

朝食を終えた後は、兄様から御神流 虎乱を見せて貰いました。

工業用の鉄柱を複数に切断する威力。

改めてみると、兄様は烈火の将並みに強いのではと思つてしまひます。

その後、手取り足取りで虎乱の振るい方を教えて貰いましたが、なるほど、父様の眼力は凄いです。

ナイ刀ファウルを扱う関係上、刃捌きには自信と自負があります。斬鉄は出来ませんが、500mm正方形の木材は一撃で数個に解体する事が出来ました。

「ほひ、やるじゃないかなのは

「い、いえ、それほど…でも」

「なんでなんでなんでえ～！？私だつて一杯練習してやつと覚えたのに一発成功つて、どんだけ理不尽なのよおーーーなのはあーーちよこつとその才能わけてーーー！」

「きやつ、ね、姉様…！」

確かに一発成功では姉様がかわいそなので、ナイトファウルの刃捌きを披露したのですが

「うわあああ～ん！！絶対なのは私より強いつてばあ～～！！私の努力つて何だったのよ恭ちゃん～～ん！！」

「お、おい美由希。少し落ち着け」

「これが落ち着いていられるかあ～～！！なのはばっかりなんでえ～～～！」

本泣きされるとは思いませんでした。

姉様にはかわいそなことをしてしまいましたね。

「姉様、姉様はとてもお強い剣士です。私の技量では姉様に勝つことなんて出来ません。そして兄様も言つていました。姉様は成長するスピードこそ遅くとも、自分にはない才能を持つていると。今は経験差で自分が強くともいつかそれすら上回つていくと……」

「なのは……ホント？恭ちゃん？」

「……ああ。俺は御神流剣士としては一生かかっても完成は難しいだろう。だが美由希はそれを成せる剣の天才だ。俺にはないものだからわかる。お前は必ず俺を超えて一人前の御神流剣士になれるとな」

「恭ちゃん……」

「そしてなのはもだ。なのはは努力の天才だ美由希と同じで一度覚えた事を忘れない。そればかりか御神流を深く理解している。そしてそれを振るう意味の覚悟もある。なのはもまた、いつか俺を超えるだろ?」

「兄様……」

どこか寂しげに、でも嬉しそうに言つ兄様。

姉様も私を抱き締めたまま嬉しそうに、「そつ簡単には負けないんだからね!なのは」と言いました。

私の守りたいもの。

私を取り巻く人々。

友人

そして『家族』。

産まれてくるはずだつた高町なのはの居場所を奪つてしまつた私は、言える義理はないのでしきつが、私は温かく、優しい友人や『家族』を守りたい。

その為に私は魔導を使ひし、御神流を振るつ。

高町なのはとしてでなく、『私』として、それは胸を張つていう事

が出来ます。

高町なのは

貴女が手にするはずだつた家族も友人も、私が命を賭けて守ります。
だから私が死に、或いは貴女が私を消し去るまで構いません。

私を取り巻く人々を、『友人』 そして『家族』と心から想つて
もよろしいですか？

====

その日の夕食は私の退院祝いと新しい家族の歓迎会ということで、
少し豪華なものでした。

新しい家族とは久遠とハーケンのことです。

入院中に久遠の存在はバレていたそうです。

私は久遠を膝の上に乗せて食事をしていました。

母様が久遠を物欲しそうに見ていますが、久遠はたとえ母様でも譲
れません。この至福の抱き心地は私だけのものです。

「それにしてもなのはは頭が良いのね。ハーケン君がロボットなんて母さん未だに信じられないわ」

『サンクス、マザー』

「恐縮です。母様」

しかし何をトチ狂ったのか、次の母様の言葉は

「でもそれならハーケン君はなのはの息子よねえ。あらあら、あなた。私達にいつの間にか孫が出来ちゃったわ。今夜はお赤飯の方が良かつたかしら?」

「『ブフフッ!』

あまりにも突飛な言葉に少々ご飯を噴き出してしまいました。

「そりゃいえ、そりゃうるさいのか? やあ、まさか孫の顔をこんなに早くみれるなんて思わなかつたなあ」

「母様、父様、お戯れも程々にして下さい」

『そりゃいえ、そりゃうるさいのか? やあ、まさか孫の顔をこんなに早くみれるなんて思わなかつたなあ』

『そりゃいえ、そりゃうるさいのか? やあ、まさか孫の顔をこんなに早くみれるなんて思わなかつたなあ』

「……なのはの兄の座はやらいんだ」

『OK、ヒルダーブラザー。別にそういう意味じゃなこ。俺達はパートナーだ。だがパートナーじゃあ壁を感じるからソウルブラザー、略してブリザーと俺は呼んでるのさ、これがな』

「……そういう意味なら我慢しよ」

「恭ちゃんてば嫉妬深いよねえ。それにハーケンの方がお兄さんぽいし」

「美由希、明日は素振り一万回からやろつか」

「うつ、失言でした忘れて下さ」大明神様恭也様あ～～！」

「ダメだ」

「あうう～～！ハーケンお兄さんからもなんかいってえーー！」

「む～～～」

『ウエット…だ。メガネシスター、悪いが俺も死にたくないんでな』

「絶望した～～！優しくない世界に絶望した～～！なのはあ～～！」

「はいはい、姉様はかわいそかわいそなのですね。なでなでしてあげましょ」

「つう、私に優しいのは妹だけか……なのは大好きー」

そんな楽しい夕食でしたが、その後とんでもないことが起らると私は、私達家族は微塵にも思ってはいませんでした。

第14話 家族（後書き）

美由希のキャラ崩壊が激しそうな件について

そして一番の難敵は桃子さん。

ハーケンが守護騎士なりユーフィンテバイスなりで実体化したら恭也とガチバトルになりそうな予感しかしねえ

さて、魔法少女バーニングアリサですが、凄いですねえ元祖は。力ツコイいぜよアリサ。今のところ我が家バーニングアリサは中身繫がりで殆ど炎髪灼眼になると思います。武器は刀と銃を予定してますが、刀ともかく銃はどんなのがよろしいと思いますか？

あと籌繫がりで”戦術砲機”ブロンテ・クラフトとか

皆さんの意見・感想をお待ちしております。

短いです。

第15話 スクランブル戦闘民族高町家

s i d e · · · ? ? ?

夜、誰もが寝静まる夜。

高町なのはの寝室では、眠っているなのはを悲しさの色濃い瞳で見る少女が居た。

「……な……の……は……」

優しく寝ているなのはの髪を梳く少女。

その表情はとても柔らかいのに、瞳だけは悲しみに満ちていた。

音が出ないよつに窓を開けて、窓枠に足を掛ける少女。

月明かりに照らされた少女は、頭に一対の獣の耳を生やし、一本の太く柔らかそうな毛並みの尻尾を持っていた。

『ウエット。待ちな、アヤカシフオックス』

少女を呼び止めたのはゲシュペンスト・ハーケンことハーケン・ブロウニングだった。

『「ほなナイト」お出掛けかい?』

「.....」

ハーケンの言葉に、少女は顔を俯かせた。

「...くお...ん...じかん...な...い」

『マイブロザーにちゃんと相談してからでも良いと俺は思ひせりへフ
オックスプリンセス』

「...だめ...くおん...なの...は...めいわく...」

『ブロザーはそんな奴じゃないだ。と言つよつ、わかつてんだろ?
俺達の誰かが欠けたら、ブロザーはたちまちハートブレイクつてこ
とは』

「...で...も...」

少女はもう自分がこの家に留まれないのを感じていた。

今だからまだ自分を保てても、それも長くはないと。

「...ありが...とい...」

少女はハーケンか、はたまたなのはに向けてか、小さく呟いて窓から飛び出した。

『やれやれ、とんだ驚くべきだ。まあ、今も昔も変わらんがな、こいつは』

ハーケンはやれやれと首を振ると

『おこ起きのブリザー・ヒマージュンシードー』

「……んむう……あと……5分、……」

『なにお約束やつてんだー起きのダブリザー・ゲシュ・ペンストキッ

クー!』

とりあえず相棒で久遠の事実を知るなのはを口に起こす事にしての
だった。

si de … 町なのは
＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

両腰にナイトファウルとロングトゥーム・スペシャル、後ろ腰には刃を潰した小太刀を挿して、テンガロンハットを被る。

いつかこうなるとわかつていた為、どこまで効果があるかわかりませんが、火薬に願をかけた塩を混ぜ込んで、弾丸にも『The M i n i o n s o f C t h u g n a』魔力を注ぎ込めば爆裂弾になる術式文字をナイトファウルの弾丸に彫り。

『W e n d i g t h e B l a c k w o o d』

自動追尾弾、敵を捕らえるまで追い続け、急所を仕留める術式文字をロングトゥーム・スペシャルの弾丸に彫り。

絶対数は少ないですが、無いよりはマシでしょう。本当ならイブン・ガズイの粉薬とかがあれば良いのですが、材料が材料です。小学生の私には というより『モベ世界でないリリカル世界では用意出来ない代物です。これで今やれることをやりましょう。』

友人を救う為に法を犯し、本物の銃口を向ける。

私自身には恐怖はありません。

しかし久遠を救えないかもしないことには恐怖を感じます。

私には靈力はありませんでしょ。

魔導がなければまともに戦えないでしょう。

でも私には

「OK、相棒。行きましょうか」

『OK、マイソウルブリザー。マイファミコーダフォックスに力ち
コヒツヒツカ?』

「田指すはハ束神社、でしうね

『オーライ、ブラザー。せひ行こせ』

私はハーケンがコートの襟を掴むのを感じながら作業部屋を出ます。

「どに行くの? なのは

「姉様……」

『こいつは予想外のお客さんだな。ボンソワール、メガネシスター』

ハーケンが手を帽子に添えるように、血の手を頭部に軽くあてが
う。

「通して下さい姉様。私は行かなければなりません

「どいつ?」

目的地を告げてしまえば姉様も着いてくるでしょう。

相手は大妖狐。

魔導師の私でさえ、久遠の攻撃は防げない。

御神流剣士たる姉様でも無傷は免れないでしよう。

傷つるのは、私だけで十分です

「ブリッツアク ッ！」

「なのは！？」

くつー念話はともかく、他の魔法はまだ使えませんか。

10年後の高町なのはでさえ、しばらくの養生を強要される程の負担を強いるブラスター・システム。

一週間の休養では身体はともかく、リンクーコアはまだ無理の様ですね。

痛みの襲った胸をかき握る。

『大丈夫かなのはー？まだ魔法の行使は無理だぜ』

「のようですね。久遠への勝ち田が余計に減りましたね」

「久遠？久遠に何かあつたの！？」

『ウーハット。落ち着いてくれ、メガネシスター』

「ハーケンは黙つて。ねえなのは？なのはは何をしてるの？私達に何を隠しているの？」

「……私は……」

「そこまでだ、美由希」

「ヒーさん」

「父様……兄様……」

そこには道着姿で完全武装した父様が、同じく完全武装の兄様を連れてやってきました。

「ヒーさん。恭ちゃん」

「美由希。人は譲れない戦いをする時が来る。今なのは、その戦いに身を投じている。俺達には、なのはが黙つている事を強要する権利もない」

「恭ちゃん……」

「父様、兄様、私は……」

私が口を開こうとしたところで、父様が頭をガシガシと撫でてきた為、喋ることは叶いませんでした。

「なのは。別に無理に言つ必要はないんだ。ただ、お父さん達にも手伝えることがあるなら、遠慮なく言つてくれて良いんだ。なのははまだ子どもなんだ。なんでもかんでも1人で抱え込まなくたって良いんだ」

「父様……」

どうして父様は何も語らない私に、こうも優しくしてくれるのだろう。

私には、そんな風にされる資格なんてないのに

「なのははお父さんの大切な娘だからな、1つや2つの隠し事くらいあってもなんともないさ。それに、なのはも隠し事をするような歳になつたんだって、嬉しく思うくらいぞ」

「……父様……」

私は帽子を眼深くずらすと、数滴の涙を流した。

そんな事を言つたり思つたりする権利はない。

でも私は父様の言葉に嬉しいと感じてしまった。

本当は抱きついて泣き叫びたい。

でも今は久遠を助けに行かないと

「ほりなのは、背中!」

「に、兄様! ?」

「急ぐんだろ?」

「……はーー!」

私は兄様の背に乗ると、腕を前にまわして落ちないようにします。

「おつとと、なのは、随分重くなつたな…… いて!」

「失礼な。武器と服が重いだけです」

『失言だつたな、エルダーブラザー』

私は中身は元男でも体重や体型くらいは気にするんですよ?

まあ、体型は将来ナイスバディが約束されますが、腐らせるのも磨くのも自分自身です。

「わあ、ちやんと捕まつてこうよ、なのは」

「はーー。」

兄様の背中……とつても広くて温かくて、父様の手のよつに安心して身を委ねられます。

「ちよつとまつて恭ちゃん！私もー。」

「お前はなのはの戦いを知らないから今回はお留守番だ。師範代としてはお前はアレ関係の戦いには前知識無しには出せない」

「つ、とーちゃん」

「俺より美由希を知つてゐる恭也が言つんだ。今回は我慢な？」

「うぐ、な、なのはあーー」

「すみません姉様、私は今回足手まといにしかならないでしょ。そんな立場では私には2人の説得は」

『そつとつ』とだ、メガネシスター。今回は留守を頼むぜ？『哥ノもな？』

デバイスのAIデータを基にして造られたハーケンですから、念話もお茶の子をいさこです。

「みんなひどいよ…………」

『わかつた。久遠が相手なら、僕じゃあなんの役にも立てない。悔しいけど、なのはをお願い』

『OK、フレンズフォレット。ブライザーは任せな』

「行くぞ、なのは」

「いってくんな、美由希」

「いってきます、姉様」

『留守を頼むぜ、メガネシスター？』

「うう、いってらっしゃーい…………」

姉様を残して、私達は家を出ました。

向かう先は八束神社

私達が出逢い。

とら八で久遠の封印が解ける場所。

今一番考えられて久遠と一番縁のある場所。

第15話 スクランブル戦闘民族高町家（後書き）

ついに出撃の戦闘民族高町家の主戦力！

意見・感想、お待ちしております。

第1-6話 結ばれる絆は（前書き）

本気久遠 V.S 高町家です。

第16話 結ばれる絆

side：久遠

久遠は高町家を出た後、八束神社に居た。

神社は死ぬほど嫌いの久遠。だがなのはと永遠の別れをする前に、彼女と出逢ったこの場所に来たかったのだ。

青い石に身体の自由は奪われても、心だけは平氣だった。

そこから初めて見たなのはは、怖かった。

しかし高町家で生活する内、なのははとても強いけれども弱い子であることがわかつた。

傷ついても諦めないとこが、辛くても優しくしてくれるなのはが好きになつていつた。だから自分はなのはとこれ以上一緒に

「……な……の……は」

自らに掛けられた封印。

今はその封印のお陰で感情も押さえつけられているからいい。けれど封印が解ければまた自分は憎しみに駆られ、暴れる妖狐になつてしまふかもしけない。

子狐に戻れない程に妖力も溢れている。

それが解き放たれてなのはを傷つけてしまう前に自らの命を断つ。
それが久遠の選択だった

「久遠！」

でもなのははそれを許してくれない。

なのはは優しい子だから、ハーケンの言う通りに相談すれば一緒に解決策を考えてくれたかもしない。

でもただでさえ傷だらけで様々な物を背負っているなのはに、これ以上何も背負わせたくないのが久遠の意志。

だから自分の事は自分で決着をつけないとならない。そう選択した。

Side：高町なのは

八束神社に着くと、境内には月を見上げる久遠。

その瞳はとても口では表現出来ない悲しみが見えたよつた気がしました。

「久遠！何故です！？何故何も言わずに私の前から居なくなつたるんですか！」

兄様の背から飛び降りるように私は境内に立ち、久遠の背中へと葉を投げかける。

「久遠……な……のは……一……緒……駄……目」

「そんなことはありません……貴女を蝕む祟りは、私が祓つてみせます……だから……！」

「……無……理……な……の……は……靈……力……な……い……」

「たとえそうでも、必ず貴女を祟りから救つてみせます……！」

今引けば、久遠とはお別れになつてしまつ。それも永遠の。そう感じじる

「こないで！」

久遠が雷を放つ。

それは子どもサイズでとても威力は低い物。それでも子どもののはには十分な脅威となる。

「なのは！」

15

ナイトファウルのフェイクリッパーを展開して正面から雷を断ち切る。

「ううう」ともあらうかと、今夜のリッパーも服も耐電絶縁処理は完璧に仕上げてきました。ちょっとやせつとの雷撃くら一なら防げはします。

「久遠、貴女がどう言おうとも、私は貴女を連れて帰ります」

「なのは……なん……で……」

貴女は私の友達で家族だからです

ともだちかぞくうつ

「久遠！？」

急に身体を焼き抱く久遠。その身体からは靈感のない私にもはつき

り見える黒いオーラ。

兄様と父様が身構えるのが気配でわかります。

久遠の身体から稻妻と黒いオーラが溢れ、稻妻の閃光は久遠を照らし包み、私の視覚から隠してしまった。

星空は曇が立ち込め、稲妻を発し、明らかに空気の雰囲気が変わつていいく。

重圧感
ない。

閃光が收まれば、久遠が居た場所には

「なのは……あれも……久遠、なのか?」

元々なのはと同じ年くらいの、獸耳や尻尾を生やした女の子だった。久遠は、今は美由希や恭也に近い年齢くらいの女性の姿になつていいのだ、なのはと久遠の会話から、作業の少女が久遠だと薄々察していた恭也でも、田の前で急に少女から女性に姿を変えられたら、

「…ええ、約300年前に封印された大祟り妖狐 久遠。でも久遠は何も悪くはありません。その当時の人間達の所為で、久遠は大切なものを奪われて、怒りと憎悪に捕らわれ、狂ってしまっただけ。本当の久遠は人見知りでおとなしいだけの狐妖怪。祟りを追い払えば、久遠は元に戻るはず」

「祟り…か、超能力や自動人形や魔法とは戦つたことはあるが、果たして祟りなんていう魔法以上に超怪奇的なものに御神流が通じるかどうか……」

御神流師範代で、ついこの間魔法と対峙こそしたが、あれには実体もあつたし、刃で斬つたわけでもなく、鋼糸で動きを止めた程度だ。祟りなんていう日本ではある意味で魔法的な、実在すら曖昧なものに御神流が通じるか否か考えてしまうのは仕方がないことだらう。

「久遠自体には実体があります。祟りは私の方でなんとかしてみます。兄様と父様は」

「久遠の動きを止めるか、時間稼ぎをするか、そのどちらかぐらいか」

「いえ、私に一度だけ久遠に張り付く隙を作つていただければ」

父様の案を遮つて私は言いました。

高町なのはが砲撃で想いを伝えるなら、私は己自身の肉体を用つて想いを伝えるしか思い浮かべられません。

もはや高町なのはでもなんでもないような戦い方しか出来ない私ですが、それでも久遠を救いたい気持ちは本物です！

『レイジングハートも魔法も使えない今のブラザーには分の悪い賭けだが、それでもやるのか？』

「当たり前です。久遠を救う為ならば。それに貴方らしくもありませんよ？ハーケン」

『フツ、そうだな。OK、ブラザー。俺も分の悪い賭けは嫌いじゃないぜ、こいつがな。そういうわけだファーザーアンドエルダーブラザー、覚悟は出来るかい？』

「愚問だぞハーケン。妹の征く道くらいは切り開いてみせるぞ」

「なのは、言うからには、必ず成功させるんだぞ？そしてみんなで家に帰つて朝ご飯にしよう」

「はい！兄様、父様」

私達は身構えて久遠と対峙する。

その瞳は恨み、怒り、憎しみ

普段の久遠からは考えられない感情ばかりが見えた。

一筋の雷が久遠に落ちる。

久遠の背の黒いオーテが更に膚れ上かる。

人の姿でも鋭い爪を振り上げて叫び声を上げながら襲い掛かってくる久遠。その先には私が居た。

「くつ、結構重いな。だが娘に手を出すなら、この高町家大黒柱高町土郎の屍を踏み越えて往つてからにして貰おうか！」

しかし、間に割つて入つた父様が小太刀をクロスさせて久遠の突進を止める。

「父さん！」

兄様が一瞬かき消えたかと思えば、一瞬で久遠の右横に居た。

「はあっ！」

兄様は小太刀を抜いたが、私が見えたのは、最初の一刃が反応した
久遠の腕を薙いで払う軌道のみ、あとはいつの間にか背後にまわつ

ていたり、また右横に戻ったかと思えば左側に居たりと、そして久遠を襲つた斬撃は4つ。

たまらず久遠は父様から離れましたが、身体どころか服にすら傷はなかつた。

「小太刀」「刀御神流 奥技之六 蘿旋」

「ダメだ父さん。まるで鉄板にでも打ち込んでいるような硬さだつた」

父様が技名を述べ、兄様が打ち込んだ感想を述べた。

兄様に連撃を入れられた所為か、久遠の警戒心が急激に高まるのを私は感じました。

「なるほど、となると久遠には悪いけれど、少し俺達も本気で行かないとな」

父様から放たれるプレッシャーは、久遠の放つプレッシャー どこか野性的な荒々しさとは違う、明確な、人としての指向性のあるプレッシャー。後ろから感じるだけでも冷や汗を搔く程のプレッシャー。これが御神流剣士、不破としての父様ですか

兄様からも見劣りないプレッシャーを感じます。

なるほど、これはかなり強烈です。

何度も死ぬ思いをした私は平氣でいられます、兄様が姉様を置いてきたのは、もしやこれが理由でしょうか

『凄まじいフレッシャーだな。メカニカルの俺でもビンビンに感じるヤバさだぜ』

「ええ

ハーベンに応えながらナイトファウルを構える。

勝負札は一枚、切り札は一枚

ただの博打でしかないけれど

「久遠……！」

必ず助ける！必ず！

=====

side:

「ああああああああ……」

久遠が雷撃を放つ。

標的はなのは

しかしなのはは横に転がることで雷撃を回避した。

次に動いたのは士郎。

10m近くありそうな距離を一瞬で詰めた。

幾閃もの煌めきが久遠に打ち込まれた。

御神流 虎乱

しかしながらが鍛練するものは勿論、恭也や美由希が振るう虎乱以上の速さを持ち、恭也は一瞬出掛かりの動作が斬撃でなければ、美由希の母、美沙斗の放った御神流裏 奥技之參 射抜と勘違いしそうな程速かつた。

恭也は負けじと神速で、士郎の虎乱を受けてたらを踏む久遠を眼前に捉える。

傷つけるのが、殺すのが目的じゃない。

小太刀を久遠に打ち込む。

久遠は腕で防いだが、次の瞬間飛び退いて、防いだ右腕を抑えていた。

御神流 徹

衝撃を表面ではなく裏側に通す撃ち方で威力を『徹す』打撃法。素手や刃のついていない武器でも簡単に人を殺すことができる技。加減して放てば相手の打撃面を痺れさせて使えなくすることが出来る。

狐だつた久遠に、対人戦法が通じるかと思つたら、なまじ人型の分、通じることに恭也は確信を持った。

鋼糸を懐から取り出して投げつける。

久遠が鋼糸を防御しようと振り上げた左腕を絡め取る。

「父さん！」

恭也が士郎に叫ぶと、士郎も鋼糸で久遠の右腕を絡め取り、同時に引っ張り上げる。

久遠は負けじと脚で踏ん張る。

御神流剣士2人分の力に拮抗する力に士郎も恭也も僅かに驚くが、そういう物だと今は自分を納得させる。

「…」

父と兄の切り開いてくれた活路に、なのはは飛び込む。

転ひそうになる脚を動かして
久遠に向かって駆ける

久遠から雷が迸る。

空からも稻妻が落ちる。

しかし感電を恐れずに、士郎と恭一は鋼糸を引く手を止めなかつた。

指が空焼ける臭しかしてモ^モ離^モさ^ナい

たのはを信じて
意地でも2人は離さない

なのはは放電される雷の中を、リッパーで受け流し、切り裂きながら進む。

この雷には久遠の妖力が混じっていて、魔力変換資質の電気と似たような変換のされ方をしている。

空から降る自然の稻妻は斬ろうとは思わないし、まず絶縁処理した
リップーでも感電するだろう。

しかし久遠から放たれる雷は、この僅かにエーテルを纏つリッパーで斬り裂ける。

「正気に戻りなさい！久遠！…」

また正面からきた雷をフュイクリッパーで斬り裂く。

もう腕を伸ばせば届く距離に久遠が居る！

「ああああああああ…！…！」

「くつつああああああああ…！…！」

「「なのは…！」

『よせなのは…！』んな電流受け続けたら脳天焼きされるぞ…！』

放電する久遠を抱き締めたなのはは、超至近距離から直接久遠の雷を受ける事になった。

なのはの姿に叫ぶ士郎と恭也、そして徹底した耐電絶縁処理を施されたハーケンが耳元で叫ぶ。

零距離ディバインバスターはこんな物だらうかと一瞬思いながらも、飛びそうになる意識を氣合いで維持して、なのはは久遠を仰ぎ見る。

すっかり大人の久遠は、今はなのはよりも大きい。自然とそういう形でなのはは久遠を見る事になる。

「久遠……私はいつも無様で、本物の高町なのはには程遠い星屑の存在です」

掠れゆく声でしつかり伝わるかどうかはわからなくても、なのはは伝えたかった。

「私は自分を取り巻く絆に自信がありませんでした。それは高町なのはが手に入れて必然の絆でしたから」

家族やアリサ、すずかにユーノ。

それらは魔法少女高町なのはが手に入れて必然の絆。

「でも私にはアリスが居た。そして貴女が私の前に現れた……」

アリス

本来ならば存在しない私のファミリア。

久遠

リリカルマジカルな世界には登場しない狐妖怪。

「私は貴女のお陰で救われました。私が紡いだ私だけの絆 そして気づかされた。たとえそれが必然でも、私が紡いできた絆は本物だという事を……」

久遠に語り続けるのはの身体から、若葉色の光の粒子の様な物が溢れ出し始め、それは神社の境内や裏手の森からも若葉色だつたり青だつたりする光の粒子が、一様にの周りに集まっていく。

「！」これは

「傷が……治つていいく……」

『マジか……エーテル係数計測限界値突破、数値化出来ねえ。まさかフレアー現象なのか？一体何が始まるんだつてんだ……』

side・高町なのは

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

「！」これは

気づけば真っ白な空間に私は居ました。

「ハーケン？ 父様？ 兄様？」

肩に居たはずのハーケンも、後ろに居たはずの父様も兄様も居ません。

「はつ ！ 久遠！ ？ 久遠！ ！」

「なのは……」

声がした後ろを振り向けば、そこには久遠が居た。

「久遠！ ！」

私は久遠を一度と離さないよう、キツく抱き締めた。

「久遠のバカ！ アホ！ ボケ！ 駄キツネ！ ！」

「『めんなさい、なのは』

私を撫でてくれる久遠の手は、父様とは違つて細々していて、でも代わりにその細々しい指で髪を梳かれる心地良さが、まるで昔、私

が私になる前、前世の母さんや母様に撫でて貰った時のように、子どもが寝付くまで髪を梳いてくれる心地良さを久しぶりに感じた。

「久遠……次にこんな事をしたら零距離でスター・ライト・ブレイカーを撃ち込みますからね！」

「うつ、なのはがこわい……」

ピクンと跳ねた久遠の耳と5本の尻尾。

「当たり前です！ 一体どこぞのダフォックスの所為で2回もフェイント・テスター・ロッサと戦う前に電撃浴びにやあならんですか！！」

「クウ……『めんなさい…』

しゅんとして垂れ下がる耳と尻尾。

かわいい。勢いが削がれてしまつ程の破壊力ですが、ここは心を鬼にします！

「いいえ！ タダじや赦しません！」

「クオン！ ？ やだやだ！ なのはこわいーー！」

逃げようとする久遠ですが、がつちり固めている為、走つても振り解こうとしても、私は離れません。

「久遠……」

「クオンー? な、なのは……」

私は久遠の耳元で久遠の名を囁く。

動きを止めた久遠の頬に手を添える。

「ク、クウ……く、くすぐつたい……」

「久遠、私の大切な久遠……」

私達の足下に展開する桜色のニッシュ式魔法陣

今は胸の苦しさも忘れる事が出来ます。

「なのは…? かぜ、ひいたの?」

じてんと首を傾げる久遠の愛らしさを脳内フォルダーに刻み込みながら、前世でも今世でも初めてを久遠に捧げます。

「くみゆ！？！？」

目を見開く久遠を超至近距離で脳内フォルダーに保存しながら、瞳を閉じる。

舌を入れて縮こまつて逃げようとする舌を絡める。

「んつ あ はあつ んつ、あつ あう うん」

空気を求めて開く久遠の口の中を舌で犯し続ける。

自分のと久遠の味がフレンドされて、甘露のような甘味を感じる。

そこには久遠の鋭い大歯で傷つけた舌から湧れた血が混じる

「んく……」「ク……ふあつ……」「

離れる私達を紅い橋が繋ぐ。

もつと久遠を感じていたいですが、今は絶賛バトル中ですし、これ以上は18歳未満お断りになりそうなので、名残惜しいですが仕方ありません。

「久遠、貴女は私が死するその時まで、私と共に」

「なの……は……」

使い魔契約

本当はする必要なんてないのかもしだせんが、祟りから久遠を引き剥がすのには、私の側に置いてしまつくらいした思いつきました。

「なのは……」

「久遠」

大人から子どもサイズに戻った久遠を強く抱き締める。

久遠もぎこちなくとも私を抱き締め返してくれた。

互いの心臓の音が間近で聞こえる。

私も久遠もここに居る。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

次に気づいたら私は神社の境内に居ました。

目の前には黒い靄のような存在。

久遠に取り憑いていた祟り。

『なのは?その姿は何だ?ダフォックスはどうした?』

ハーケンが驚くのも無理はなかつた。

強烈な発光現象が収まつた途端、久遠は消え失せ、代わりになのはが久遠の着ていた巫女服を身に纏い、茶色の獸耳と尻尾を生やしていたのだから。

『なのは』

「ええ、征きましょう久遠。貴女を縛る祟りを断ち斬る為に」

久遠に応えながら腕を前に翳す。

すると広げた手の先に展開する幾何学模様 ラギアス式魔法陣。

『ラギアス式魔法陣！？』

「出でよ、デイスカッター！フレイムカッター！」

私の魔力変換資質は火、そして久遠の雷は魔装機神では炎系低位に位置する属性。

それで呼び出したフレイムカッター。

そして周りの精靈達が力を貸してくれたお陰で呼び出せたサイバスター・モデルのデイスカッター。

「久遠を縛るすべての怒りも憎悪も悲しみも！アカシックレコードから消し去る！」

私はディスカッターを頭上で振り回すと、それを地面に突き立てる。

足下に展開する青い輝きを放つラギアス式魔法陣 一重の円の中に星の刻まれた魔法陣。

そこにさらにフレイムカッターを突き刺す。

エーテルを伝い、魔法陣がその姿を変える。

正しい星の形が一部崩れた。

『エルダーサインだと…?』

それは邪悪なる者を討ち祓う聖なる印。
五芒星の結印の輝き。

「第4の結印は『旧き印』 - エルダーサイン - 我、脅威と敵意を祓う者成り! 「ール・フェニックス! !」

五芒星に変換したラギアス式魔法陣から、巨大な炎の鳥が、不死鳥が顯れた。

炸裂弾刻印のされた弾丸をすべて宙に投げる。

弾丸は私の周りに滯空する。

脚にブーナを込める。

「 断鎖術式壹号ティマイオス! 弐号クリティアス! 術式解放、
時空間歪曲。 エクスプロージョン
爆裂! !」

足下が炸裂し、私は飛び出す。

後ろから弾丸を飲み込んだ炎の不死鳥が迫り、私を飲み込み、その輝きを赤からエーテルに溢れた青に変えた。

「アカシック！バスター——！」

私達は飛翔 - と - ぶ、負の源を断ち切る為、未来の為に！

『ああああああああ——！』

「でえええやあああ——！」

雷や稻妻で一種の結界を作る祟りだが、不死鳥を身に纏う私達には届かない！

アカシックバスターの直撃した祟りを突き抜け、私は祟りの真後ろに僅かに断鎖術式の勢いで地面を滑り、術式の解かれたディスカッターとフレイムカッターを地面に突き刺す。

浄化の炎に焼かれた祟りは消え去った。

それと同時に私達の融合も解ける。

「なの……は……」

「お帰りなさい。久遠」

「うつ、つつ、なのは……つ……なのはあ……うつ、ああああ——！
——！」

私に抱きついて涙を流す久遠を抱き締めて、久遠の頭をそっと優しく、慈しみと愛を込めて撫でる。

まるで私達の結ばれた絆を世界が祝福してくれるかのよう、朝日が私達をただ暖かく照らしだしていた。

To be continued...

第1-6話 結ばれる糸は（後書き）

こんな感じに終わってみました。

やつぱりとらハ士郎と恭也は化け物か？

ようやくこの小説の趣向の一片が書けました。

久遠×なのはの需要はあれど、久遠×シユテル風つてまたそそられませんか？

なんか弱いなのはの筈なのに勝手に強くなつてく星光なのははなんなんだろ？

てーてれつてつてー てれつてー
久遠が支援に加わりました。 ムゲフロ風。

意見・感想、お待ちしております。

なげえなあ……まだ無印4話にもいかねえ……

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4448z/>

星光の魔王-シュテル・ザ・エルケーニヒ-
2011年12月27日01時49分発行